る日に。」

【帝】ミカド。御門の義。天皇の御事を申す。こゝは花山院。

【さう〳〵しくや思し召しけむ】さびしく思し召されたのであらう。

「さう〳〵し」は、「さび〳〵し」の音便。あるべき物事がなくて、物足らぬ心地のすること。物さびしいこと。

宇津保物語の藏開、上に「參られやすると思ひしに、さもあらざりしかば、いとさう〳〵しくなむありし。」

源氏物語の帚木の卷に「君のうちねぶりて言葉まぜ給はぬと、さう〳〵しく心やましと思ふ。」

【殿上】テンジャウ。「デンジャウ」と濁らぬやう。禁中清涼殿の殿上の間。公卿の詰所。こゝに伺候する資格のある人を殿上人といふ。

【昔恐しかりけることどもなどに申しなり給へるに】「昔恐しかりける事どもなど申しあひ給へるに」といふのと語趣にどれだけの差があるかを生徒に聞いて見たい。これは、いろ〳〵物語などしあつてゐる内に、いつしか話題が昔恐しかつた事などに及んだのである。

【いとむづかしげなる夜なめれ】たいそう氣味わるさうな夜のやうだ。

「むづかしげ」は、こゝでは、きみわるさうな、恐しさうな、などの意。

源氏物語の夕顔の卷に「たゞあなむづかしと思ひける心地、皆さめて。」

【かく人がちなるだに】このやうに人が多くゐてさへ。

「人がち」は、人數の割合に多いこと。

榮華物語、嶺月に「人がちにていみじきだに、猶いと悲しきに。」

【けしき覺ゆ】こゝは、ものおそろしい氣持がする、といふほどの意。

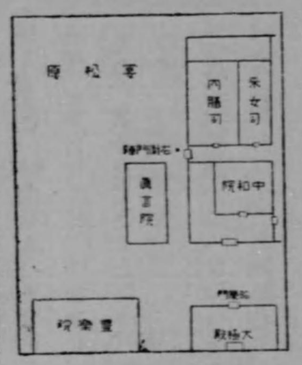
【さあらむ處に一人往なむや】そのやうな處（物離れた處）に一人で行けるかね。

【え罷らじ】「罷り得じ」と同意。ようまゐりますまい。

【さる所おはします帝】さういふことを興がらせたまふ御性質のおありなさる天皇。花山院には、さやうな御性質があらせられたと見える。

【道隆】前の「中關白殿」參照。

【豐樂院】ブラクキン。古昔大内裏八省院の西にあつて一區劃をなし、節儀・大宴會を行はせられたところ。南北百三十六丈四尺、東西五十五丈四尺、外郭南面の正門を豐樂門（大きさ五間、戸三間）、郭門の南正門を儀鳳門といひ、その東側に延英・觀德・顯揚堂、西側に招俊・明義・承觀堂があつた。正面の豐樂殿を正殿とし、その左右翼に栖霞、霽景樓、北に清暑堂、東西に東華・西華の兩堂があつた。これらはいづれも唐風の建物で、廻廊によつて連絡してゐた。康平六年（一七二三）炎上後、再建されなかつた。



【道兼】前の「粟田殿」參照。

【仁壽殿】ジジュデン。平安京大内裏に於ける皇居の一殿。假名裝束抄にはジジウデン、拾芥抄にはジンジュデンと訓じてある。初は天皇の常の御座所であつたが、清涼殿が御座所となつた後は、内宴・相撲・蹴鞠・觀音供などの行はれる所となつた。内裏の中央に位し、紫宸殿の北と承香殿の南との間にあつて、西に清涼殿、東に綾綺殿がある。故に中殿ともいひ、又東殿ともいつた。

【塗籠】ヌリゴメ。周圍を壁で厚く塗りこめ、あかりとりをつけ、妻戸があつて出入のできる室。納戸（なんど）の類で、衣服・調度など手近の品物を納めおき、又寢所にも用ひる。こゝでは、仁壽殿の儀式の時の調度などを入れおく倉庫やうのものをいふ。

宇津保物語の藏開、上に「寢殿一つ、めぐりはあらはにて、ぬりごめの限り見ゆ。」

【道長】前の「御堂關白」參照。

【大極殿】ダイゴクデン。大内裏朝堂院の正殿。卽位・賀正等の大禮を行はせたまふところ。古くは大安殿、又「おほやすみどの」ともいつた。應天門を正門とし、南面、東西十一間、南北四間（九間二面、廂を加へて二間四面）、正面に石階三所を備へ、屋根は碧瓦を葺いて、鴟

尾(シビ)を擧げ、內部は甃砌(シキガハラ)を敷き、中央の間に高御座(タカミクラ)を立てた。

大極殿は古く皇極天皇の御頃からあつた。平安京の頃は、國儀大禮は必ずこゝで行はせられたが、その後屢、炎上した。高倉天皇の治承元年(一八三七)の炎上後、再び造營せられなかつた。

【よその君達】　そこに並みゐて、これを承つた君たち。

【便なき事】　不都合なこと。あるまじきこと。

「便(ビン)なし」は、つきなし、似あはしからず、不都合なり、あるまじきことなり、けしかり、あさまし、などの意。

落窪物語卷一に「うしろみといふ名、びんなしとて、あこぎとつけたまひき。」

【承らせ給へる殿ばら】　道隆・道兼及び道長。

「殿ばら」は身分高き人々。又、男子の敬稱。

宇津保物語の梅花笠に「舞人は、とのばらの公達・殿上人。」

【御氣色變り】　ミケシキカハり。御樣子がかはつて。お顏の色がかはつて。

「氣色」は、けはひ。やうす。ありさま。かほいろ。

宇津保物語の嵯峨院に「宮いとみけしきあしくて、青くなり、赤くなり、物も聞えたまはず。」

【益なしと思しけるに】　そんなことはむだな事だとおぼしめしてゐたのに。

「益」(ヤク)なし」は、かひなし、無用なり、むだなり、無益なり、などの意。

源氏物語の椎本の卷に「さばかりの事に妨げられて、長き夜の闇に消えなむがやくなきを。」

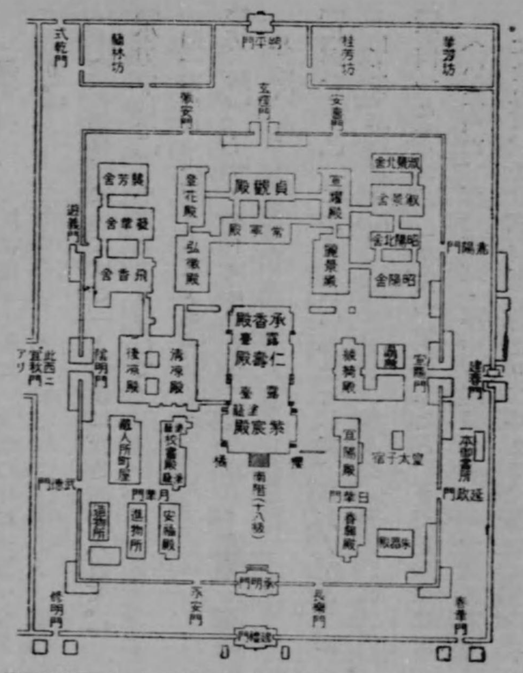
【つゆさる御氣色もなくて】　少しもそのやうな御樣子もなくて。

【私の從者をば具し候はじ】　自分の供人を連れたりはいたしますまい。

「從者」(ズサ)は、ともをする人。ともびと。又、ジュウシャともよむ。

大和物語卷四に「かゝる心ばへにてふりはへ來たれど、わがむつまじきずさもなし。」

【この陣の吉上まれ云々】　この陣に詰めてゐます吉上にもあれ、瀧口にもあれ、誰でもよろしうございますから、たゞ一人だけ昭慶門まで送つてゆくやうにとお命じ下さいませ。


式乾門
玄輝門
玄化門
玄象門
玄鑑門
玄武門
玄明門
玄福門
玄陽門
玄輝

【手箱】 テバコ。手まはりの小道具などを入れる箱。
保元物語、新院御遷幸の條に「文庫の中に手箱一合あり。」
紫式部日記に「てばこ一よろひにたきもの入れて。」

【小刀申して】 小刀を取り申して。
回一本には「小刀さして」とある。

【今二所】 イマフタトコロ。もう二人のお方。道隆と道兼とをいふ。

【にがむ〳〵】 にが〳〵しいかほをして。しぶ〳〵と。ふしようぶしように。

【子四つと奏して】 「子四つ」といふこと、まだ正確には考へいたらぬ。落合直文・小中村義象合著の「大鏡詳解」によれば、「子は夜の十二時より二時まで、四つは十時より十二時までをいふ。丑は夜の二時より四時までをいふ。」とあれど、これでは、十二支に配した時の名と、單に數を以ていふ時の名とを合はせて「子四つ」といふことが、筋が立たぬやうに思はれる。
愚考では、「子四つ」の「四つ」は、「丑三つ」の「三つ」の類でなからうかと思はれる。即ち「四つ」は時をきざんだ「刻」の類ではなからうか。日本百科大辭典に「宣明暦採用（清和天皇四年、（皇紀一五二二年）以後の王朝時代に於ける時刻法は、一晝夜を四十八刻（或は五十刻）に等分せるものの如し。即ち一辰刻は四刻（或は四刻六分一）より成り、子の初刻、丑の初刻等に九つ・八つ等と鼓を鳴らし、各辰刻の間は一・二・三・四と刻數だけ鐘を打ちならしたるものの如しといふ。云々。」とあるに從へば、「子四つ」は子の終に近い時となる。これで一通り說明がつくやうではあるが、しかし、それでは直に丑へつゞくこととなり、話し合つてゐた時間が餘りに短い感しがする。
或は前說に從つて、「子でござる、即ち四つ時でござる。」といふ意味に見て、夜の十二時即ち子の刻、即ち四つ時の終りとでも見るか。さすれば十二時頃に話がはじまつて、二時頃から實行につくことになる。この邊如何。猶考へて見たい。若し御名說があつたら伺ひたい。
この時を奏することは、內豎がつとめる役である。

【かく仰せられ議するほどに】 「仰せられ」は、花山院が。「議する」は、殿上伺候の皆々が。

【右衞門の陣】 ウヱモンのヂン・古、宜秋門の傍にあつた衞所。
國史大辭典に「右衞門の陣は大內裏外郭門の一。西面の中門ともいふ。拾芥抄に、宮の西の僻仗門をいふ。內郭の陰明門に對し、中和院の後と內膳司との間にあり。大きさ三間、南墻四十八間、北墻六十三間、門外に南北の兩舍を設く。云々」とある。

【承明門】 シ・ウメイモン。國史大辭典に「承明門は大內裏內郭門の一。又、閤門と稱す。拾芥抄に謂ふ之南西內門とあり。內裡の南正門にて、外郭の建禮門に相對し、去ること十丈。大きさ五間、戶三間にて、檜皮屋・圓楹なり。云々。」とある。

【それをさへわかたせ給へば】 目的の處へ行く道筋をさへ、それ〴〵區別して仰せ出されたから。

【しかおはしましあへるに】 勅命のまゝに、それ〴〵お出かけになつたところが。

【陣まで念じておはしたるに】 恐しいのをがまんして右衞門の陣までおいでになつたところが。
「念じて」は、たへしのんで。こらへて。がまんして。
枕草子卷八に「中の御社のほど、わりなくくるしきを念じてのぼるに。」

【宴の松原のほど】 宴の松原のあたり「宴の松原」、（エンノマツバラ）は宣陽殿の北、掃部寮の西、近衞の南、朱雀の西にあつた園の名であるといふ。
拾芥抄には「宣陽殿北、掃部寮西、近衞南、朱雀西歟。」とある。

【その者ともなき聲どもの聞ゆるに】 人間とも何とも形容の出來ないあやしいもののこゑがきこえたので。

【すぢなくて】 せんかたなくて。せんすべなくて。
枕草子卷八に「あまりあかくなりにしかば、葛城の神、今ぞすぢなきとて、わけておはしにしを。」

【露臺】 ロダイ。屋根のない臺。こゝは、禁中の仁壽殿にある床張の場で、亂舞などのある所。
枕草子に「ろだいの前に植ゑられたりけるぼうたん。」

【わななく〳〵】 をののき〳〵。恐る〳〵。ぶる〳〵とふ

るひながら。

枕草子巻五に「のり弓にわななく〳〵久しうありてはつしたる矢の、もて離れて異方へ行きたる。」

【砌】　ミギリ。軒下などの、雨垂れ落ちるところ。

【簷とひとしき人】　簷（ノキ）の高さと同じくらゐの人。

「簷」とは、屋根の裾の垂れて四方にさし出でた部屋をいふ。「檐」とも書く。

萬葉集巻十一に「わが宿ものきの下草生ふれどもこひわすれぐさ見れどいまだ生ひず」

【ものも覺えで】　あまりのおそろしさに、何ものも目に入らないで。無我夢中になつて。

【身の候はばこそ仰言も承らめ】　身體があつてこそ御おほせごとも承り、御奉公も仕られる、生命がなくては、何ともしやうがない。

【御扇を叩きて云々】　花山院が御笑ひ遊ばしたのである。御瀾達な院の御様子が、さながら目に見るやうに感ぜられる。

【いとさりげなく事にもあらずげにて云々】　さやうな様子もなく、何事もなかつたやうなふりをして歸つて來られた。平氣のへいさで歸つて來られた。

さきの兩人の恐怖ぶりに引きかへて、その豪膽なさまが、一語一語實によく描かれてある。

【いかに〳〵と問はせ給へば】　どうだ〳〵、大極殿まで行つて來たかとおたづねになつたところが。（花山院が入道殿に。）

【いとのどやかに】　たいそうものしづかに。たいそうおちつきはらつて。

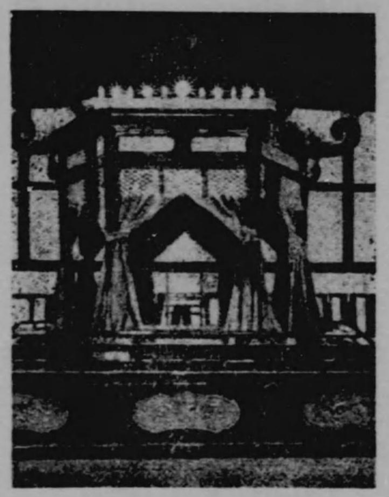
「のどやか」は、こゝでは、おちついてゐるさま。うはつかぬさま。

【取具して】　トリグして。とりそろへて。

源氏物語の玉葛の巻に「これはかれはと取具して入る。」

【たゞにて歸り參りてはべらむは云々】　「大極殿にまゐりましただけで、そのまゝ歸つてまゐりましては、たしかにそこまで行つたといふ證據がございませんから。」といふほどの意。

【高御座】　タカミクラ。御即位・朝賀等の大儀に際して、天皇の着御あらせたまふ御座。古は大極殿に、今は紫宸殿の中央に安置されてゐる。



三層の繼壇の上に八角の屋形を立て、屋裏中央に大鏡一面を水平に懸け、蓋に大鳳の像を飾り、八角の蕨手（ワラビデ）に小鳳と玉幡とを附し、軒毎に鏡三面と、その間に唐草の飾とがある。周圍には紫の帳をかけ、屋形の中に御椅子（イシ）を置く。

【つれなく】　こゝは、すげなく、そしらぬかほして、などといふほどの意。無表情のさまにいふ。

源氏物語の夕顔の巻に「人にものおもふけしきを見えむははづかしきものにしたまひて、つれなくのみもてなして。」

【いとあさましう思し召さる】　たいそう御驚歎あらせられた。

「あさまし」は、意外のことに驚きあきれるさま、肝のつぶれるさまなどにいふ語。（善きにも惡しきにも通じていふ。）

枕草子巻五に「下にうちゐて何と見えざりしも、藏人になりぬれば、えもいはずぞあさましうめでたしや。」

【こと殿たち】　他の殿がた、即ち道隆・道兼をいふ。

【御氣色は今にも直らで】　これは語句を隔てて「物もいはでぞ候ひ給ひける。」につゞくので、その中間が挿入の形になつてゐることを子細に示されたい。

【感じのゝしられ給へど】　感心して、聲高にもてはやしていらつしやるけれども。

「のゝしる」は、大聲でさわぎたてること。聲高にもてはやすこと。

竹取物語に「車持のみこは、うどんぐえの花持ちてのぼりたまへりとのゝしりけり。」

土佐日記に「とかくしつゝのゝしるうちに夜ふけぬ。」

「られ」は、こゝでは崇敬の助動詞。

【美ましきにや、又いかなるにか云々】 美ましいのであらうか、又、どういふわけであらうか、うんともすんともいはないで、だまつていらつしやつた。

【つとめて】 その翌早朝。單に早朝といふ義もなるが、ここは翌早朝の意。

伊勢物語に「その夜南の風吹きて、波いと高し。つとめて……。」

【藏人】 クラウド。禁中近習の職。機密の文書及び訴訟を掌り、又、天皇の御衣・御膳を始め、すべての御起居に供奉し、傳宣・進奏及び除目・諸節會の儀式その他殿上に於ける一切の事を掌る。

「藏人して」は「仰言ありければ」に續くことを、思ひ誤らせぬやう。藏人に削り屑を持たせ遣はしたのではない。

【おしつけて見たうびけるに】 その削りあとへ押しつけて見られたところが、といふ意。

「たうび」は「たまひ」に同じ。

【つゆ違はざりけり】 すこしもちがはなかつた。削屑がぴつたりと削りあとに合つてゐたことをいふ。

「つゆ」は、いさゝかも。すこしも。ちつとも。

枕草子卷一に「つゆたがふことなかりけり。」

源氏物語の桐壺の卷に「つゆまどろまれず、明かしかねさせたまふ。」

【いとけざやかにて侍るめり】 大そうきつぱりとしてゐるさうだ。

「けざやか」は、さやかに同じ。あざやか。鮮明。

蜻蛉日記卷下に「いとたとしへなく、けざやかにいへば。」

枕草子卷五に「もとゆひのむらご、いとけざやかにて。」

【末の世にも云々】 後世の今になつても、なほ、その削りあとを見る人は、道長のこの大膽ぶりに驚いて呆れかへつて取りさたする。

こゝの「あさまし」は、あきれかへるさま、興のさめるさま、などにいふ。

源氏物語の帚木の卷に「君たちあさましと思ひて、そらごととて笑ひたまふ。」

8 挿圖

平安京大内裏の一部

文中にある右衛門の陣・承明門・仁壽殿・殿上・露臺・豐樂院・昭慶門・大極殿・宴松原等の位置は、この挿圖によつて説明せられたい。

九　法成寺の造營

1　解題

藤原道長は世に「御堂關白」と稱せられたが、本文はその「御堂」卽ち法成寺造營の時の模樣を描いたもので、榮華物語の十五「うたがひ」の巻の中段を採つたのである。「この世の事は、今は、たゞこの御堂の事をのみ思しめさる」といふほどに、道長はじめ藤氏一門、その他上下一般が全力を注いで造營の事に從つたといふ。起工は後一條天皇の寛仁三年（一六七九）四月の初とおぼしく、落成卽ち御堂供養は同年十月十九日よりと榮華物語に記してゐる。

出典「榮華物語」（四十巻）は、宇多天皇の御代から堀河天皇の寛治六年（一七五二）二月までの事を記した歴史物語で、また「世繼」とも稱した。天皇十五代、殆ど百五十年間に亙つてゐるが、著者の記さうとしたのは、專ら藤原氏の事で、天皇の御事はそれに關係ある筋のみを略記したに過ぎない。

書名の「榮華」といふのは、「世繼」といふより後に附したもので、藤原氏殊に道長の榮華を記したものであるからのこと。「本朝通鑑」には夙く「榮華四十巻記道長繁榮」と記してゐる。故に歴史とはいへ、當代一般の歴史としては見がたい。

この書は契沖が上下二篇として、その各篇の著者が別であると說き出してから、學者は多くその說に從つてゐる。上篇は初巻から三十巻「館林」までで、著者は赤染衞門であるといひ、下篇は三十一巻以下の十巻で、何人か書き繼いだのだといふ。或は上下とも男子の筆だといひ、また女子の筆だともいひ、定說がない。全篇の組立といひ、文章といひ、決してなみ〳〵の筆でなく、必ず當世名を得た文豪のしわざであらう。元祿の頃安藤爲章は「榮花物語考」に男子說を唱へたが、着想修辭の緻密穩健なところは女子らしい。或は大鏡と同じく藤原爲業說もあるがいかゞ。要するに、その何人の著なるか定め難いが、當代上流の事を敍した歴史として、大鏡と相並んで雙璧といふことが出來よう。

（以上「國文叢書」本―池邊義象氏の解題摘要）

註釋書

榮華物語抄繪入　九册……（作者未詳）（或云西三條實隆）

榮華物語考　一冊……伴信友
標註榮華物語抄　六冊……小中村義象　關根正直
榮華物語詳解　十冊……和田英松　佐藤球
榮華物語事蹟考勘　三冊　野村房尙

2　編纂の用意

第七課「平安時代の文學」中に見えてゐる歴史物語としての「榮華物語」中から御堂關白の法成寺造營に關する一篇を採つた。これ畢竟、これが講讀によつて「榮華物語」の筆致の一斑を辨へしめ、兼ねて晩年に於ける道長の權威勢力の絶大であつたさま、並に法成寺造營の規模雄大を極めたさまなどを知らしめ、幼時父兼家に對して、「影(藤原公任の)をば踏まで面をやは踏まぬ」と豪語したことの空言でなかつたことを了得せしめるが爲に外ならぬ。

3　要旨

法成寺の造營が、いかに上下の衆力を集め、いかに豪勢で、いかに規模が宏大であつたかを髣髴せしめると同時に、これによつて、道長の晩年の榮花のほどを想見せしめたい。殊に數字的の具體描寫によつて、その「まねびやる方なき」有樣がよく表されてゐる點、又、道長の勢力を殆ど神祕的に考へてゐる當時の人々の心理などを考察せしむべきである。又、道長に關する前課(御堂關白の幼時)と本課との文章を比較せしめ、前課が批判的で簡潔であるに對して、本課が傾倒的であり、細敍的であるところなどに着眼させたい。

4　概說

第一節(七〇頁——七二頁一行)　主として道長父子の法成寺造營に專心してゐる有樣を敍した。

第二節(七二頁二行——七二頁八行)　藤家以外の上下遠近の人々の、この造營に身心を打ち込んでゐる概況。

第三節(七二頁九行——七四頁六行)　御堂の内外に於ける諸人の工事作業の模樣と、更にその材料たる土木運搬の景況。

第四節(七四頁七行——七五頁)　道長の勢のいよ〳〵なべてならぬことについて、人々の尊崇する狀、並に弘法大師・聖德太子に關する話を記した。

5　取扱上の注意

◪起筆の「今は御心地例さまに云々」といふ句について、次の事情を明らかにしてかゝる必要がある。即ち、道長は寛仁三年(一六七九)三月十七日に病み出して、その二十七日に出家した。實は、この病氣では死を覺悟した位で、ひたすら佛にのみすがつて來たが、病氣も快くなつたので、いよ〳〵入道になり、京極殿の東に御堂を建てて、餘生を安穩に過さうといふのである。

◪修辭上いはゆる「事を記した」文としては、まことに巧で、「まねびやるべきかたなし」といひながら、實は大いに記事文としての効果をあげてゐる。即ちこの文から來る御堂の宏大壯麗であつた有樣は、かなり深い印象を讀者に與へ得てゐる。それについては、いはゆる「殊語」の活用、一般に率直卑近な辭樣に待つところが多い點に留意せしむべきであらう。

◪道長の勢力を神祕的にまで考へてゐるところは、前課の「さるべき人は……御守もこはきなめり」といふ語にも見えるが、この課では、第四節の中に「なべてならざりける御有樣」といひ、「世の常の事とは見えさせ給はず」といふ事實として、弘法大師や聖德太子の話をしてゐるので殊によくわかる。

◪尙、法成寺造營については、「大鏡」卷下、太政大臣道長のおとゞの條にも記述してゐる。兩者を比較して見られたならば、取扱上の參考になることもあるであらう。

◪本課の文には、又、文法上・修辭上注意すべき點が多い。今その參考の爲、そのおなものを左に記さう。

池を掘るとて四五百人おりたち
山を疊むとて五六百人のぼりたち
近う見奉る人は尊み
遠う見奉る人は遙に拜み
海の波もやはらかにたち
河も水澄みて快く浮べ
これらは對語・對句
おぼし急ぐ
思しおきて急がせ給ふ
作りうゞけ
作りなめ
とゝのへ作らせ

參りまかで立ちこむ
鹿ひつかうまつる
參りこむ
なみゐて
のぼりゐて
引上げさわぐ
作り輝かす
磨きのごふ
きりとゝのふる
叫びのゝしり引きもてのぼる
歌ひのゝしりてのぼるめり
のせて率て來れど沈まず

これらは動詞を連ねて用ひたのである。そこに流動してゆく氣持がある、どこかにむかつて追擊するといふ氣分を含んでゐる。つまり、あせつてゐる表現である。

御堂々々、方々樣々。
品々方々、あたり〳〵。

これ亦あせつてゐる表現で、目にあまる觀察の表現に困つてゐるところが見える。

6 設問

1　この文章から受ける最も著しい印象は何々か。

2　左の諸點について前課と比較し、その異同を考へよ。

イ、文章の性質の上から見て。（前課は敍事を主とし、本課は記事を主とする）

ロ、執筆の態度から見て。（何れも、敬語を用ひてゐるが、道長に對する心持に相違がある。前課には批判的な點が見えるが、本課は無批判的で、寧ろ崇拜的である）

ハ、主題とされた道長の年齡・生活から見て。

7 釋義

【法成寺】　ホフジャウジ。日本百科大辭典より法成寺の一項を採錄する。その規模の如何に宏大であつたかは、これによつて推知する事が出來る。

法成寺、藤原道長建立の寺。山城國京都京極の東、近衞の北にありき。いはゆる御堂これなり。道長を御堂關白といふはこの寺を建立せしより起れる名なり。その境域凡そ方二町にして、中央に金堂あり。これを大御堂といひ、東に阿彌陀堂、西に五大堂・藥師堂、藥師堂の北に釋迦堂、この他齋堂・觀音小堂・三昧堂・經藏・寶藏・鐘樓並に南大門・西大門等を具備し、その規模の大、東大寺にならび、結構の華麗、これに比すべきなし。藤原氏の富と勢とを以て力をこゝに致す。道長病にかゝりし時、その子頼通、工事を或かにせんと欲し、諸國に令して曰く、「たとひ公事を緩くすとも、この役を怠ることなかれ。」と。是に於て公卿以下、日に數百の役徒を發して力を協せ、不日にして成りたりといふ。道長深く佛教を信じ、六齋日毎に天下の殺生を禁じ、木幡の先塋にも淨妙寺を建つ。大鏡に、當時の諸寺と比較して、御堂はいづれの寺よりも勝り、……この無量壽院いとめでたく、極樂淨土この世に顯れけると見えたり。」といへり。はじめ後一條天皇の寛仁三年三月、道長出家し、九月東大寺にて受戒を行ふ。尋いで丈六九體の阿彌陀の像を定朝に作らしめ、新堂を建てて安置し、これを無量壽院といふ。いはゆる京極の御堂これなり。寛仁四年三月二十二日開眼供養を行ふ。權大僧都院源、導師を勤め、濟信・深覺・證誠たり。上東門院行啓あり、儀式御齋會に准ぜらる。翌治安元年三月丈六佛の繪像百六十體を無量壽院に慶す。十二月西北院の供養を行ふ。道長の妻倫子の發願にして、法成寺の西北に位す。治安二年七月十四日、金堂・五大堂の開眼供養を行ふ。こゝに至りて法成寺の名を命じ、儀式は御齋會に准じ、天皇行幸、大皇太后・皇太后・中宮・東宮行啓あり。導師は院源、咒願師は林懐、證誠は濟信・深覺、その他請僧百五十人、金字・銀字の經百餘部を書寫し、阿闍梨六人を常置し、勅して特に非常大赦を行はる。事終りて賞賜あり。定朝は法橋上人位となる。その金堂には金色三丈三尺の大日、二丈の釋迦・藥師・文殊・彌勒、九尺の梵天・帝釋・四天王を安置し、五大堂には彩色二丈の不動、丈六の四大明王を安置す。堂の柱毎に兩界曼荼羅、扉毎に八相成道の圖を描く。治安三年九月法成寺に法華三十講を修す。萬壽元年三月僧坊炎上す。六月二十六日藥師堂（淨瑠璃院）の開眼供養あり。この堂には丈六の七佛藥師の像、日光・月光・十二神將並に丈六の觀音の像を安置す。百僧を請じて七佛藥師經・觀音經を講讃す。講師は院源、讀師は扶公なり。萬壽三年阿彌陀堂の供養あり。萬壽四年五月、丈六釋迦百體を供養す。この年道長病に罹り、法成寺に居る。勅して度者千人を賜ひ、諸寺に勅して壽命經を讀ましめ、萬僧供を行ひ、行幸して病を訪ひ、封五百戸を寺に賜ふ。十二月四日、無量壽院の阿彌陀佛の前に於て道長薨ず。年六十二。長元二年法華八講を創す。長元三年八月二十一日、上東門院彰子（道長の女）御願の東北院の供養を行ふ。こは法成寺の東北の方に建てられし法華三昧堂なり。この年法成寺の塔を供養す。長元七年法華十講を修し、竪義を置く。天喜五年、上東門院法成寺の八角堂を供養す。康平元年法成寺炎上す。尋いで再建し、翌二年無量壽院・五大堂を供養す。四年東北院を供養し、不斷念佛を置く。五年東北院に十種供養を行ふ。延暦元年金堂・藥師堂・觀音堂を供養し、天皇行幸あり。四年三月丈六繪像百二十體を供養す。繪佛師敦祚、法橋上人位に敍せられる。延久元年東北院に阿闍梨四人を置く。四年法成寺西北院を供養す。承暦三年法成寺講座・東西二塔・齋堂・法華堂を供養す。承德元年藤原師實、法成寺新堂を供養す。永久五年法成寺の東西塔・南大門等燒失す。承久四年法成寺炎上す。彗好の徒然草に、正和元年南門倒れ、その後金堂顚倒し、無量壽院のみは遺

りたるをいへり。その後その敷地に賀茂川の水流れ入りて、跡かたもなくなりしよし、海人藻介に見えたり（赤堀又次郎）

【今は御心地例さまになりはてさせ給ひぬれば】道長公の御病氣もすつかり恢復して、今では御心もちも平常と同じやうになつておしまひになつたから。別項「取扱上の注意」参照。

「例さま」（レイさま）は、常のさま。例のやう。常態。

枕草子卷五に「ことにしつらひしたれば、例ざまならぬもをかし。」

【御堂】ミダウ。法成寺。前の「法成寺」参照。

【思し急がせ給ふ】「思し」は意志の方からいひ、「急ぐ」は客觀的にいふ。

【攝政殿】セッシャウドノ。こゝは藤原頼通をいふ。頼通は道長の長子。寛仁元年（一六七七）後一條天皇の位に即きたまふや、内大臣に任ぜられ、父に代つて政を攝し、氏の長者となつた。ついで關白となり、左大臣に轉じた。康平二年（一七一九）病の故を以て官を辭したが許されず、天下に大赦してその平癒を祈らしめ給うた。康平四年太政大臣に拜せられ、次いでこれを辭した。後一條・後朱雀・後冷泉三朝の攝政・關白として驕奢父に越え、專横を逞しうした。永承中宇治の別業を捨てて寺とし、

平等院と號した。承保元年（一七三四）薨。年八十三。世に宇治殿又は宇治關白といつた。

【國々まで】國々へ賦役を仰せつけたのである。「賦役」とは、地租と夫役。

「夫役」とは、公用に使役するために人夫を徵發すること。

【さるべき公事をばさるものにて】いろ〳〵の公事はそれぞれたいせつなものであるが。（それはそれとしておいて、先づこの御堂建立のことを先にせよといふ意。）

「公事」（クジ）とは、朝廷の政務及び儀式。おほやけごと。

大鏡卷下に「公事をおろそかにし、狩をのみせばこそは罪はあらめ。」

古今著聞集卷十一に「正朔の節會より除夜の追儺に至るまで、公事の禮一にあらず。」

【仰言】オホセゴト。おほせられるお言葉。御命令。

【殿の御前も】道長殿におかせられても。

「御前」といふ語は、(一)貴人のまへ。それより轉じて、(二)敬稱の二人稱。（後には幾分輕蔑の意味が生じて來た。）(三)三人稱の敬語。（貴人の前といつて、その人をさす。）(四)ゴセンと讀んで、二人稱・三人稱の敬語。（男子に用ひる。女子・僧侶のときは、御前樣といふ）こゝでは(三)の意。

【別事】コトゴト。ほかの外。別の事。異なる事。

枕草子卷五に「聞きもて入れ給はでなほ別事をのたまふに。」

【この頃】法成寺造營の宿願

【他事】コトゴト。前の「別事」と同意。

源氏物語の若紫の卷に「この月ごろは有りしにまさる物思に、他事なくて、過ぎゆく。」

【たゞ御堂におはします】おはしますの主語は何であるかを考へさせて見たい。「道長公の心は」と補つて見たら明らかにならう。即ち道長公の御心は、たゞ御堂建立のことばかりであらせられるとの意。

【様々に思しおきて急がせ給ふ】いろ〳〵さま〳〵に考へ定めて、工事のほどをお急ぎになつた。

「おきて」は、た行下二段活用の動詞「おきつ」の連用形。事を定め處理する意。

宇津保物語の國讓、下に「みづしどころ・大殿の具、いとよくしおきてたり。」

【夜の明くるも心許なく】夜の明けるのも待ち遠く思はれ。

「心許なし」は、(一)心のいらだつこと。待ち遠く思ふこと。じれつたいこと。(二)おぼつかないこと。不安心なこと。氣づかはしいこと。こゝは(一)の意。

枕草子卷八に「心もとなきもの、人の許にとみの物縫ひにやりて待つほど。」

【夜もすがらは云々】夜は徹夜してまでも、庭の趣を添へるやうに、池を掘らせ、築山を作らせ、樹を植ゑさせなどしたといふ意。

この「夜もすがらは」は、山を疊むべきやう、池を掘るべきさま、木を栽ゑなめさせ」のあたりまでにかゝつてゐる。

「作りつゞけ」まではかゝらぬ。

山を疊むべきやう……山を疊む(築く)樣子
池を掘るべきさま……池を掘るさま　が大變なさわぎで

「築く」といはずに「疊む」としたところ、よほどおもむきがある。

「木を栽ゑなめさせ」は、一本には「木をうゑなべ」とある。「なめ」も「なべ」も共に「並べ」の意である。

この「なめ」を「馬なめて」と用ひたのは、萬葉の特有語である。

玉き春内の大野に馬數而(なめて)あさふますらむその草深ぬ　(1卷)
馬並底(なめて)いざうち行かなしぶたにの清き磯まによする波見に　(17卷)
馬屯而(なめて)うちむれこえきけふみつるよしぬの川をいつかへり見む　(9卷)

後世は「駒なめて」『駒なべて」といふ。

駒なめていざ見に行かむ故郷は雪とのみこそ花はちるらめ　(古今　春)
駒なめて花のありかを尋ねつゝよもの山邊の梢をぞ見る　(新勅　春)

【さるべき御堂々々】然るべき數々の御堂。

【方々樣々】いろ〳〵さま〳〵。種々。

【御佛はなべてのさまにやおはします】安置すべき御佛の像は普通一般のものではない、それは〳〵非凡の傑作である、即ち丈六の云々とつゞくのである。

「なべて」は、おしなべて。普通一般。

古今集、冬に「梅の花それとも見えずひさかたのあまきる雪のなべて降れれば」

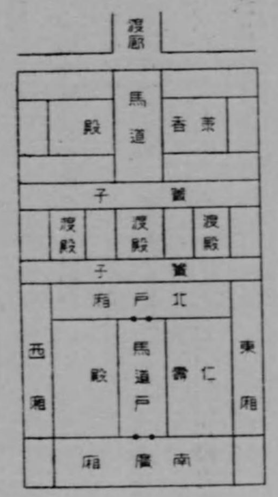
【丈六の金色の佛】金色にぬりかざられた高さ一丈六尺の御佛。

【そなたをば】佛像を安置する場所をばといふ意。

【馬道】メダウ。横に厚い板を敷き渡して廊の如く通行す

るやうにしたもの。必要に應じては奥まで馬を引き入れる道とするから馬道といふ。後には長廊下をいふやうになつた。又一説には間通（まどほし）の約で、殿中の多くの間を貫通した板敷をいふ。

内裏についていへば左圖の通り。



その他、常寧殿・弘徽殿・溫明殿・後涼殿などにもある。

和名抄巻十に「馬道、米多宇、向レ堂之道也。」

大鏡巻中に「舞人の馬を、後涼殿の北の馬道より通させたまひて、朝餉の壺におろさせ給ひて。」

【廊】　ラウ。寢殿づくりに於て、寢殿と東西の對（たい）の屋とを結びつけるために設けた細長い建物。壁渡殿・透廊・橋廊・臂折廊などの種類がある。

枕草子巻六に「からびさしのこなたの廊にぞ女房六人ばかりさぶらふ。」

【渡殿】　ワタドノ。二つの建物をつゞける廊下。渡り廊下。

枕草子巻二に「西東のわたどのにて渡らせたまふ。」

【雞（トリ）の鳴くも久しく思され】　心が急いでゐるので、雞のうたふ聲さへも待遠く思し召され。

【宵・曉の御行】　ヨヒアカツキのオンオコナヒ。朝夕の御看經、即ち御佛に對しての朝夕の御勤行（ゴゴンギャウ）。

【安きいも大殿ごもらず】　御安眠さへもなさらないで。

「い」は、寢ねることを意味する名詞。朝寢（あさい）、熟睡（うまい）などの

「い」。

「大殿ごもる」は、寢所に入ること。

形容詞	名詞	助詞	熟語動詞	助動詞
安き	い	も	大殿ごもら	ず
い	も	ね	ず	

なか〳〵むづかしい語法ではあるが、右の表のやうに、文法の筋の立たぬこともない。

【參り罷で立ちこむ】　入るやら、出るやら、大混雜である。三つの動詞を重ねたのに注意。前の「思しおきて急がせ」と同樣な趣である。

【さるべき殿ばら】　しかあるべき殿方たち。即ち道長公の令息たち、その他緣つゞきの公など。

【宮々】　道長公の女で、宮中にあがつてゐる方々（前課「御堂關白の幼時」の釋義「御堂關白」參照。）並にその他の諸皇族。

【御封】　ミブ。「ふ」は封戸（フゴ）の略。「御」（ミ）は敬語。昔は親王以下諸臣に至るまで位階・官職・勳功に應じて民戸を賜つた。これを「封戸」といひ、略して「封」といふ。地租はその半分を所得とし、庸・調はその全部を所得とした。それゆゑ、こゝでは、自分の封戸から庸として人夫を出したのである。さて賜はる封戸は、拾芥抄によれば、次の通り。

太上天皇	二千戸	
院・宮	千五百戸—千戸	
親王（一品）	六百戸	内親王は半分
（二品）	四百五十戸	
（三品）	三百戸	
（四品）	二百二十五戸	
（無名）	百五十戸	
太政大臣	千五百戸—七百五十戸	
左右大臣	千五百戸	
内大臣	八百戸	
大納言	六百戸	
中納言	三百戸	
參議	六十戸	
正一位	二百廿五戸	
從一位	百九十五戸	
正二位	百五十戸	
從二位	百廿八戸	

正三位　九十八戸
從三位　七十五戸

【御莊】ミサウ。「み」は敬語。「莊」は莊園。王朝時代に、勢力ある寺社又は個人の私有地で莊號のあるものをいふ。「莊」とは田舍の家をいひ、「園」とはそれに附屬した苑をいふ。即ち田舍にある別莊のことである。思ふに、昔は土地が唯一の財源となつたので、人々は爭うて土地の私有をはかつたのである。その起元は左の通り。

(1) 田莊――個人が開拓したもの、又は御子代部・御名部（記念として名を殘す部落）が相傳するもの。
(2) 賜田――國家に功績ある者に勅旨によつて賜はるもの。
(3) 功田――大寶令によつて功績のある者が賜はるもの。
(4) 開墾田。
(5) 勅旨田――勅旨によつて荒廢地を賜はるもの。
(6) 神寺田。

これらの制度に反對するものは大化の改新であつたが、少しもその効果がなかつた。莊園には莊長をおいて管理させ、莊長は兵を養ひ、一般の私有地は莊園に繰入れてもらふことによつて免稅をはかり、莊園の勢力は漸々に盛になつた。こゝに於て國司と莊官とのむづかしい交渉が起つた。歷代の勅旨は、極力この大勢を憂へて莊園の跋扈を押へたが、一切無効であつた。そこでやむなく公田に地子を課することとなつた。私田もこれをならつて地子を課したが、それは國庫の收入とはならぬ。國庫增收のために姑息の手段として賣官が行はれたのもこの故である。

かゝる弊制は道長の時代に於て最も甚しく、後三條天皇の御改革でいくらか綱紀が肅正されたが、やがて御遺志が空しくなり、益〻亂脈を極めて武家興隆の素因をつくつた。賴朝の時に至つて一切の土地は一旦朝廷に歸つたけれども、例の守護・地頭の配置によつて、たゞ形式が變つたのみで、その實は依然として莊園に異ならなかつた。

（國史大辭典による）

【夫】ブ。夫役の人夫。

「夫役」については、前の「國々まで」參照。

古今著聞集卷十六に「所領より物を上りけるさたのもの、夫よりはるかに先だちて。」

【かしこきこと】こゝは、すぐれまさつたこと、よいこと、結構なこと、などの意。

【國々の守】諸國の國司の長官。諸國の國守。

「國司」とは、大化改新以後、日本六十六國及び二島に置いた地方官。この長を守（カミ）といひ、この下に、介・掾・目等の職員があつた。

【地子】ヂシ。租稅の一。昔は公田又は官田を一年間賣り又は永く貸して、その貸賃として納めさせるものをいふ。始め大寶令で定められたが、後いろ〳〵に變遷した。醍醐天皇の延喜年間に制度が再び確立したが、それもいつしか亂れ、賴朝の頃には全く不規則となつた。道長の時代には、公田が減少した上に、本文に見える如く遲納がちであつたものと見える。

回「御封・御莊云々」は、私有地についていひ、「地子・官物云々」は、公田についていふ。

【官物】クヮンブツ。又、クヮンモツ。(一)官有物。(二)田租や庸調など。こゝは(二)の意。

賦役令に「金銀……及御珍異之類、皆准レ布爲レ價、以三官物一市宛。」

大鏡に「おほやけにもしろしめして、官物のはつほさき奉らせたまふめり。」

【おそなはれども】遲くなつても。滯納しても。

前の「地子・官物は」につゞけると、「地子・官物をおかみに納めることは、たとひおそくなつても。」といふ意味になる。

【夫役】ブヤク。前の「夫」を見よ。

【檜皮】ヒハダ。檜の皮。細かに割いて種々の用に供する。まいはだ。又、甘皮・外皮等を去つて、厚さ三分乃至六分位の小方形の板にし、屋根を葺く料とする。こゝはその意。

木工寮式、葺工に「三尺檜皮九百圍。」

【我も〳〵ときほひつかうまつる】我も〳〵と競爭して奉仕する。

「きほふ」は、相きそふこと。互に競爭すること。互に張り合つて勇み立つこと。互にまけまいと張り合ふこと。

萬葉集卷二十に「夕しほに　棹さしくだり　あぢむらの　さわぎきほひて。」

【品々方々あたり〳〵に云々】前の御堂々々、方々様々と同一の描法。「いろ〳〵さま〴〵の奉仕を、あそこでもここでもしてゐる。」といふ意。

「あたり〳〵」は、そこゝあちらこちら。處々。

源氏物語の榊の卷に「板屋ども、あたり〳〵いとかりそめなめり。」

【御佛つかうまつるとて】御佛の像を彫刻しまゐらすとて。

【佛師】ブッシ。佛像を彫刻して作る工人。佛工。

榮華物語に「御佛つかうまつれる佛師定朝は、法橋になさせ給ひつ。」

【同じくはこれこそめでたけれと見ゆ】同じ工事のうちでも、佛像の彫刻が一番結構のやうに見える。

【工匠】タクミ。(一)手工又は器械などによつて物を造る業。たくみわざ。工業。又これを業とする人。職工。(二)特に木材にて物を造る木工の稱。こだくみ。

源氏物語の帚木の卷に「木の道のたくみの、萬の物を心にまかせて造り出すも。」

【えさまさ】力を入れるときに發するかけごゑ。

【作りかゞやかす】かゞやくばかり美しく造りあげる。

【木賊】トクサ。木賊科木賊屬の多年生草本。莖の高さ二尺ばかり、通常管狀で、明瞭な節を有し、枝がなく、表面に平行せる縱溝を見る。硅酸質を含んで堅い。葉は小形で鱗狀、集つて鞘をなす。胞子穗は筆頭狀で、莖の上部に生ずる。我が國各地の山野に自生し、又觀賞用として栽培される。又その莖は、木材・角などを磨くに用ひられる。きどくさ。

【椋の葉】ムクのハ。椋は楡(ニレ)科椋樹屬の落葉喬木。高さ五六十丈に達する。葉は廣披針形で、葉柄を具へてゐる。葉面は粗糙で鋸齒を有し、互生する。花は單性、雌雄同株。小形で、花冠がない。果實は球形の核果で、紫黑色を呈する。葉は器物を磨く用に供し、果實は食用に供する。我が國各地の山野に自生し、又觀賞用として栽培される。

【のごふ】「拭ふ」に同じ。

萬葉集卷二十に「ま袖もち涙をのごひ。」

源氏物語の末摘花の卷に「みちのくにの紙をぬらしてのごひ給へば。」

【檜皮葺】ヒハタブキ。檜皮で屋根をふくこと。又その屋根。前の「檜皮」參照。

枕草子卷十に「雪はひはだぶきいとめでたし。」

【數をつくしたり】人數をつくしたといふ意で、多くの人手間をかけたことをいふ。

【心に任せて】心のまゝに。おもふまゝに。

【大路】オホヂ。幅の廣い通路。おほみち。「小路」(コウヂ)の對。

萬葉集卷十五に「青によし奈良の大路はゆきよけどこの山道は行きあしかりけり。」

【力車】チカラグルマ。物を載せ、人の力で牽く車。荷車。

【えもいはぬ大木】言ふに言はれぬほど大きな木。

「えもいはぬ」は、言ふに言はれぬ、えならぬなどの意。

源氏物語の明石の卷に「えもいはぬ入江の水など、繪にかゝば心の至り少からむ。」

宇津保物語の祭使に「舍人三十人、えもいはずさうぞかせて。」

【叫びのゝしりて】叫びさわいで。

「のゝしる」とは、大聲で言ひさわぐこと。さわぎたてること。

土佐日記に「とかくしつゝのゝしるうちに夜ふけぬ。」

【鴨川】又、賀茂川。京都市内の東部を南北に貫流する川。修して鴨水・洛水などともいふ。葛野(カドノ)郡雲畑村岩屋及び鞍馬山に發し、桂川となつて淀川に入る。平時は水が無くて磧が多い。河畔一帶は納涼地として古來名高い。御堂は鴨川に近かつたのである。

【筏といふものに】この「といふ」の詞は、あまり周知されてゐない名や事柄を言ふときに用ひる。周知されてゐ

いふ舟うきねすらしも

「筏」(イカダ)は竹木を編み、水に流して運漕するもの。

千載集、雜上に「筏おろす清瀧川に澄む月は棹にさはらぬ氷なりけり」

【榑】　クレ。丸太のまゝの材木。又切つて直に小工事に用ひるやうにしたものをもいふ。

「榑は桶屋の棚にあり」

といふ諺は、人が物をくれとねだつたとき、普通からもじつたものである。

宇津保物語の祭使に「淺き瀬に流れてくだる筏師はいくらのくれか流れきぬらむ」

【謠ひのゝしりて上るめり】　原文には、この次に左の一句がある。

「大津・梅津の心地するも、『西は東』といふことはこれなりけりと見ゆ。」

【磐石】　バンジャク。大きな石。

穆天子傳に「觴天子於磐石之上。」

源平盛衰記、二十四、南都燒失の條に「雷神磐石を碎きて船筏を下しき。」

【はかなき筏】　取るに足らぬほどのつまらぬ筏。

こゝの「はかなし」は、とるに取らぬこと。つまらぬさま。

源氏物語の朝顏の卷に「はかなき木草につけたる御かへり。」

【いひつくし、まねびやるべき方なし】　何とも言ひやうがなく、又まねのしかたがない。名狀すべからざるさまにいふ。

【須達長者の祇園精舍作りけむも云々】　須達長者が釋迦の爲に祇園精舍を作つたときの有樣も、定めてこのやうであつたらうと思はれるけれども。

「須達長者」(シュダッチャ ウジャ)は釋迦時代の印度の富豪。祇園精舍は「祇陀園林須達精舍」の略で、祇陀太子の園林を須達といふ富豪が買ひとつて釋迦の爲めに建立した精舍の意。精舍とは、精進の道場、卽ち寺をいふ。

涅槃經卷廿九に「その時須達長者が舍利弗に申すには『お坊樣、どこかこの舍衞城の外によい場所はありませんか。あまり近くなく、又遠くなく、泉や池があり、立派な樹木があり、美しい果がなり、しかして清淨閑豫なところはございませんか。私はそんな處に、お釋迦樣の爲にお弟子さまたちのお寺を建立しませう。』と。舍利弗は答へて『それは祇陀太子の園林が最も恰好の地であらう。』と申されました。」といふ意味の事が書いてある。

なほ、新修百科辭典に祇園精舍について、次のやうに記してある。

祇園精舍、中印度憍薩羅(コーサラ)國舍衞城の南にあつた祇樹給孤獨園(略して祇樹園・給孤獨園ともいふ。)内に建てられた精舍。精舍の地はもと憍薩羅國逝多太子の領有であつたが、舍衞城の須達(給孤獨)長者が請うてこれを買受け、精舍を建てて佛並に比丘衆に獻じた。七層の伽藍があつて莊嚴を極め、或は十六の大院、十一の浮圖、七十二の講堂、三千六百の房舍五百の樓閣があつたとも傳へる。精舍の一隅に無常院があつた。院は病僧を收容するところ。病僧が將に死なうとするときには、頗梨鐘を鳴らして無常を告げ知らせた。この頗梨鐘こそは梵鐘の起源をなしたといはれてゐる。釋迦はこの精舍に止住して衆生を化導すること二十五年に及んだ。梵語 jetavana-vihāra.

【冬の室、夏の風各〻ことゞなり】　冬は溫い部屋が必要であり、夏は涼しい風が必要であるやうに、印度の祇園精舍は印度の國土に相應し、印度の工匠の設計により、日本の法成寺は日本の國土に相應し、日本の工匠が設計したもので、兩者とも各〻ちがつてゐる。「ことゞなり」は異事・別事、いづれも前に見えてゐる。

【かゝる御勢に添へて】　法成寺建立のかやうなすさまじさに加へて。

【入道せさせ給ひて後は云々】　道長公は、法體となつて佛門に入られた後は、健康がたいそうおすぐれになつたやうにお見えになるにつけても。

「入道」とは、三位以上の人の、頭髮を剃つて佛門に入ることをいふ。

「いとゞまさらせ給へり」は、「健康がたいそうおすぐれになつた」といふ意。

「給ふにも」は、給ふにつけても。

【なべてならざりける御有樣かな】　なみ〳〵ならぬ御幸運の御有樣であるはい。

【この御堂のあたりの木草ともならむ】　この御堂のあたりの木草を、さても幸運の木草よと羨むほど人々の渴仰したことを形容したことば。眞に力ある形容と稱すべきである。

【そなたさまに赴けば】　權勢極なき道長公の方にむかへば。

「そなたさま」は、そちらの方。こゝは道長の方をさしていふ。

枕草子卷二に「おとな、上達部まで皆そなたさまに見やりたまへり。」

【なほなべて】　「なほ」にはあまり意味はないやうである。

「まあ」といふほどの感動であらう。

【まづは】　その證據としては先づ。

【長谷寺】　ハセデラ。チャウコクジ。眞言宗豐山(ブザン)派の本山。奈良縣(大和國)磯城郡初瀨町にある。豐山神樂院と號し、豐山寺・泊瀨寺・初瀨寺・長谷觀音・本長谷寺ともいふ。西國巡禮三十三所、第八番の札所。本尊は十一面觀世音菩薩。二丈六尺の大像で、鎌倉長谷の觀音と同木異工と傳へられてゐる寺傳には、天武天皇の勅願によつて弘福寺の僧道明が西嶺に三重塔を建て、後、聖武天皇の勅願によつて僧德道が東嶺に精舍を建てたとある。神護景雲二年十月二十日には稱德天皇の行幸があつた。延喜式に「豐山寺料二千四百束。」とある。當時一方の巨刹として朝野の崇敬が深く、身分ある老若男女が、參籠して靈驗を仰いだことが日記

や物語に累出してゐる。もと法相宗であつたが、根來(ネゴロ)大傳法院の衰滅後、天正十五年(一二四七)專譽が入山してから新義眞言宗の道場となつた。明治四十四年火災にかゝり、寛文元年(一三二一)築造の奧書院、大講堂、庫裡等の大建築物は悉く燒失したが、大正十三年再建の造營が竣工した。明治三十三年分派獨立して豐山派の總本山となつた。本堂(觀音堂)は大悲閣と稱し、慶安三年(一三二〇)の再建である。境內は眺望に富み、牡丹と紅葉との美を以て聞えてゐる。

【御祈禱をいみじうして】　たいそう念入に御祈禱をして。

「祈禱」(キタウ)とは、心願をこめて神佛に福利を祈り求めること。又その儀式。いのり。

【大きにいかめしき男】　威嚴のそなはつた大男。

「いかめし」とは、威あつておごそかなこと。いかついこと。

宇津保物語の藏開下に「きんだち、御さうぞくめでたくして、おとゞ拜み奉りに參りたまへり。いといかめし。」

【何かかく殿の御事をば云々】　どうして道長公の人物について、このやうにとやかくと批評がましいことをいふのであるか、もつたいなくも道長公は弘法大師の……の意。

【弘法大師】　コウボフダイシ。空海。我が國眞言宗の開祖。讃岐國(香川縣)多度郡屏風浦の人。俗姓佐伯氏。幼名は眞魚(マヲ)。はじめ大學に學んだが、後佛門に轉じた。延曆二十三年入唐求法の詔を奉じて最澄と共に渡唐し、長安青龍寺の慧果に就いて眞言の祕奧を究め、大同元年歸朝した。尋いで紀伊國高野山に金剛峯寺を建て、盛に眞言宗を弘通した。承和元年(一四九四)寂。年六十二。空海博學多能、書は本朝三蹟の一人と稱せられ、最も嵯峨天皇の尊信を受けた。また彫刻にも長じてゐた。伊呂波歌はその作であると言傳へられてゐる。延喜二十一年(一五八一)弘法大師と勅諡遊ばされた。世に高野大師といふ。

【佛法興隆】　ブッポフコウリュウ。佛法をさかんにおこすこと。

「興隆」は、さかんにおこること。又、さかんにおこすこと。

諸葛亮の前出師表に「親二賢臣一遠二小人一、此先漢所二以興隆一也」

平家物語、二、座主流罪の條に「たゞ吾が山の興隆をのみ思へり。」

【天王寺】 天台宗の巨刹。大阪市天王寺區にある。荒陵山と號し、難波寺とも金光明四天王護國寺ともいふ。天王寺はその略稱。鎭護國家の爲、用明天皇の二年（一二四七）聖德太子の創建したまうた寺で、鎭國道場の最初のもの。推古天皇の元年（一二五三）に四箇院（敬田院・施藥院・療病院・悲田院）を造つた。金堂には如意輪觀音並に四天王の像が安置してある。もと八宗兼學であつた。數度の火災の爲創立當時の建物は全く殘つてゐないが、七堂伽藍の配置は依然として推古時代の形式をそのまゝに存してゐる。金堂・五重塔を始め數多の堂宇がある。現存の建物中最古の建築にかゝる東大門は今特別保護建造物に指定されてゐる。聖德太子千三百年遠忌記念として鑄造された巨鐘も亦有名である。

【聖德太子】 用明天皇の第一皇子。御名を上宮厩戸豐聰耳太子といひ、略して上宮太子とも、厩戸皇子ともいふ。推古天皇立ちたまふに及び、皇太子となつて位を攝し給ひ、冠位十二階を制して諸臣の等級を分ち、十七條の憲法を作つて官民の心得を示し、曆を天下に頒ち給うとた。又蘇我馬子共に國史を撰修したまひ、小野妹子を隋に送つて國書を贈り、始めて對等の禮を以て兩國間の公の交際を開きたまうた。太子は又篤く佛教を信じたまひ、四天王寺・法隆寺を建てて佛教の興隆を圖り給うた。推古天皇の二十九年或は三十年（一二八一）薨。御年四十九。

【王城より東に佛法弘めむ人を我と知れ】 「王城より東の方に佛法を弘める人こそは、正しく我の生れかはりと知れ。」との意。

「王城」は帝王の宮城。みやこ。帝都。こゝは京都と見てよからう。

古今著聞集卷十に「王城は廣ければ、世にすぐれたらむ大力もはべらむ。」

【いづれにてもおろかならぬ事なり】 道長公が弘法大師の再誕にしろ、聖德太子の生れかはりにしろ、何れにしてもおろそかなことではない。

「おろか」は、(一)おろそか。おほろか。一通り。なみ。(二)いふに足らぬ。物の數でない。こゝは(二)の意。

竹取物語に「みかどの御使をいかでかおろかにせむ。」

8 挿圖

法成寺の造營　中澤弘光筆

法成寺造營の一場面を描いたもの。

佛像を彫刻するもの、材木を運搬するもの、さまゞの佛具を造るもの。いづれもせつせとそのわざにいそしんでゐるさまが巧に描き出されてゐる。

筆者中澤弘光は西洋畫家。明治七年八月東京市芝區源助町に生れた。夙に西洋畫を大野幸彥・堀江正章・黑田清輝に學んだ。明治三十二年東京美術學校洋畫科選科を卒業した。爾來益〻その技をみがき、終に斯界有數の大家となつた。大正八年文部省美術展覽會審査委員となり、昭和五年四月帝國美術院會員に推擧された。曩に明治四十五年六月、山本森之助、三宅克己等と共に光風會を起して斯道に貢獻した。現にその同人である。

一〇　國文學の研究

藤村作

1　解題

新潮社發行の日本文學講座第一卷所載の「日本文學研究の眞意義」から採つたものである。

2　作者

藤村作　フヂムラ　ツクル。

明治八年（一八七五）五月、佐賀縣に生れた。明治三十四年、東京帝國大學文科大學國文學科を卒業し、爾來第七高等學校造士館教授・廣島高等師範學校教授・東京帝國大學文學部助教授を歷任し、大正十一年東京帝國大學文學部教授となつた。その間大正八年十二月文學博士の學位を受けた。現在は同大學名譽教授である。江戸文學の造詣が深く、「上方文學と江戸文學」の著がある。

3　編纂の用意

「平安朝時代の文學」をはじめ、こゝ數課に文學作品を教材とした課を取扱ふのであるから、こゝに國文學研究は、今日の我が國に如何なる意義があり、如何なる必要があるかを、はつきりさせておきたいと考へて本課を置いたのである。

4　要旨

我々は日本民族であり、日本國民である。そして特殊の民族性・國民精神を以て固く結ばれてゐる。故に國民としての我々の最も正しい生き方は、國家のため民族共有の生命の闡明に努め、民族精神の世界的擴充を圖る事であつて、此の民族性に反省と自覺とを與へ、國民精神に絶えず新生命を供給するものが國文學である。文學には國境はない、それは人間性の內面に深く共通の心情を有するからである。しかし一面これ位特殊の民族性、國民的特色の鮮明なものはない。國文學はその國民の精神をさながらに映した鏡である。他の如何なる文學とも價値の比較を許さない最も愛すべき文學である。殊に我が國の

如く特殊の國民性と國家と特殊な生活を持つた國民の文學、特殊な組織を持つた文法によつて表はされた文學は、我々日本國民をおいて眞の研究は出來ないのである。

かくして目を我が國民の過去に轉ずると、上古から中古を通じて、印度・支那の文化に接してこれを輸入し、ひたすらその摸倣に努めて來た。江戸時代、幕府の鎖國に至つて復古の精神が強い響をあげ、日本古代の素朴な精神の中に、人間性の眞相を見出して、その民族固有の精神を發見し、それに復古しようとしたのである。次に來る幕末の開國は再び西洋文明の摸倣を將來して、明治大正の六十年は、我が文化を外國と遜色を見ない域に到らしめた。かくて次に來つた世界大戰は各方面に劃期的改造の氣運を與へ、西洋文化に對する批判が始まり、東洋文化に世界の注意が向けられて來た。我が國に於ても再び自國文學研究が興つて來たのである。

以上の如く國文學に對する國民の使命を認知し、國文學の外國文化に對する歴史的地位を顧みる時、その今將に興りつゝある復古精神は、古代生活の中に見出さるゝ人間の眞精神・日本國民の眞相に復歸するものでなければならぬ。こゝに日本古典文學はその精神の源流として、再び絶大な關心を以て眺めねばならなくなる。

5　概說

第一節　（七五頁——七七頁五行）

我々は生れて日本民族であり、日本國民である。此の特殊の民族性、民族精神をもつて固く結ばれてゐる日本國民は世界に於いて最も惠まれた國民である。我々國民としての最も正しい生き方は國家により民族共有の生命の實現に努め、民族精神の世界的擴充を圖る事である。而して此の民族性の反省と自覺を促し、國民精神にたえず新しい生命を供給してくれるものは二千年來の國文學である。

第二節　（七七頁六行——七八頁末行）

國文學はその國民の精神をさながらに映した鏡である。それは他の如何なる文學とも價値の比較を許さざる最も愛すべき文學である。我々は最も深い愛をもつて、その本質を究め、それを充實展開せしめねばならない。此の點に於いて古來の作家にも研究者にも心からなる尊敬を捧げねばならない。

第三節　（七九頁——八〇頁六行）

文學には國境はない、それは人間性の内面に深く共通の心情を有するからである。しかし一面、これ位特殊の民族性、國民的血色の鮮明なものはないのである。而してその文學の全精神の理解はその國民でなくては決して出來ないのである。殊に我が國の如く特殊の民族性と國家と特殊な生活を持つた國民の文學、特別な組織を持つた國文法に表はされた文學は、我々日本國民をおいて何人も研究する事は出來ないのである。

第四節　（八〇頁七頁——八二頁一一行）

我が國民の過去を見ると、我が國民が素樸な生活をしてゐた遠い昔に印度・支那の燦爛たる文化の光輝に接し、驚異・羨望・崇拜、あらゆる方面に於いてそれを輸入し摸倣する事につとめ、拜外の迷夢はいつか國民の間にしみこんでしまつた。偶〻江戸時代、幕府の鎖國政策によつて外國輸入の途が絶えた時、自らをかへり見る機會が來た。復古の精神は強い響を上げ出した。それは日本古代の素樸な精神の中に、人間性の眞相を見出したのである。民族固有の精神を發見しそれに復せんとしたのである。遠く放浪してゐた日本民族精神が我が家へ歸つたのであつた。

そして此處に幾多の尊い事業が生れた。

第五節　（八二頁一二行——終）

これを更に三小節に區分し得る。

第一小節　（八三頁末行まで）先覺の提唱や實行によつて拜外の迷夢は一部破れかけたのであつたが、鎖國撤回と共に再び洪水の如く流れて來た西洋文明に眩惑され、その輸入、摸倣に全力をそゝいだ。明治・大正の六十年は拜外の夢に費された。しかしその結果、我々は他に劣らざるまでにこぎつけて來たのである。

第二小節　（八四頁一〇行まで）世界大戰はいろ〳〵の意味で世界の劃期的大事件であつた。それは各方面に根本的改造の氣運を與へた。その最たるものとして西洋文化への批判が加はり、新しく東洋文化に對する世界の注意が

向けられた事である。

第三小節　（終まで）我が國に於いても風潮に應じて、再び自國文學復興研究が起つて來た。それは若い人々の間から勢よくとなへられた事であつた。此處に再び復古精神は勃興したのである。その復古精神の本質は德川時代のそれの如くあつても、その樣式はさうあつてはならぬ。舊い昔の社會生活をさながらに今日に移すのではない。古代生活の中に見出さるゝ人間の眞精神、日本國民の眞相に復歸するものでなければならぬ。此處に至つて日本古典文學はこの精神の源流として再び絶大なる關心を持つてながめねばならぬ事は世界的の狀態から見て必要な事となつたのである。

總括して第五節は、明治に至つて更に摸倣時代となつてしまつたのが、世界大戰を機として再び復古思想の勃興を來し日本文學の新しい使命が起つた事をのべてゐる。

6　取扱上の用意

◆　語句や文章には何等厄介なものはない。隨つて、教授の主力は、內容の了得に向けらるべきである。內容をなしてゐる所論も極めて明瞭に條理立つてゐて、誰しも首肯し得るものである。故に、前項「要旨」「概說」等に要約しておいた程の要點を生徒各自をして了得せしめるやう指導してやるべきであらう。

7　設問

1. 「內的生活に糧を供してくれる」といふことを、もつと平易に說明して見よ。
2. 我が國民の結合が有機的であるとは、どういふ事實をさすのか。
3. 「國文學を外國文學に比較して價値の比較に及びたくない」とは、どういふ理由からか。
4. 「復古の精神」とは如何なるものか。
5. 江戸時代の復古主義と今日の復古精神との間にどんな差異があるべきか。

釋義

【生命の糧であり力であるものは國文學である】　日本人にとつて、日本人としての生命を養ひ、助長して行く、第一番に大切な要素であり、又日本人の日本人たる力となるものは日本の文學である。

【內的生活】　ナイテキセイクヮツ。こゝでは精神生活といふと同樣な意味で用ひられてゐる。

【血によつてなされてゐる國民の結合】　血統がつながつてゐる、同一祖先から生れてゐるといふ關係で結ばれてゐる國民の結合。

【無機的】　ムキテキ。次の「有機的」に對する語である。それ〴〵の物、又は一つの物を構成する要素の間に、何等の內面的な必然の統一をもたない、全くの偶然的なものをいふ。

【有機的】　イウキテキ。外面的に偶然統一をもつてゐるのでなくて、內面的に必然の統一をもつてゐることをいふ。

【民族性】　ミンゾクセイ。一つの民族として有してゐる特殊の性質をいふもので、個人の場合の個人性又は個性と呼ばれるものに對するものである。folk character の譯語。

【民族精神】　ミンゾクセイシン。一つの民族に顯著な精神的の特質をいふ。前の民族性の一部分をなすものである。folk spirit の譯語。

【さながらに寫す】　そのまゝに寫す。ありのまゝに寫す。

【文藝】　ブンゲイ。(一)學問技藝といふ程の意に用ひられることもある。(二)美的現象を思想化して表現する藝術の義。卽ち、詩歌・文章・小說・繪畫・劇・彫刻等はみなこの中に入る。

【古典文學】　コテンブンガク。

【筆寫】　ヒッシャ。古い文學には、寫本のまゝで傳はつて刊行されてないもの、又は未刊の異本等が多い。これを筆寫して研究の資料に供する必要がある。

【蒐集】　シウシフ。散佚し、或は不明になつてゐる古文書、古典等を集めるのである。

【整理】　セイリ。あつまつた斷簡・零墨・筆寫等を整理して、文學の原型を定めたり、本文を校訂したり、するやうな仕事を必要とする。

【訓詁】 クンコ。古文の字句の意義を解きあかすをいふ。
漢書の楊雄傳に「少而好學、不爲章句訓詁」
【註釋】 チュウシャク。古典を現代人に讀解出來るやうに解釋を施す。
【批評】 ヒヒャウ。文學の形式・內容・思想・表現・價値等を論評し論斷する必要が生じて來る。
【素樸】 ソボク。かざりなく、人爲なく、原始の狀態のままであること。
【燦爛】 サンラン。あざやかに輝く貌。盛んに明らかなこと。
說文に「燦爛、明靜貌。」
【驚異から羨望、崇拜の心を向けて】 すぐれた文化に接して、先づ第一にそれに對して驚き、次にはこれを羨むやうになり、ついでこれを崇拜するやうに、次第に心の移り行つたこと。
【熾に】 サカンに。火の燃え上るが如くに、勢の目立つて盛なことをいふ。
【內なるものを省みる遑なく云々】 日本民族が自ら持つてゐる所のものが、どんなものであるか、どんなよいものであるかを、十分に反省してみる暇もなくて、いきなり外來のものを摸倣することに努力した。
【制度】 セイド。こゝは政治・經濟・社會等に於ける制令律度をさしたのである。
【服飾】 フクショク。衣服及びその裝飾。又衣服のかざりの意。こゝでは前者。
【藝術】 ゲイジュツ。(一)、概念。廣義に於ては、一定の才能及練習を豫想する人間の活動卽ち技術と同義に用ひられることもあるが、普通はその中殊に美的効果を喚起する特殊の活動及びその結果を云ふ。
(二) 本質。自然と人間との關係を問題として藝術を考へた昔から藝術の定義は種々に與へられてゐるが、素より滿足なものは有り得ない。藝術の本質は、その諸々の現象の完全なる研究の後に初て闡明さるべきものであるから、一言にして豫めその核心を實質的に捉へる事は不可能である。吾々は只その活動の特色を考察する外仕方がない。先づ藝術とは、或る生產活動の過程その者、若くはその成果所產をも括めて言ふ言葉であるが、我々の藝術成立の要件を綜合すれば、藝術とは一定の社會に於ける人間の內面生活の要素及び內容をその心的衝動に基き、特殊なる外的材料、技巧樣式によつて美的に表現する人格的活動の過程及結果であると云ふことが出來よう。故に藝術に取つて就中肝要なるものは、一、文化的價値ある精神的內容、二、その個人的把捉、三、その外的表現である。斯の如くして生產せらるゝ觀照的成果が恒久的に固定せられたるものを藝術品又は藝術的作物と云ひ、その生產者を藝術家と云ふ。
(三) 體系。藝術は人間の社會に於ける特殊的生產活動として、それ自らの文化的分野を有し、從つてそれ自身の體系を有する藝術體系の問題は大別して二つとなる。一つは分化の問題、他は分類の問題である。分化の問題に就いては藝術の原型は一か多か、何かの問題であり、分類の問題は藝術一般を種々の立場から分類する事であり、普通には形式的に見て、
造形藝術(空間的藝術)　建築・彫刻・繪畫。
音律藝術(時間的藝術)　詩・音樂・舞踊。
の如く分類する。
四　目的。藝術の目的に關しては、通常二個の見地が對立する。一は所謂「藝術の爲の藝術」主義で他は「人生の爲の藝術」と云ふ立場である。然し藝術を一の文化要素と見、而して文化價値としてのみ、その自律性の意義を解釋する者に取つては、藝術の爲の藝術と、人生の爲の藝術とは決して互に矛盾する概念ではない。要するに斯の如き主義の對立は、常に實際的意味を有するに過ぎずして、理論上に於ては、左程根本的の意味を有するものではない。
【追隨】 ツキズキ。あとから追ひ隨つて行くこと。先に進歩した者に及ばうとして後から努力すること。
曹植の語に「淸夜遊二西園一、飛蓋相追隨」
【王朝時代】 ワウテウジダイ。必ずしも適當な語ではないが、文學史上の慣用的語句として用ひられてゐる。政令が直接に皇室から出た時代といふ語義であるが、實際には特に平安朝時代を指して用ひてゐる。

【武家時代】　ブケジダイ。征夷大將軍が幕府を開いてゐた時代。鎌倉幕府・室町幕府・江戸幕府の時代を總稱する。

【杜絶】　トゼツ。ふさぎ絶つこと。ふさがり絶えること。後漢書に「杜絶邪僞請託之原」

【ゆくりなく】　はからずも。思ひがけなく。不意に。土佐日記に「眺めつゝくる空にゆくりなく風吹きて」

【天籟】　テンライ。風が物に觸れて自然に鳴る響。天から聞える自然の聲。

【耳朶】　ジダ。みゝたぶ。みゝ。五燈會元に「風吹耳朶」

【賀茂眞淵】　カモマブチ。本姓は岡部。初名は參四。又政德。後に衛士と改む。實名は政成。又政藤。眞淵と號し家號を縣居といふ。遠江國敷智郡伊場村新宮（今は濱名郡淺場村）の禰宜定信の二男。五世の祖に、元龜三年三方原の合戰の時、德川家康に仕へて勳功のあつた政定がある。元祿十年（一三五七）三月四日生。母竹山氏。眞淵幼少の時、姉聟政盛の養子となり、後同族政長の聟養子となつたが、二十八歲の時、妻の死に逢つて其家を退き、眞言宗の僧にならうとしたが、父母が許さず、果さなかつた。後又、濱松の本陣梅谷氏の聟養子となつてほゞ十年に及んだ。

眞淵は幼時母から萬葉集中の秀歌數首について、古歌のやすらけく、みやびかな妙味を說かれて會得する處があつた。又專ら漢學に心をよせて、詩作などに努力した。且つ春臺門下で後年「老子愚讀」の著などのあつた渡邊蒙庵に就いて漢學を學んだ。尙眞淵が十七・八歲から廿六・七歲までの間に於いて、京都の荷田春滿が江戸への往復の途中、その姪の夫、諏訪神社神主杉浦國顯及び門人五社神主森暉昌等の家をたづねてゐるので恐らく眞淵もその謦咳に接して、年若き心に刺戟を與へられたこともあつたらうと考へられるのである。且國顯・暉昌の二先輩とも交を結んで、敎を受けたことも少くなかつた。かくて享保十八年（一三九三）三十七歲の時、先輩のすすめもあり、志を立て上京し、春滿の門に入り、その歿年まで就學した。期間はわづかに四年であつたが、春滿の學問思想の晩年圓熟の時に際し、十分にその蘊蓄を受用することが出來、こゝに眞淵は愈〻近世古學運動の主潮に親しく投ずるに至つた。眞淵は春滿が逝去した翌元文二年（一三九七）年四十一歲で歸鄕し、その翌年（一三九八）江戸に出た。同時に梅谷の稱をやめて岡部に復し、又門戸を張つて歌文を敎へた。

約十年を經て、將軍吉宗の子、家重の弟で文藝の愛好者であつた田安宗武に知られ、延享三年（一四〇六）五十歲で、春滿の子、在滿に代つて召された。寶曆十年（一四二〇）六十四歲まで之に仕へ、致仕後明和元年濱町の縣居に閑居して著述と講莚とに努め、明和六年十月三十日、七十三歲で歿した。墓は品川東海寺境內にある。

眞淵は歌人であると共に學者でありまた思想家であつた。歌に於いては萬葉振を高調し、記紀萬葉等古典の研究に努力すると共に復古主義を唱へて、儒學者派に對して、國學者一派の日本主義を代表した。日本の文化史上稀に見る詩人思想家といふべきである。

著書の主なものは冠辭考・祝詞考・續萬葉集論・源氏物語新釋・伊勢物語古意・歌意考・語意考・縣居歌集・縣居翁集等數十種で、悉く全集に收められてゐる。

門人は三百餘人。その主なものは、加藤宇萬伎・村田春鄕・楫取魚彥・橘千蔭・村田春海・本居宣長・荒木田久老等である。

【萬葉集】　マンエフシフ。二十卷。現存する我が國最古の歌集である。古事記と共に我が上代文學を代表するものであり、一面あらゆる分野から見て貴重な記錄として尊重される。

撰者は古來種々な人が擬せられたが、一人の手によつて一時に成つたものでないことは定說となつてゐる。

所收の歌數は本により多少異るが、萬葉集古義によれば、四千四百九十六首で、これを形式上から分類すれば、長歌二百六十二、短歌四千百七十二、旋頭歌、其他六十一となる。年代の明らかなもののみについて言へば、最古のものは仁德天皇の皇后の御歌で、最新のものは淳仁天皇の天平寶字三年で、その間四百四十六年に亙る。作者は明らかなもののみで五百六十一人。社會のあらゆ

る階級を網羅し、上は天子・皇后・皇太子をはじめ、下は遊女・浮浪の類に至る。

代表的歌人としては、柿本人麿・山部赤人・山上憶良・大伴旅人・同家持・額田王・大伴坂上郎女等である。

萬葉學は鎌倉時代の仙覺に始まり、近世に至つて契沖・下河邊長流・賀茂眞淵・本居宣長・荷田春滿・香川景樹等の國學者が相次いで努力した。

【本居宣長】　モトヲリ　ノリナガ。本卷、二一課參照。

【古事記】　コジキ。三卷。稗田阿禮(ヒエダノアレ)の口誦を、元明天皇が太安萬侶(オホノヤスマロ)に命じて輯錄せしめられた我が國最古の史書。開闢から人皇三十四代推古天皇の朝に至る間の神人及び御歷代の事實を錄したもので、和銅五年（一三六二）に成つた。

我が國體の成立由來を知るは勿論、語學・國文學・神道學等あらゆる分野から見て極めて重大な價値を有する。

【古事記傳】　コジキデン。四十八卷。本居宣長の著。古事記の註釋書として最大最高のもので、明和元年（二四二四）起稿、寛政十年（二四五八）に成つた。

【提唱）　テイシャウ。事に先だつてとなへ導くこと。

【鎖國】　サコク。國をとざして、對外交通、通商を禁ずること。

江戸幕府は切支丹宗禁制のために、切支丹傳道に關係のない和蘭を除く西歐諸國との交通、商賈を禁じたのである。

【世界大戰】　セカイタイセン。西曆千九百十四年から十八年まで、主として歐洲の地に於て行はれた大戰。ドイツ・オーストリヤを主とする同盟國軍と、佛・英・伊・露を主とする聯合國軍が主力となり、漸次全世界に波及して、戰爭參加國三十四、總動員、召集人員六千七百萬、戰死七百七萬、負傷千六十七萬（佛及びルーマニヤ・露等を除く）戰費七百億圓に上る古今未曾有の大戰爭である。

【劃期的大事件】　クッキテキ　ダイジケン。前と後と全く異つた時期の境をつける程の大事件。

【思索】　シサク。考へもとめる。深く考へて理を求める。

管子に「思索生レ知、慢易生レ憂」

【認識】　ニンシキ。心理學的普通の用語に依れば、凡て知る作用で、卽ち物界が心に影響する結果として生ずる作用をいふ。感覺・知覺より記憶・思惟の諸作用を包含する。

【荷田春滿】　カダアヅママロ。德川中葉の國學者。姓は羽倉、通稱は齋宮、初の名は信盛、後に春滿と改む。荷田は一に蚊田に作り、春滿は一に東滿又東丸に作る。京都稻荷山の祠官。幼より學を好み、深く國史・律令・古文・古歌等に通じ殊に神代の卷と萬葉集とに就いて獨創の見を立てた。享保年中江戸に遊ぶや、將軍德川吉宗の聘を受けたが辭して應じなかつた。晚年京都伏見に國學校を創立せんとして幕府に建議した啓文は今も有名である。其の企の未だ成らぬうちに、元文元年七月病みて歿した。年六十九。明治に至り古學復古の功を嘉みして正四位を贈られた。人となり謹嚴で氣節があり、夙に國學の復古を以て己の任とした。いはゆる國學として古道を說いたのは春滿に始まる。又中世以後淫靡風をなすを慨し、終生戀歌を詠じなかつたと云ふ。其著は歿するに臨み侍者に命じて燒かしめたために傳はるものが少い。

【平田篤胤】　ヒラタアツタネ。近世國學の大家。荷田春滿・賀茂眞淵・本居宣長と併せて國學の四大人といふ。本居宣長歿後の門人である。出羽國秋田の人、幼名正吉、通稱は大角、初名は胤行、後に篤胤と改名。父は大和田清兵衞祚胤といひ、秋田藩士である。二十歲の頃奮然志を立て僅に金一兩を懷にして江戸に出で、力行して衣食すること四五年、あらゆる困苦を嘗めた。寛政十二年備中國松山の城主板倉侯の藩士平田藤兵篤穩の知るところとなり、遂にこれが養子となつた。時に二十五。享和元年始めて本居宣長の書を讀み古學の志を起し、同七月伊勢國松阪に到り名簿を捧げた。然し門下の諸氏中其の氣勢を忌む者多く、讒行はれて親しく其教を受くるを得ず、荏苒日を過すうちに宣長は病歿した。同三年太宰春臺の書を讀んで呵妄書を著はした。これが著述の初である。文化元年眞菅の屋と稱し、始めて徒弟に教授した。五年白川神祇伯が諸國神職をして古學を講ぜしむるにあたり、篤胤は功が多かつた。八年駿河府中柴崎直言の家に

居りて古史成文の稿を起し七晝夜一睡もせず、以て其功を畢へた。其精力概ねかくの如く爾來年々著述を絶たず著はすところ古史成文・古史徴・古史傳を始めとして、一百餘種、數百卷ある。今は皆平田篤胤全集に收められる。篤胤の偉大なのは其精力の絶倫なると同時に、熱誠の熾盛なる點である。故に儒佛を攻擊するや、讒謗罵詈到らざるなく、最も痛快を極めた。我朝には古來儒佛を攻擊した人は必ずしも少くはない。但し孔子・釋迦を罵倒した人は少いであらう。此の熱誠があつて後の神道は成立したのである。篤胤は單に破壞的でなく、一方には建設的であつた。彼は其師とした宣長の文及其先輩たる他の國學者の所說を一層增大し、擴張し、其博識考證を以て大日本國の神道を建立せんとしたのである。故に「花鳥を我もあはれと見てはあれどあはれと歌ふ暇なかりけり」と詠じた。一生を通じて唯々乾々として古學の完成、國道の創建に力めた。故に其の死せんとするや、「思ふこと一つも神になしをへず今やまかるかあたら此の世を」と歌つた。以て其志を知ることが出來る。故に其說の感化力は絶大で、幕末の志士等と會談したことも少くない。其塾頭であつた越後の人生田國秀は慷慨悲憤民人を救はんがために官衙を襲ふに至つた。それらが禍をなしてか、遂に幕府の忌憚にふれ、天保十二年藩より著述差止の命を受けた。かくて秋田に止まつたが天保十三年九月十一日病の爲に歿した。年六十八。羽後の手形廣澤山正洞院に葬る。白川神祇伯より諡號を賜はりて、神靈能眞柱大人といふ。明治十六年二月正四位を贈らる。

【警醒】ケイセイ。ねむりをさまさせる。轉じて世人の迷をさます。

【固陋】コロウ。かたくなで、心の劣つてゐること。

司馬相如の上林賦に「鄙人固陋、不レ知二忌諱一」

【因襲】インシフ。前のあとをうけ襲ぐこと、前よりのしなれに因る事。しきたり。

劉歆の書に「漢興、去二聖帝明主一遐遠、仲尼之道又絶、法度無レ所二因襲一」

【いびつ】圓い形のゆがんでゐるもの。一般に曲つた形のものをいふ。

【憧憬】ドウケイ。あこがれる。

8　參考

原文の省略

教科書第八〇頁六行「我々日本國民のみ成し得べき業ではあるまいか」の次に左の文が略されてゐる。

チエンバレン氏に古事記の英譯があり、フロレンツ博士に萬葉集の研究があり、アストン氏に日本文學史の著述があり、最近ウエレー氏の源氏物語の英譯第一卷が出版された。又ハンブルグ大學にはフロレンツ博士の日本文學の講座があり、巴里の大學ではエリセエフ君が日本文學を講じてをり、ペトログラードに倫敦に日本文學に關する講義があると聞く。併しながら、これ等の著譯は我日本文學の研究として十分なものでなく、諸氏の講義も唯一局部に限られてゐる。日本文學はまだ世界に知られてゐることの極めて淺く且つ狹いものである。今日世界に强を稱へてゐる國民文化を誇つてゐる國民から見れば、我が國語は彼等の國語と系統上、組織上、違つたものあり又國土の位置からすれば遠く隔離し、國際關係からいへば約一世紀以前までは沒交涉であり、文化の上では、今日こそ彼に倣つたものが、甚だ多くて密接であるが以前に於ては全く特殊な展開をなし來つたものであるから、彼等が我が文學を知らないのも無理ならぬことである。併しながら、我國民自身がこれを蔑視しこれを等閑に附し、これを知らざるを恥としない態度は甚だその意を得難いものである。是に就いて我我は大いに國民の反省を促したいと思ふ。

八五頁八行「若い人たちの中に聞かれるやうになつた」の次に「新忠君論、新愛國運動は若い人達を中心として起つたのではあるまいか」が續く。

尙教科書の全文の次に左の如き要項の論ぜられた文章が續いてゐる。即ち

斯樣にして復古精神の勃興は少壯有爲の青年學徒を多數國文學界に誘うた。今や國文學界は空前の大盛況を見、國文學の奧扉は開かれ、古典の眞價は新しく認められ、國民精神の理解、國民性の自覺に一段の深さが出來て來た。

しかしなほ學從の爲に殘された未開墾の荒蕪地は多々あるのである。學者の研究のみならず民衆理解の方面にも更に努力すべき點が多い。

德川時代の國文學研究家は種々の不便の中をしのびつゝ實によく斯界のためにつくしてくれた。しかし彼等の研究をもつて足れりとする事は出來ないのである。時代と共に進み行く學問の立場より我等に殘されたる問題は、

本文批評　異本、別本の分類、定本の制定、諸註の集成等我々は我々の時代の有する社會的、學問的の有利の立場を利用して德川時代の學者の一部分しか手を付けてない部分を完成せねばならない。併しながら此の事業たる可なりの努力と時間とを要する事で短日月の間に容易に成きるべきものではない。實をいへば斯かる

事業は學者一個人の業とするよりは國家事業とする方がよい。否かゝる事業の爲に國家機關を設くる事は國家當爲の任務と思はれる。併しながらこれが今急に行はるべしとも思はれないのは、學者の世に先だつて唱道せざる怠慢の罪か、はた爲政者の短見の罪か、また國民の冷淡の罪か、遺憾千萬の事である。

註釋　古人が國文學研究上に最も努めたのは註釋の作業である。後世學者は大抵古人の註釋書に依つて古典を讀み且つ研究してゐる。古人は此の方面に於いて多大の業績を我々に遺してくれてはゐるけれども、決して有益なる古典の總べてに亙り、且つ遺漏なく、遺憾なき註を成就し得てゐるとは言ひ難い。古典文學の中にはその註釋の全く閑却されてゐないにしても、甚だ不完全の狀態に放置されてゐるものは少くない。宇津保物語・蜻蛉日記・和泉式部日記・狹衣物語・とりかへばや物語皆然り、室町・江戸の文學比々として然り、明治以降の學者のこの方面に於ける業績は見るに足らず、古人に恥づべき位である。斯く見て來れば註釋の上で我々の手を待つてゐる古來の文學は頗る多いといはねばならない。

次に古人註釋事業の跡を見るに、多くは語せめては句の意義の穿鑿に止つて、章意全文意の解に及ぶものは少い。

從つてこれ等の註釋書の手引のみで容易に本文を解し得べきものは稀である。又その解釋にしても學問の發達した今日より見れば噴飯の說すらある。これ等の說の誤謬や不備はもつと訂さるべき筈である。若し古學者の說に盲從し、或はその拘束を受けて新しい開拓を註釋作業の上に成し得ないならば我々は先づ古人に對して大いに恥づべきであらう。

又註釋作業を分解すれば、いろ〳〵の方面がある。文を形成する語句の上でも、單語・文法・修辭・律格、文の方面でも物・事實・思想・感情・氣分等の各方面がある。これらの方面が正しく且つ精しく知られるやうにするのが註釋の目的であらねばならぬ。これ第一文學作品として相互に密接なる關係を有し統一されたるものであるからこれ等と全く切り離した註釋は甚だ不備である。新しい註釋は表現の形式（文）とその要素（語句）とを別物として取扱はないものでなければならぬ。國文學の民衆化の爲にこの種の完備した註釋書を求めて求めて止まないのである。

鑑賞　如何にすぐれた作品でも、讀者の感じがうすく、印象が弱ければ何にもならぬ。又如何なる嚴正な批評でもその背景に謙虛な心に正しく受け容れて鑑賞して得た印象を凝視しこれを解剖したものでなければならない。

我國文學評論は此の態度を無視したわけではないがこれを正確に表現する言葉を知らなかつた。しかし今日精神科學の語を借りてわが印象を細かに言ふことも出來るし又文壇には自ら精神現象についての細かに語る用語も出來てゐる。斯うした點に於ては古人の企て及ばない巧みな說明等を見るのである。こゝに文學理解を深める大切な道がある事は疑ふべくもない。

評論　古人の業績は文學評論の方面に最も貧弱であるといはねばならない。江戸時代の評論も多少はあるが、今日の我々から見れば、その標準を誤り、目的を正しく見てゐなかつたものが多い。我々は西洋の學者に由り、批評の歷史、種類等に就いて多く敎へられてゐる。文學批評の基礎等にも多くの利便を有してゐる。此の點我々によつてなさるべき幾多の問題を見る。

又國文學の文化史的研究、生活史的考察も我が國民生活の進路に一大光明を揭げる事が出來るであらう。要するに我々は過去の爲に過去を究める愚を敢へてせんとするものではない。我々國文學を研究するのは時代の新文化、新生活の創造の必要の爲になすのである。我々の研究はそこを成し得て始めて、その眞意義を十分に發揮し得るものである。

一一　土佐日記鈔

1　解題

「土佐日記」の中から三題を鈔錄した。

土佐日記は一卷。紀貫之の作。貫之は醍醐天皇の延長八年（一五九〇）土佐守に任ぜられて國に下り、在府六年の後、朱雀天皇の承平五年（一五九五）歸洛した。日記はその年十二月二十日土佐の國府を出立し、翌年二月十六日京の故宅に歸る間の紀行である。當時の男子は專ら漢文を用ひ、假名は女文字と稱して女流の使用するところであつたから、貫之はこの假名文の日記を書くにあたつて、「男もすなる日記といふものを、女もして見むとてするなり。」と冒頭して、作者を女に假託した。

香川景樹は、「貫之の古今集を撰んだ時は既に四十五六歳であつて、この日記を書いた時は七十三四歳頃であらう。」と推定してゐる。

土佐日記の文章について、藤岡作太郎博士の所說を左に引用しよう。

紀貫之

古今集序（貫之作）と土佐日記とを並べて見よ。序は文に抑揚頓挫あり、秩序整然、名將が三軍を率ゐて行進するが如くなれども、華美に過ぎ、語句の雕琢を主として、情熱に闕くるところあるが如し。これを措いて日記に向へば、□蘊の厚味に厭いて奈良茶の淡泊に舌うつが如く、しかもいふべからざる興趣のその中に存するを見る。これすなはち中古の綺語麗句を重ねて無意義の文を飾る弊に懲りて、近世の士が日記を歎稱する所以なり。しかれども理路の整頓を喜び行文の莊嚴を尙ぶ勅撰集の序と、一時の興に乘じて情熱の動くに任する日記の文とを同じ尺度を以て測らんとするは、測る者の過にあらずや。彼は珠玉を碎き金銀を切りて彩華炫耀たる三尊來迎の畫幅にして、此は一抹の墨痕に雲煙の影を留むる墨繪の卷物なり。彼は花の宴に錦を張りたる幕の陰より舞ひ出でたる蘭陵王にして、此は曉暗く袂冷やかなる馬道に蟲の音にまがふ朗詠なり。…（中略）土佐日記の文、簡勁なりと賞美せらるれども、これを伊勢物語などに比するに、またその敵にあらず…（略）

（國文學全史、平安朝篇に據る）

參考書

土佐日記抄　　北村　季吟著

土佐日記註　加藤宇萬伎著
土佐日記考證　岸本由豆流著
土佐日記燈　富士谷御杖著
土佐日記創見　香川景樹著
土佐日記俚言解　佐々木弘綱著

2 作者

紀貫之　キノ　ツラユキ。

藏人紀望行の子。知名の歌人、書家。延喜年間、御書所預となり、諸官を經て大内記、加賀・美濃介に轉じた。

凡河内躬恒（オホシカウチノミツネ）壬生忠岑（ミブタダミネ）等と共に勅を奉じて古今集を撰し、これが序（假名文の序）を作つた。これが卽ち勅撰集のはじめである。

而して古今集中收められた貫之の作は大約百首の多きに及んでゐる。

延長年中、大監物右京亮に任じ、土佐守となつた。承平年中任滿ちて歸り、紀行土佐日記を著した。

土佐日記に先だつて、勅を奉じて新撰和歌集を撰したといふ。

天慶年中、玄蕃頭となり、從五位下に進み、木工權頭にうつり、從四位下に陞つた。天慶九年（一六〇六）五月在官中に薨じた。年二十五。

前述著作の外に、家集及び萬葉集鈔の著作がある。

明治三十七年四月從二位を追贈せられた。

3 編纂の用意

平安朝に於ける假名文日記の嚆矢と稱せられてゐる土佐日記の數節を揭げてその「簡古輕妙の筆致」を味ははしめ、併せて作者貫之の國文學上に於ける不朽の功績を追懷欽慕せしめたい。

4 要旨

國語で書かれた初期の文章、殊に國文學史上日記文學の先驅と稱せられ、又紀行文學の源泉と謂はれてゐる土佐日記について、その內容の一斑を示し、大體の辭樣・形式を知らしめ、且つその筆致・情調を味讀せしめるのが要旨である。「男もすなる日記といふもの」との起筆の一句と、「とまれかくまれ、とくやりてむ」といふ最後の一句とは、卽ち土佐日記原文全篇の首尾でもあることを語つて、この種の日記といふものに對する當時の筆者等の考をも了解させることは、國語及び國文學發達史よりいふも大切な事柄である。

5 概說

本文各節の題目によつて、その梗概をのべる。

第一節（八七頁——八九頁九行）出立ち。

先づ日記といふものを試みる由を言ひ、さて、土佐守の任地より出發して來る折のことを記述した。別れ難く思ふ人々が送つて來て、にぎやかに醉うたりした。

第二節（八九頁——九四頁）海の上。

大湊より那波へと志して船を出す。猶こゝまで慕つて來た人々と、いよ〳〵別れはててしまふ。別離の情堪へられぬものがある。海上に日が暮れて、心細くあはれな心持に浸る。二十日は、天候が惡いために船を出さず。月を眺めつゝ仲麿の故事などを偲ぶ。

第三節（九四頁——九七頁）都入り。

月明桂川を渡つて、故鄕にかへり着く。先づ、途中の感想や、景色や、出來事を記し、それから、月下に見る荒れ果てた家の樣や、それにつけて亡き女子のこと等、そゞろに身に沁みることを敍した。

6 取扱上の注意

▲土佐日記は日記とはいふものの、平安朝の他の日記と類を異にして居るところは、その紀行である點である。卽ち伊勢物語・和泉式部日記等、和歌が先づあつて出來た日記文學とは相異なり、紫式部日記の如く身邊の日常を寫實したものとも相違してゐる。そしてその紀行たるや、漢文でかゝれた旅行記とはちがつて、單なる記錄ではなく、備忘錄でもなく、淡如として水の流るゝ如きあはれさの中に、現實味を失はず、そこに他の平安朝の物語の一面と相通ずるものがあると同時に、紀行文として更科日記や海道記等の先驅となつて居る趣がある。

▲更に特筆すべきことは、やはりその素樸・簡古な筆致であり、また、純眞・幼稚な一種の諧謔味の存することである。尤も、或評者はこの特徵を以て特徵とせず、「土佐日記は實に愚劣な作である。」と貶し去つたことがある。しかし、それは、凡そ國文學上の作品を、歷史的に觀察することを知らぬ者の言であつて、固より取るに足らぬ說である。譬へば、大人の步行を標準として、三四歲の幼

兒の歩行を笑ふが如き愚説である。これらの文に對しては、すべからく當時の社會、特に執筆者の有してゐた時代精神とその個性といふものを考慮に入れて讀むべきことを、生徒にも敎ふべきである。

◪なほ修辭上、次の語句に注意させたい。

これは物によりてほむるにしもあらず。

一文字をだに知らぬものしが。

ふみしなければ。

急ぎしもせぬ程に。

何とも思へらず。

いもねず。

よめりける歌。

◪それから「かつら川」の歌の結句

べらなり。

は、古今集時代の歌の特有語であることを注意せしめたい。

◪又、次のやうな簡明な語句が文中に散見して、それが古雅な、しかも遒勁な味を與へて居ることを注意させたい。

これかれ知る知らぬ送りす。

平らかにと願ひ立つ。

これより今は漕ぎはなれ行く。

人も遠くなりぬ船も見えずなりぬ。

いとわびし。夜はいもねず。

7 設問

1 「平安朝時代の文學」の章にいはゆる「簡古輕妙の筆致」とは、本文に於ては何れの辭句を以てその例證とすべきか。

2 「男もすなる」を「男もするなる」としては、如何に異なるか。

3 戌・戊・戌・戉などの文字は、それ〴〵如何なる區別があるか。

4 講師・館・あるじ・かへりごと、などの各語の意義・訓み方・用法等について、古今の相違を說明せよ。

5 今日のわれ〳〵の記す日記と、この土佐日記とを比較して、日記として共通してゐる事項を述べよ。

8 釋義

出立ち

【男もすなる日記といふものを云々】 男もするといふ日記といふものを、女（作者貫之は自分を女に假託して書いた）もしてみようとおもつて、するわけである。

◎當時の男子の日記はすべて漢文體であつた。

「すなる」の「なる」はさ行變格活用の動詞「す」の終止形「す」について、詠歎の意をあらはし「するなり」の「なり」は同動詞の連體形について、指定の意をあらはすことを生徒に注意させたい。

◎一本には「男もすといふ日記云々」と見えてゐる。

【それの年】 某年。實は朱雀天皇の承平四年（一五九四）であるのを、おぼめかして、かやうに書いたのである。

【十二月二十日あまり一日の日】 シハスのハツカあまりヒトヒのヒ。陰曆十二月二十一日。「十二月」は「しはす」とよみ、師走とも書く。陰曆の十二月。極月。

竹取物語に「霜月・しはすの降り氷り、みなづきの照りはためくにも、さはらず來けり。」

【戌の時】 イヌのトキ。今の午後八時から十時までの間。

子午後十二時、丑午前二時、寅同四時、卯六時、辰同八時、巳同十時、午同十二時、未午後二時、申同四時、酉同六時、戌同八時、亥同十時。

【門出す】 土佐の國守の館を出立した。

「門出」（カドデ）は、わが家をいでたつこと。出立。首途。發途。

古今集、哀傷に「かりそめのゆきかひぢとぞおもひこし今はかぎりの門出なりけり」

【或人】 こゝは作者自身（貫之）をおぼめかしていふ。

【縣の四年五年果てて】 アガタのヨトセイツトセはてて。

國守としての四五年の任期を終へて。

「縣」は、昔地方官がその任國をさしていつた語。

當時の國守の任期は四年（足掛け五年）であつた。よつ

て「四年・五年」といつたのである。

【例の事ども】 残務の整理及び國守の事務を後任の國守に引繼ぐ事などをさしていふ。

【解由】 ゲユ。解由狀ともいふ。王朝時代に、内外官の任期が滿ちて、事務引繼の際、新任の人から前任の人に、引渡しの滯りなかつた由を記して渡す文書。

【住む館】 スむタチ。自分がこれまで住んでゐた國守の官舍。

「館」は貴賓・官使などの寓する官舍。むろづみ。

【船に乘るべき處へわたる】 乘船すべき處（港）へ出かけていつた。

【知る知らぬ送りす】 見知つてゐる人も、見知つてゐない人も、その出立を見送つた。「知る」

「知らぬ」の下に、「人」の字を加へて見よ。

【年頃見え具しつる人】

この數年來いつも見なれて、側近くめしつかつてゐるもの。

回一本には「年頃よく具しつる人」とある。

【しきりにとかくしつゝのゝしる】 あれやこれやと（荷造やらその運搬やら）立ちはたらきながら、聲高にいひさわぐ。

「とかく」は、とやかく。あれやこれや。なにやかや。いろいろに。

「のゝしる」は、大聲でいひさわぐこと。さわぎ立てること。

竹取物語に「われこそ死なめと泣きのゝしること、堪へがたげなり。」

【和泉の國までと云々】 和泉の國まで無事に歸りつきたいものと、神佛に祈願をこめて出立した。

「和泉の國」（イヅミのクニ）は畿内の一國、修して泉州といふ。近畿地方の南西にあつて、北東南の三面は攝津・河内・紀伊に接し、西は大阪灣に面して平野を展開してゐる。今は大阪府の所管。

【藤原言實】 フヂハラノトキザネ。傳未詳。

【船路なれどうまのはなむけす】 船路であるのに、陸路の旅のやうに馬のはなむけをしたと、しやれていつたのである。

「馬のはなむけ」は、馬の鼻向けの義。もと旅立つ人に酒・肴などをすゝめ、その馬の口を取つて、行くべき方へその鼻をむけてやつたから起つた語。旅立つ人に金錢・品物・詩歌等を贈ること。餞。餞別。

【上・中・下】 カミ・ナカ・シモ。上は國守からはじめて、下は下人に至るまで、卽ちすべての人をいふ。

【醉ひあきて】 酒に醉ひ、肴に厭きて。たらふく飲んだり食つたりして。

【あざれあへり】 とりみだしてさわぎあつた。互にたはむれあつた。

「あざる」は、戯れること。されること。又、とりみだしてさわぐこと。

萬葉集卷五に「たちあざり、わが乞ひのめど。」

【八木康敎】 ヤギヤスノリ。傳未詳。

【この人云々】 この人はいつもきまつて國守の館にめし使つたものではない。しかるに、ちやんと法にかなつた正式の餞別をした。

【守がらにやあらむ云々】 岸本由豆流の土佐日記考證に、「こは紀氏みづから謙退のことばなり。そは國司のあしき故にやあらん。今任期果てて京にのぼる時は、なべての人は薄情なれば、今はとて馬のはなむけにも見えざるを、心ある人は、さる薄情の事を恥ぢて、とぶらひ來たるよとの意なり。」とある。

【これは物によりて云々】 これは餞別の物品などくれたからといつて、その人をほめるわけではない。その心からなる厚意をめでてほめるわけである。

【講師】 カウジ。諸國の國分寺にゐて佛敎の講說を掌つてゐた僧官。

日本後紀卷十三、延曆二十四年十二月庚辛の條に「改諸國國師曰講師」

伊勢集に「せきう法師和泉のかうじになりて流されしときに。」

【醉ひしれて】 酒に醉ひつぶれて。酒に醉ひぼけて。

「しる」は、おろかになること。ぼけること。常態を失ふこと。

枕草子卷十に「げすの家の女あるじ、しれたるものそひしもをかし。」

【一文字をだに知らぬものしが云々】　一といふ文字さへ知らないものが、足を十文字にふんで遊んでゐる。無學文盲のげすどもに至るまで、千鳥足にみだれた足どりでよろこびさわいでゐることをおもしろく言ひあらはしたのである。

「ものしが」の「し」は、意味を強める助詞である。

海の上

【九日のつとめて】　承平五年(一五九五)正月九日の早朝。「つとめて」は(一)早朝。(二)あくる日の早朝。翌朝。こゝは(一)の意。

字鏡に「暾、日初出時也。豆止女天、又、阿志太」

枕草子卷一に「冬はつとめて。」

【大湊】　オホミナト。今の高知縣(土佐國)長岡郡にあつた地名。

吉田東伍の日本地名辭書に「大湊址、今詳かならず、土佐日記に見ゆる泊所なり。一說、前濱の邊といへど、又十市村ともいふ。云々。」

【那波のとまりを追はむとて】　那波のとまりに向つてゆかうとして。

「那波」(ナハ)は、今の高知縣(土佐國)安藝郡名半利村・田野村・北川村等の地の總名。名半利川の河口にある。

和名抄に「土佐國安藝郡奈半」とあるのは、この地である。

「とまり」は、舟の碇泊するところ。ふなつき。みなと。

萬葉集卷二に「大船のはつるとまりのたゆたひにものもひ痩せぬ人の子ゆゑに」

「追ふ」は、その方に向つてゆくといふ意味のことば。土佐日記の中には、この外に

「十一日曉に船を出して室津を追ふ。」

などとある。

【橘季衡長谷部行政】　タチバナスエヒラ、ハセベユキマサ。共に傳未詳。

【御館】　ミタチ。貫之の居た土佐の國府の館である。敬稱を用ひたのは、例の女の作としたからのことで、別に不思議はない。

【船の人も見えずなりぬ】　これは岸に殘る人の目に、船中の人の姿が見えなくなつたことをいふ。香川景樹の土佐日記創見に

「さて漕ぎゆくまに〳〵、海づらに立ちとまりては見送る人も遠くなりぬ。さてそこの船の中の人も見えずなりぬべし。さは岸にもきはめて言ひたき事あるべし。船にも思ふことあれども、いひやらん方なければ、そのかひなしといふ。「見えずなりぬべし。」といふべきを「なりぬ」といへり。こはいかに書きたりとも、船と岸との事まがふべきことなければ、理の上にかゝはらず、口調に任せて、たゞ浮ぶ景色を專にせるなり。……かくも調をいたはりて理を顧みぬは古の常なり。」

と見えてゐる。

【おもひやるこゝろは海をわたれども云々】

香川景樹の土佐日記創見に、この和歌を左の如く解釋してゐる。

「文だにあれば、いかに隔てし人の心も知らるゝものなれど、今わが思ひやる心の使は、たゞ海路を渡り行くばかりにて、その文なければ、かばかり甚だしき思も、さきにはえ知らざらんといふなり。」

「ふみしなければ」の「し」は、意味をつよめるために副へた助詞である。

【宇多の松原】　ウダのマツバラ。土佐日記地理考に、

「宇陀の松原は香美郡岸本村にありて、西、赤岡村に亙りたり。……地理辨(安政二年鹿持雅澄著、土佐日記地理辨)に、『赤岡の北、兎田(ウサイタ)村あり。兎田はうたとしるし、今の菟田村より南、須留田・王子・赤岡・岸本などの村村なべて廣くうさいだと呼ぶことになれるなるべし。』といへり。……列松は天正年間に伐採したるも、なほ一老松の殘りたるあり。尾池春水その綠芽を採り、筆の軸を製して、千歲管と稱し、日野資知卿に呈したりとぞ。……今岸本村の宇田町はその名殘りとぞ。」

【いくそばく】　「いくばく」に同じ。なにほど。どのくら

ね。

古今集、物名に「花ごとにあかず散らしし風なればいく
そばくわがうしとかは思ふ」

【もとごとに】 根元ごとに。どの根元にも〳〵。

【枝ごとに鶴ぞとびかふ】 どの枝にも〳〵鶴がとびかはしてゐる。

「とびかふ」は、飛びゆき、飛び來ること。入りまじつて飛ぶこと。

源氏物語、須磨の卷に「雲近く飛びかふたづも空に見よわれは春日のくもりなき身ぞ」

【おもしろしと見るに堪へずして】 面白いと思つて見てゐたところが、感興がわいてたまらなくなつたので。

【舟人】 船に乘つてゐる人。こゝは貫之自身のことをおぼめかしていつたのである。

【見わたせば云々】 「うれ」は「うら」で、梢をいふ。「どち」はどうし。どし。なかま。つれ。「べら」は「可き」の意。この時代の訛言。

一首の意は、「見わたせば、宇多の松原の松の梢ごとに鶴が住んでゐるが、あの鶴どもは、この松をおのが千歳の友とでもおもつてゐるのであらうかしら。」

富士谷御杖の土佐日記證に

「松鶴の間を羨みてわが親しき友とあかず別れゆくをなげく心あり……。」

としてゐるのは、少しうがちすぎた說といふべきであらう。

【ところを見るにえまさらず】 この處のすぐれたけしきにくらべると、歌の出來ばえの方が劣つてゐるといふ意。自らの歌を謙遜してかく言つたのである。源氏物語の歌に於ける紫式部の態度と同じで、ゆかしい限りである。

【天氣の事楫取の心に任せつ】 天氣のよしあしによつて、船を進めもし止めもするのであるが、それは自分どもが心を使つてもいたし方がないから、多年海上生活の經驗に富んでゐる船頭の見込に一任して、全く氣にとめぬことにした。

【習はぬは】 船路の旅になれぬ者は。

【船ぞこに頭をつきあてて】 夜の船路の心細さに、起きてゐることもようしないで、船底に平伏してゐるのである。

【音をのみぞなく】 たゞ聲を立てて泣きかなしむばかりである。

香川景樹の土佐日記創見に、

「音をなくは、たゞ聲を立てて泣くことのみにあらず。そのかみは、打ちくどき、歎くをも、皆おしこめて音をなくといふめり。」

とある。

古今集戀一に「忘らるゝ時しなければあしたづの思ひみだれてねをのみぞなく」

【舟子】 フナコ。舟に乘りこんで、舟をあやつる人。かこ。ふなびと。ふなのり。ふなかた。水夫。水手。

宇津保物語の菊宴に「ふね六つに舟子二十人ばかり、かぢとり四人。」

【船歌】 フナウタ。水夫どもが櫓拍子にあはせて謠ふうた。さをうた。欸乃。

宇津保物語の菊宴に「ふなうたに、ものの音ども吹きあはせて。」

【何とも思へらず】 何とも思つてゐない。

「思へらず」は、「思へり」の「り」を「ら」「り」「る」「れ」と活用させ、その未然形「ら」に打消の「ず」を添へた語である。

【昨日の樣なれば】 十九日の條に「日あしければ、舟いださず。」とある。

【心許なければ】 心がいらだつから。じれつたいから。

「心許なし」は、(一)心いらだつ。待遠に思ふ。じれつたし。(二)おぼつかなし。きづかはし。こゝは(一)の意。

【二十日、三十日】 ハツカ、ミソカ。

【およびも損はれぬべし】 毎日指を折つて日數ばかり數へてゐるので、指もいたんで、だいなしになつてしまふであらう。誇張法でおもしろく言ひまはしたところに氣をつけさせたい。

「および」は、手の指。

和名抄卷二に「指、由比、俗云於與比、手指也。」

伊勢物語に「そこなりける岩に、およびの血してかきつけける。」

【いとわびし】 たいそう心細く、ものさびしい。

【いもねず】 熟睡せぬこと。寝入りもせぬこと。

「い」は、寝入ること。

竹取物語に「夜はやすきいもねず。」

【山のはもなくて云々】 今まで見た月はたいてい山の端から出て來たが、この月は海上なので、直に海の中から出て來るとの意。

【安倍仲麿】 アベノナカマロ。元正・聖武・孝謙諸天皇の朝の人、吉備眞備（キビノマビ）と共に唐に留學し、留まりて唐に仕へ、姓名を朝衡と改めて、唐朝の秘書監となつた。天平勝寶年中、遣唐使藤原清河に從つて歸國の途に就いたが、不幸にも難船して安南に漂着した。かくて再び唐に歸り、光祿太夫兼御史中丞、北海郡開國公に進んだ。寶龜二年（一四三一）七十五歳で彼の地に卒した。在唐中、李白・王維等の詩人と交はり、文名を擅にした。

【唐土】 モロコシ。昔、我が國で支那を呼んだ稱。

萬葉集卷五に「もろこしの遠きさかひにつかはされ」

【歸り來るとき】 孝謙天皇の天平勝寶年中。

【かの國人】 唐の數多の顯官並に李白・王維等の詩人ども。

【かしこのからうた】 漢詩。「かしこ」は彼處。こゝでは唐土卽ち支那を指す。

【あかずやありけむ】 仲麿が乘船に際して催した唐の人との別れの宴は、中々興が盡きなかつたのであらう。遂に二十日の夜の月の昇る時刻までもつゞいた。

【神代】 カミヨ。我が國開闢より神武天皇の御代までの稱。じんだい。

萬葉集卷一に「かみよよりかくなるらし。」

【神もよみたび】 神もよみたまひ。

【あをうなばらふりさけみれば云々】 「あをうなばら」は青海原。青々と見えわたる海面。「ふりさけ見る」とは、遙かにあふぎ見ること。「春日」は奈良の春日山。春日神社の背後にある。「三笠山」は御蓋山ともかく。奈良市の東方にある山。春日山の山つゞき。

一首の意は、「青海原の上をはるかにあふぎ見れば、皎々たる明月が今しも美しく一天四海に照りかゞやいてゐる。あゝあの月は、その昔、自分がまだなつかしい父母の國にゐたころ、春日の三笠の山の上に出た月と同じ月かなあ。さても〳〵。」

古今集、九、羇旅には、「もろこしにて月を見てよみける」と詞書して、「天の原ふりさけ見れば春日なる三笠の山に出でし月かも」と見えてゐる。

【思ほえたれども】 おもはれたけれども。

「思ほゆ」は、思はる、思ひ得、などの意。

齊明紀に「あすか川みなぎらひつゝゆく水のあひだもなくもおもほゆるかも」

【ことの心】 そのことの意味。

【男文字にさまを書きいだして】 漢文に書きなほして。

「男文字」（ヲトコモジ）は漢字。「假名」を女文字といふに對する語。

曾我會稽山卷一に「をとこもじに和訓をつけ。」

「さま」は、樣式。體裁。

【こゝの言葉傳へたる人】 日本の言葉を傳へた人、卽ち通譯。

【心をや聽きえたりけむ】 その意味を理解することが出來たのであらう。

【そのかみ】 その當時。そのむかし。

枕草子卷十一に「そのかみつねにゐて、物がたりし人の上など、わろきはわろしなどのたまひしに。」

【みやこにて山のはに見し云々】 「都では山のはしの方から出ると見た月であるが、こゝ大海原の眞中では、波から出で又波にはいつてゆくことよ。」といふほどの意。

都入り

【十六日】 承平五年（一五九五）二月十六日。

【夕つ方】 夕方に同じ。

宇津保物語の國讓上に「今日夕つ方歸りたまひぬ。」

【山崎】 今の京都府乙訓（オトクニ）郡大山崎村。天正十年（一二二四二）羽柴秀吉が明智光秀を破つたところ。又明治戊辰の役に東軍の敗走した處。

【小櫃】 コビツ。小さい櫃。多分玩具の類であらう。

【環餅】 マガリ。糯米の粉をこね、細くひねつて輪の如くし、胡麻の油で揚げたもの。その形が輪のやうに曲つてゐるので、「まがり」といふ。こゝは、法螺の形にこしらへたまがりである。

【法螺】　ホラ。法螺貝の略。軟體動物中、腹足類の一種。殼は紡錘形で、重厚、長さ一尺四五寸に達し、表面に黄・褐・白など種々の波紋を有する。我が國では專ら琉球に產する。昔はその殼の頭に孔をあけて、吹奏に供した。

【賣る人の心をぞ知らぬ】　その店先に並べてゐる小櫃やまがりは、昔のまゝに變つてゐないが、その店の主人は果して昔のまゝの心かどうかわからぬといふ意。作者貫之が曾て初瀨に參詣して「人はいさ心も知らずふるさとは花ぞ昔の香ににほひける」の歌を詠んだ時と同樣の心持であつたのであらう。

【島坂】　今の京都府乙訓郡向日町の西、長岡の上にある。

【人あるじしたり】　ある人が主人となつて、自分をもてなしてくれた。

「あるじ」は、おのれ主人となつて、人をもてなすこと。馳走。饗應。

竹取物語に「つかふまつる百官の人々に、あるじいかめしうつかうまつる。」

【必ずしもあるまじきわざなり】　「何も、きつと、そんなにもてなしなどしなくてもよいことだ。」といふほどの意。

【立ちて行きし時よりは歸る時ぞ人はとかくありける】　數年前土佐の國守となつて京を出立したときよりは、今日任が滿ちて京に歸るときの方が、皆の接待ぶりがよいとの意。輕薄な人情をそれとなく諷した文字のやうにおもはれる。

「とかく」は、とやかく。あれこれ。こゝの「とかくありける」は、とやかくともてなしてくれる。あれこれと款待してくれる、などの意。

【これにもかへりごとす】　この人にも答禮をした。

一本に「これにもそれにもかへりごとす。」とある。

「かへりごと」とは、返禮・答禮などの意。

この日記の他のところにも「或人いさゝかなるものもてきたり。よねしてかへりごとす。」とある。

【夜になして】　夜になるのを待つて。日を暮して。

【桂川】　山城國大堰川の下流、下嵯峨の邊から淀川にそゝぐまで、流勢のおだやかな部分の稱。

【月の明きにぞ渡る】　「明き」の下に「頃」「時」などいふ語を入れて見よ。

【飛鳥川にあらねば云々】　古今集、雜、讀人不知の歌「世の中は何か常なる飛鳥川きのふの淵ぞ今日は瀨になる。」によつて、かやうに書き出でたもの。

「飛鳥川」（アスカガハ）は大和國にある川。源を高市郡高市村大字畑の山中に發し、大字祝戸（イハヒド）で細川を合はせ、北流して飛鳥村を過ぎ、北葛城郡河合村に至つて大和川に注ぐ。淵瀨の定めなきを以て聞え、古來多く和歌に詠まれてゐる。流程八里。

「淵瀨」は淵と瀨。水の深いところと淺いところ。

萬葉集卷九に「みつ川のふちせもおちずさでささすにころもでぬれぬほすとはなしに」

伊勢物語に「飛鳥川ふちせも知らぬわが宿はせにかはりゆくものにぞありける」

【ひさかたの月に生ひたる云々】　「ひさかたの」は、天（ソラ）又はこれに關係のあるあめ・あま（雨・天・蜑）・月・雲・空・夜・星・光等につゞける枕詞。又、天つ都・天つ鏡といふを略して、都・鏡にもかゝる枕詞。

一首の意は「月の中に生えてゐる桂といふ名を負うた桂川であるから、その底にうつる月影も、桂の葉の色がかはらぬやうに、昔と少しのかはりもないことよ。」

【天雲のはるかなりつるかつらがは云々】　「袖をひでても」は、袖をぬらしても。「ひづ」とは、ひたすこと。ぬらすこと。

一首の意は「天雲がはるか遠くにあるやうに、土佐にゐる時は、はるかに離れてゐると思つてゐたこの桂川に、今現にやつて來て、袖をぬらしながら渡ることが出來たはい。」

【かつらがはわが心にもかよはねど云々】　一首の意は、「桂川は、自分の心と相通じてゐるといふわけではないけれど、自分が久しぶりにこゝに歸つて來た感慨の深さと同じ深さに流れてゐるやうだ。」

【家】　貫之の舊宅。

【いふかひなくぞこぼれ破れたる】 言つても甲斐がないほど、ひどくこはれてゐる。
「いふかひなし」は、言つてもその甲斐がないこと。いひがひのないこと。
宇津保物語、貴宮に「かの君はいふかひなくなり給ひぬるものをと聞ゆ。」
【家を預けたりつる人の心も荒れたるなりけり】 土佐在住の間その住家をあづけておいた人の心も、この家と同様に荒れたのだ。それで、この家が、かやうにひどくこはれ破れたのであるよ。
【中垣こそあれ云々】 その人の家とわが家とは、間にへだての垣こそあるが、まるで一つ家のやうであるから、先方から希望して留守を預つたのである。
【さるは】 一本には「されば」とある。
【便りごとに云々】 ついでのあるたびに、土佐から物を送つて、いろ〳〵と心づけをした。
【聲高にものも言はせず】 皆のものは、預り人に對して不滿を漏らさうとしたが、自分はこれをおさへて、聲高には言はせなかつた。
「聲高」（コワダカ）は、聲の高いこと。高聲。
竹取物語に「こわだかになのたまひそ屋の上に居る人どもの聞くに、いとまさなし。」
【いとはつらく見ゆれど云々】 滿足に留守をしてくれなかつた先方のしうちは、たいそうつれないけれど、自分としては、先方に對して、お禮のしるしをしようとおもつてゐる。
「つらし」とは、他に對するしうちのつれないこと。なさけのないこと。にくくねたましいこと。
伊勢物語に「武藏あぶみさすがにかけてたのむにはとはぬもつらしとふもつれなし」
源氏物語、帚木の卷に「つれなくてつらしと思ひけるも知らで。」
「志」（コヽロザシ）とは、わが志をあらはして物を贈り、又は事をなすこと。
源氏物語、澪標の卷に「御使にも二なきさまの志をつくす。」

【池めいてくぼまり】 前に池のあつたところが、手入をせぬために散々に荒れてゐるさまが、このことばでよく窺はれる。
【水づける處あり】 水で濕つてゐるところがある。
「水づく」は、水漬の字をあてる。略して、みづく。水にひたること。水分を含むこと。
【千年や過ぎにけむ云々】 留守をたのんでから千年もたつたのであらうか、片方の枝はなくなつてゐた。「千年や云々」の一語の中に、抑へ難き不滿の皮肉が窺はれる。
【今生ひたるぞまじれる】 下文の「この家に生れし女子のもろともにかへらねば」と相對して、感慨の特に深い句である。
【あはれとぞ人々いふ】 「あゝ、ひどくあれてゐますね。」と皆のものがいつた。
「あはれ」は歎辭。あゝ。さても〳〵。
【この家にて生れし女子の云々】 この家で生れた女の子が、土佐に在任中彼の地で死んで、今日自分ども一緒にこの家にかへつて來ないから、どうも悲しくてならぬ。
「いかゞは悲しき。」は、「その悲しみいかばかりぞや。」に似た語で、「どんなにかなしいことか。」「その悲しみはどんなにひどいことか。」などの意。
【舟人は皆子たかりてのゝしる】 舟人は皆めい〳〵の子どもをだきかゝへて、やかましく言ひさわいでゐる。
一本には「皆子抱きて云々」と見えてゐる。
【心知れる人】 わ（貫之の）がせつない心を知つてゐる人。妻（貫之）をさす。
【うまれしもかへらぬものを云々】 「この家で生れた子供もかへつて來ないのに、こゝに歸つて見ると、まあ何としたことか、新しい小松が生えてゐる。この小松を見ると、任地でなくした子供のことが思はれて、むしろ悲しくなつてくるはい。」との意。
【猶あかずやあらむまたかくなむ】 前の一首の歌ではまだ十分わが心を言ひつくすことが出來なかつたのであらうか、またかやうに一首の歌をよんだ。
「かくなむ」の下に、「よみける」の語を補つて見よ。
【見し人を松のちとせに見ましかば云々】 「かつてこの家

で見たあの子を、若しも、松の千歳もかはらぬやうに、いつも無事なさまで見ることが出來るものであるなら、死別などいふ悲しい永遠の別などは決してあるはずはないのであるが、榮枯盛衰の流轉のはげしい世のこととて、何ともいたしかたがない。」といふほどの意。

【えつくさず】「つくし得ず」に同じ。わが心のほどを言ひつくすことが出來ぬといふほどの意。

【とまれかくまれ、とくやりてむ】とにもかくにも、この日記は人に見せるわけのものではないから、はやく破つて捨ててしまはう。

「とまれかくまれ」は、「ともあれ、かくもあれ」の約。いかやうにもあれ。いづれにしても。とにもかくにも。竹取物語に「翁とまれかくまれ申さむと思ふ」

「とく」は疾く。はやく。すみやかに。急に。伊勢物語に「御おくりして、とくいなむとおもふに。」

「やりてむ」は「やぶりてむ」に同じ。「やり」はら行四段活用の動詞「やる」の連用形、「て」は完了助動詞「つ」の未然形。「む」は決定を示す助動詞「む」の終止形。

後撰集、雜二に「やれば惜しやらねば人に見えぬべしなく〳〵もなほかへすまされり」

9　挿　畫

土佐の出立ち　佐藤靜湖筆

貫之が一葉の孤舟にその一族を託していよ〳〵任地を出立しようとしてゐるさまを圖したもの。淺水にその脛を沒して今しも舟に乘らうとしてゐるのは貫之夫妻であらう。

筆者佐藤靜湖は松本楓湖門の日本畫家。

土佐より京への船路

貫之が土佐から京へ歸る船路の概略を圖示したものである。

宇多の松原　現時の「宇多の松原」の寫眞である。

釋義「宇多の松原」參照。

10　參　考

紀貫之の編・書・作

一　歌
- 1　古今和歌集（他三人と合撰）
- 2　續萬葉集五卷（今傳はらぬ）
- 3　新撰和歌集（群書類從一五九、七、四四〇―四四七）
- 4　家集、紀貫之集十卷（延喜八年までの歌）（群書類從二四七、九、五五三―五七八）歌仙家集（續國文大系四六一―四八七、歌學全書）
- 5　古今集序
- 6　同集にある歌の詞書
- 7　大堰河行幸和歌序（古今著聞集・扶桑拾葉集二）
- 8　土佐日記

二、國文
- 6
- 7
- 8

三、漢文　新撰和歌集序（本朝文粹一一）

尙他に、扶桑拾葉集に「蟻通シノ神ニ奉ル和歌序」といふがあつて、彼の作だと傳へられてゐる。

紀貫之が國文學史上の功績

一、土佐日記その他の文によつて國文發達の機運を促したこと。

二、同書によつて紀行の典型を示したこと。

三、古今和歌集を撰んで勅撰集の模範を示し、歌人の啓蒙・奬勵及び古歌の保存につとめたこと。

四、同序によつて歌論や歌學の端緒を開いたこと。

五、多くの秀詠を創作したこと。

以上の五大功績は、我が國文學史上、いつの代にも特筆せらるべきことである。

紀貫之の歌態

貫之の歌は古今集の歌風を代表し、大きくいへば一代の歌人の趣向を代表してゐる。その特徴としては、

一、辭樣に富んでゐることである。尾上柴舟の說によると、彼の家集中、全く辭樣のない裸體詩ともいふべき詠が三百九十五首で、殘り四百九十三首は皆何等かの修辭的技巧を含んでゐる。これを統計的にあげると、

一　直喩三七
同し色に散りしまがへば櫻花降りにし雪のかたみとぞ見る

二　隱喩六三
水とのみ思ひしものを流れつゝ瀧は多くの絲にぞありける

三　緣語一〇五
今はとてのこれる岸の藤波は春の港のとまりなりけり

四　懸詞三二
よる人もなき靑柳の絲なれば吹きくる風にかつみだれつゝ

五　擬人一一二
綠なる松にかゝれる藤なれどおのが心と花は散りける

六　序詞四二

七　對照三九

春の夜はまだ淺けれどかねてより綠ふかくも染むる松かな

八　枕詞二二

九　引喩一六

一〇　反覆二五

二、辭調の流麗　これも當代の歌人のあこがれた技巧である。貫之の詠には、無內容でありながら、調子がよいために感服させられる歌が隨分ある。

野邊見ればわかなつみけりうべしこそ垣根の草も春めきにけれ

春の野の若菜つみにや白たへの袖ふりはへて人のゆくらむ

三、詞形　想路が推測疑問に傾き、斷言句の少いこと。

世をうみて我がかす絲はたなばたの涙の玉の緒とやなるらむ

散りぬべき山の紅葉を秋霧のやすくも見せず立ちかくすらむ

四、自然現象に自己の主觀を投影して情景融合詩の傾向を取れるものが多いこと。

うすく濃く色ぞ見えける菊の花露や心をわきておくらむ

君を惜しむ心の空に通へばや今日とまるべき雨の降るらむ

河風の涼しくもあるかうち寄する波と共にや秋は立つらむ

年ごとに來つゝ馴するほとゝぎす花橘やつまにはあるらむ

啼きとむる花しなければ鶯も果はものうくなりぬべらなり

三輪山をしかもかくすか春霞人に知られぬ花や咲くらむ。

五、推敲詩人型であること。どちらかといへば、彼の長所は詠歌よりもむしろ歌論である。躬恒が即興詩人型であるに對して、彼は一字一句洗煉された表現によつて、歌をよむといふよりはむしろ歌を製作した。豐かな想像とか、鋭い直覺とかいつた風の閃きは、餘り見出されなかつた。「人はいさ心も知らず」の詠などは、彼としては珍しい出來である。

六、實感を詠んたものは（少いが）皆惻々として讀者の胸臆に迫るの概がある。

あす知らぬ我が身とおもへど暮れぬ間のけふは人こと悲しかりけれ

君まさで煙絶えにし鹽竈のうらさびしくも見えわたるかな

朝露のおくての山田かりそめにうき世の中をおもひけるかな

七、推敲を重んずるの極、やゝ理窟に墮したものもある。

とふ人もなき宿なれど來る春は八重菲にもさはらざりけり

ねぬる夜の夢は波にもあらなくにたちかへりても人を見るかな

わかれてふことは色にもあらまなくに心に染みてわびしかるらむ

君ましし昔は露かふるさとの花見る毎に袖のひづらむ

絲によるものならなくに別れ路の心細くもおもほゆるかな

（日本文學辭典）

一二　吾妻下り

1　解題

「伊勢物語」の第九段を採錄したものである。

主人公の「昔ありける男」が、京を出て武藏の國隅田川まで下る間の旅愁を主として敍した文である。

「伊勢物語」は、平安朝の初期に出た歌物語で、竹取物語と共に當時に於ける假名文の雙璧と稱せられる。その後、歌人・文士は、古今集・源氏物語と相並べてこの書を非常にもてはやした。いはば中世の國文學研究は、この三書の研究に外ならぬ概があつた。本によつて一二の出入はあるが、全篇二百六十段から成り、和歌を主として、文章は長きに亙らず、多くは「昔男ありけり」の句で筆を起してゐる。その歌が在原業平の作であり、その話に業平に屬するものが多いので、古來「在五が物語」もしくは「在五中將日記」といはれてゐるが、その作者に就いては未だ定說がない。藤岡作太郎博士の評に曰く、

その文の、詞簡にして意圓に、感懷の痛切なること、業平の歌とその軌を同じくするを見れば、この一篇をまた在五の作と推すも、蓋し大過なかるべし。嗚呼業平の長所はすなはち短所なり、感情の橫溢するに任せて想を練らず、詞を琢かず、眞率に過ぎて時には兒童の言の如くなるもあり。惜しいかな、天才は刻苦經營の功を積みがたく、わづかに眞理の一面を發揮して止むもの多し。業平も亦この弊に陷り、遂に後進貫之をして別に大名を揚げしむ。さはいへ、在五中將の名の永く後世に喧傳して朽ちざることを思へば、業平もまた偉人なりといふべし。

今參考のため在原業平の小傳を左に記さう。

在原業平、世に在五中將といふ。平城天皇の皇子阿保親王の第五子。天長年間在原の姓を賜はつて臣籍に列した。文德天皇は、長子惟喬親王を皇太子に立てようとなされたが、藤原氏を憚つて果し給はず。親王は俄に御隱栖遊ばした。業平は姻戚の關係もあつたので、夙くから親王と親交あり、藤原氏と相爭つた。後、藤原良房がその女高子を淸和帝の後房に納れようとする

のを見て、これを妨げる爲に密かに高子に通じ、その五條宮に在るのを誘うて宮外に奔つた。そこで良房の養子基經は大いに怒つて、業平の髻を切つて東國に逐つた。所謂「東下り」はこの事から起つたのである。（後世、この東下りを以て、業平が東國の有志を語らふ爲だとするものもあるが、さうは考へられぬ）後、再び鄕に歸つて來たが、やはり志を得ない。但し彼の惟喬親王に對する忠誠の情は、「忘れては夢かとぞ思ふ」の歌によつても察せられる。元慶年中、相模・美濃の權守を歷て、同四年（一五四〇）五月卒した、年五十六。業平は體貌閑麗、放縱ではあつたが才能に秀で、和歌を能くする外、畫をも能くしたといふ。

2　編纂の用意

文辭の簡古にして意味の幽遠なところが、伊勢物語の特徴である。（前項、藤岡博士說參照）本課の文は、伊勢のうちでも特に絕妙と稱せられる部分である。この一闋を解釋味讀せしめることによつて、伊勢物語のいかなるものなるかを詳かにせしめ、且その國文學上の位置をも知らしめたい。

3　要旨及び概說

いはゆる「むかし男」が、吾妻下りを思ひ立つて門出するところから、三河の國八橋に到り、その旅愁を「かきつばた」の和歌に詠じて供のものと相悲しみ、次に宇津山を越える途中、たま〳〵行遇つた修行者なる知り人に、都の人を戀ふる吟詠を託し、更に富士の山の眺を興じつつ、なほ行き〳〵て、遂に武藏の國隅田川に着き、名にし負ふ都鳥に關する渡守との問答に、また〳〵旅情を新にするといふまでの紀行である。そして、その各節の中心興味は、それ〴〵挿入された和歌に存することは言ふまでもない。

4　取扱上の注意

◪伊勢物語の作者を研究的に見れば、一概に在原業平であるとも定めがたい。しかし、伊勢といへば誰でも必ず業平を思ふほどで、殊にこの吾妻下りの條は、「業平東下り」とさへ謂はれてゐる。隨つて業平の傳記についての

所說を、一通り心得ておく必要があらう。（解題の中の「在原業平」參照）

◪文章の筆致は、前課の土佐日記のそれと共に、同じく簡古といふ如き一漢語を以て評し得るにしても、その文の情調に於て、土佐日記とはかなりの隔りがあることを吟味させたい。土佐が敍事的で、素樸の趣の濃かであるに比して、伊勢は抒情的で、簡古の裡にも、一種の纖細な感情が溢れようとしてゐることを感じさせる。

5　設問

1　本課「吾妻下り」の文と前課土佐日記の文との異同を考へよ。

2　次の單語が有するいくつかの意味を辭書によつて調べて見よ。

わぶ。わびし。すゞろ。こととふ。うつつ。

3　次の「なむ」を文法的に說明せよ。

イ、木八つ渡せるによりてなむ、八橋とはいひける。

ロ、はや舟に乘れ、日も暮れなむ。

4　「名にし負はば云々」の歌を、口語に譯して見よ。

6　釋義

【吾妻下り】　都（京都）から東國へくだりゆくこと。

「吾妻」（アヅマ）は東國。本邦の東方諸國の總稱。

古事記中卷に「到二足柄之坂本一、……三歎詔曰、阿豆麻波夜故號二其國一謂二阿豆麻一也。」

景行紀に「日本武尊每有下顧二弟橘媛一之情上、故登二碓日嶺一而東南望レ之、三歎曰二吾嬬者耶一。故因號二山東諸國一、曰二吾嬬國一也。」

なほ、本課「解題」の中の「在原業平」參照。

【むかし男ありけり】　伊勢物語は每章この語を以てはじまつてゐる。この「むかし男」については、本課「取扱上の注意」第一項參照。

【身をえうなきものに思ひなして】　この身は、たとひ都にゐても、何の役にもたゝぬ男であると思ひなして。

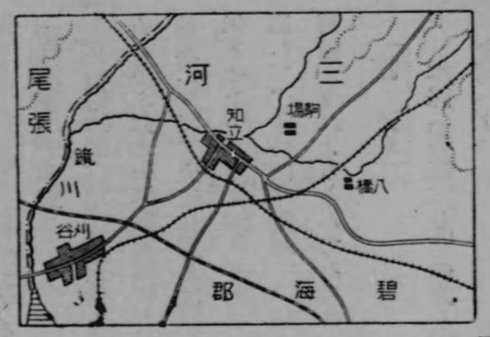
「やう」は「益」（ヤク）の音便。かひ。せん（詮）。えき（益）

竹取物語に「何事もやうもなしとて、藥も食はず。」

【京にはをらじ云々】　もう京（京都）には居るまい、あづまの方で住みかをさがさうといつて、出かけていつた。

【もとより友とする人】　かねて親しく交つてゐる人。以前からの親友。

【三河國】　ミカハノクニ。東海道の一國。修して三州といふ。古書には三河にも參河にもつくる。本州の中部にあつて、西は尾張に連なり、北東は山岳を以て美濃・信濃・遠江と界し、南は太平洋に面し、渥美半島がこれに突出して、その西に三河灣をつくる。愛知縣の所管。



【八橋】　ヤツハシ。愛知縣碧海郡知立町の大字。その無量壽寺の境内にいはゆる「かきつばた」の池があり、本堂に在原業平の像を安置してある。昔は蜘蛛手のやうに溝を穿つてこのあたりの澤の水を流し、八つの橋をかけわたし、かきつばたが一面に生えてゐたといふ。

【水の蜘蛛手にわかれて】　水が、蜘蛛の手の八方に出たやうに、いつくつにも分れて流れてゐることをいふ。

小大君集に「花すゝきくもでに人にむすばれていつかとくると待つぞ悲しき」

【澤】　サハ。卑濕にして水がたまり、草が生えてゐる地。やち。

【おりゐて】　下におりて居て。下にさがつてゐて。

萬葉集卷二に「朝ぐもり日の入りゆけばみたゝしし島におりゐてなげきつるかも」

【かれいひくひけり】　辨當をたべた。

「かれいひ」は(乾飯)、略して「かれひ」ともいひ、「餉」とも書く。(一)ほしいひ。ほしひ。(二)旅行などに携帶する飯。辨當。

古今集、羈旅に「二見の浦といふところにとまりて、夕さりのかれいひたうべけるに。」

萬葉集卷五に「常知らぬ道の長てをくれ〳〵といかにか行かむかれひはなしに」

【燕子花】　カキツバタ。又杜若とも書く。鳶尾(イケチツ)科鳶尾屬の多年生草本。葉は劍狀、長さ二三尺。中肋はない。花は大形、青紫色又は白色。初夏の頃葉間から抽出する花莖の頂端に開く。沼池に自生し、又觀賞用として人家の庭園に栽培する。

【旅のこゝろ】　旅にあるこゝろもち。旅中の心情。たびごころ。

拾玉集卷七に「動きなき君がみゆきになれ〳〵て旅ごころせぬうちの山かな」

【からころもきつゝなれにし云々】　「都に馴れ親しんでゐる妻があるから、これにわかれてはる〴〵とやつて來たこの吾妻下りの旅を、しみ〴〵物がなしくおもふことである。」との意。

「からころも」(唐衣)は、唐風の衣といふ義より轉じて、珍しく美しい衣の義。又單に衣の美稱としても用ひる。

「唐衣きつゝ」は「なれ」の序である。衣は着ならすものであるから、人になれる意にかけたのである。「つま」は妻に衣の褄をかけていふ。

き(着)、なれ、つま、はる〴〵、などは、いづれも衣の緣語である。

「つましあれば」及び「旅をしぞ思ふ」の「し」は、意味をつよめるために用ひられた助詞である。

【餉の上に涙おとしてほとびにけり】　辨當の上に涙をおとしたので、飯がこれがためにほとびふやけた。

「ほとぶ」とは、水分をふくんでふくれることにいふ。

【行き〳〵て】　行きに行きて。進みに進みて。つゞけて行きて。

【駿河國】　スルガノクニ。東海道の一國。修して駿州といふ。西は大井川を以て遠江と界し、北西は赤石山脈を以て信濃・甲斐に連なり、北方甲斐の國境に富士の靈峯が聳え、東は箱根・足柄の諸山を以て相模・伊豆に接してゐる。南方駿河灣に面する一帶は氣候が溫和、風光が絶佳で、保養に適する。靜岡縣の所管。

【宇津山】　ウツノヤマ。靜岡縣駿河國有度郡と志太郡との

界をなしてゐる山。(有度郡は明治二十九年廢せられて安倍郡に併せられた。)明治九年に隧道が出來た。謂はゆる「蔦の細道」といふのはこのあたりである。

【蔦かづら】 蔦のつる。「蔦」は葡萄科地錦（ツタ）屬の多年生草本。蔓莖を有し、吸盤を具ふる卷鬚によつて他物に攀緣する。葉は卵狀圓形又は心臟形で、掌狀に淺裂し、或は全く掌狀複葉をなす。春夏の際淡黃色の花を葉腋に叢生し、後黑色球形の小漿果を結ぶ。我が國各地の山野に自生し、又觀賞用として栽培される。葉は秋季紅葉する。なつづた。まつなぐさ。

【物心ぼそく】 何となく、心細く感ぜられること。

【すゞろなるめを見る】 思ひがけないつらいめを見る。ひどいめにあふ。

「すゞろ」は、(一)何故ともなく心のすゝむさま。覺えず心の傾くさま。(二)然るべき場合ならざるに深く立ち入るさま。(三)はしたなくふるまふさま、などにいふ語。こゝは(三)の意。

【修行者】 スギャウザ。「シュギャウジャ」の轉語。佛道若しくは修驗道を修行してあるく者。山伏の類。

源氏物語の玉葛の卷に「貴きすぎやうざ語らひてゐて來るかと問ひ給へば。

【かゝる道にはいかでかおはする】 こんな所へどうしていらつしやいましたか。(修行者からたづねた語)

【見れば、見し人なりけり】 よく見れば、かねて見知つてゐる人であつた。

【京にその人のもとにとて、文書きてつく】 手紙をかいて、自分の切に思つてゐる京の人のところへこれをおくつてくれるやうにと、その修行者にことづけた。

【駿河なるうつの山べの云々】 私は今駿河の宇津の山べまでやつて來てゐるが、現實には勿論、夢にさへもあなたは逢ひに來てくれない。定めし、あなたはもう私のことなど忘れてしまつてゐられるからであらう。」(昔の人はまことに思へば、互にその心が通つて、夢に見ると信じてゐたのである。

「うつつ」は「現」をよみ、現實の意。その上の語なる「うつの山べの」は、「うつつ」の序詞に兼ね用ひたのである。

「人」は、一般の人をいふやうに見せて、その實は「京にその人のもとに」といつた我が思ふ人を意味してゐる。

「人のあはぬなりけり」は、一本に「人にあはぬなりけり」とある。それでも意味が通じぬことはない。

【五月のつごもり】 五月の晦。

「五月」は「サツキ」とよみ、早月とも皐月とも書く。早苗月の義か。

「つごもり」は月隱（ツキゴモリ）の義。陰曆の月の末日をいふ。

【時知らぬ山はふじの嶺云々】 四季のわきまへもない山は富士山だ。いつたい今をいつだとおもつて、かのこまだらに雪が降つてゐるのか。今は五月の末であるのに、まあ。」

「いつとてか」は、いつとおもつてか。今をいつだとおもつて。

「かのこまだら」は、鹿の子の毛の斑文。茶褐色に白い星の散在してゐるもの。

【こゝにたとへば】 都あたりの例にひく譬でいふならば。

「こゝ」は都をさしていふ。

【比叡の山】 ヒエのヤマ。比叡山（ヒエイザン）の雅稱。京都府と滋賀縣とに跨る山。略して叡山ともいふ。山體は概ね古生層より成り、京都市東面の諸山中最も人目を惹く。山上に著名な延曆寺がある。近年京都方面からも坂本方面からも鋼索鐵道が設けられて、登山が極めて容易になつた。山上には空中ケーブルカーもある。この山は小禽の蕃殖地として名高く、天然記念物に指定されてゐる。標高八四八米。

【形】 ナリ。こゝは「カタチ」とよまぬやう。爲りたるさま。もののかたち。形狀。

【鹽尻】 シホジリ。海岸で製鹽用の砂を丸く盛りあげて塚のやうにし、それに潮水をかけては乾かし、かけては乾か

しするもの。

【武藏の國】　ムサシのクニ。東海道の一國。修して武州といふ。關東地方の略。中央にあつて、南東の一部は東京灣に面し、他は下總・下野・上野・信濃・甲斐・相模の諸國に接する。西部は山地であるが、東半部は關東平野の一部をなして土地が平坦である。東京市・東京府及び埼玉縣の所管。

【下總の國】　シモフサのクニ。東海道の一國。古の總國（フサノクニ）の地。後、上・下の二國に別れた。下總はこの一國である。關東地方の東北に位し、北は常陸・下野に接し、西は江戸川を以て武藏に界し、東は太平洋に面し、南は上總に隣り、一部は東京灣に臨む。概ね臺地又は平原であるが、湖沼も少くない。茨城・千葉兩縣に分轄されてゐる。

【隅田川】　スミダガハ。武藏の荒川の下流。千住大橋から下、東京市内を貫流して東京灣にそゝぐまでの稱。河口に石川島・月島（埋立地）等がある。

「荒川」は關東平野を曲流する川。源を秩父山中に有し、諸水を集めて東流し、南向して東京灣に入る。その下流は卽ち隅田川である。流程一七五粁。

【群れゐて】　むらがつてゐて。集つてゐて。群居して。

萬葉集卷一に「朝日照るさだの岡べに群れゐつゝわが泣く涙やむ時もなし」

【限りなく遠くも來にけるかな】　はてしもない遠方までやつて來たものであるはい。

【わびあへるに】　互におもひわづらつてゐると。互に心さびしくおもつてゐると。

「わぶ」（侘ぶ）とは、(一)思ひわづらふこと。思ひ惱むこと。(二)慰むかひがなくて心細くおもふこと。たよりなく思ふこと。(三)さびしくおもふこと。心さびしく暮すこと。なほ他にも多くの用法がある。

【渡守】　ワタシモリ。渡船の船頭。わたりもり。

【日も暮れなむ】　一本には「日も暮れぬ」とあるが、本文の方がよいやうに思はれる。

【ものわびしくて】　何となくわびしくて。何となく心細くて。

【京に思ふ人なきにしもあらず】　起筆の「身をえうなきものにおもひなして云々」といふを顧みた言ひ方である。「都には居らじ住むべき所求めむ」などいつて飄然として出た旅であるとはいふものの、さりとて、都に思ひ殘してゐる人が無いわけではない。

【さる折しも】　そのをりに丁度。

「さる」は「しかる」の約。

「折しも」は、そのときにあたつて。をりから。丁度。をりもをり。

枕草子卷九に「うたてをりしも、などてさはたありけむ、いとをかし。」

【嘴と脚と赤き、鴫の大きさなる、云々】　くちばしと、あしとの赤い、鴫の大きさほどの鳥が、水の上をおよぎながら魚を食つてゐる。

「鴫」（シギ）は鷸とも書く。水禽類の一屬。中形の鳥類である。脚は四趾を有し、前に向つてゐる三趾は長い。嘴は細長くて軟皮を被る。種類が甚だ多い。

【これなむ都鳥】　この下に結の「なる」（上の「なむ」に對する）が略されてゐる。「これが都鳥といふ鳥でござる。」といふ意。

「都鳥」は水禽類の一種。體の長さ一尺三寸許。嘴と脚とは長くて赤く、頭部と背面とは黑く、腹部は白い。海に近い水邊に棲み、小魚や蟲類を捕つて食ふ。

【名にし負はばいざことゝとはむ云々】

「都鳥といふ名を負うてゐるおまへのことだから、さだめて都の消息を知つてゐるだらう。これ都鳥よ、ちよつとたづねるが、わたしたちのこひしく思つてゐる都人たちは無事息災でゐるかね、どうぞ聞かせておくれ。」といふほどの意。

「名にし負ふ」とは、名としておひもつこと。又、名高いこと。「名におふ」に同じ。

土佐日記に「年ごろを住みしところの名にしおへばきよる浪をもあはれとぞ見る」

【舟こぎりて泣きにけり】　船に乘つてゐるものが、ことごとく泣いた。

「こぞりては」は、「擧」の漢字をあてる。のこらず、ことごとく。皆。全體。

古今著聞集卷十二に「隨喜のあまり、南都こぞりて、われも〳〵と臨時の佛事をはじめて。」

7 挿圖

八橋

伊勢物語、三河八橋の條を描いたもの。むかつて正面の人物は在原業平、この左右の二人は、本文にある「もとより友とする人」ども。三人對坐して、謂はゆる「かれいひ」を食つてゐるところである。

後世のものであるが、その服裝などは、大體當時の制であるやうにおもはれる。

吾妻下り　俵屋宗達筆

在原業平吾妻下りのさまを描いたもの。

筆者俵屋宗達は德川初期の畫家。光琳派の先驅として偉大な裝飾畫家である。野々村氏（或はいふ喜多川氏）、名は以悅、字は伊年、宗達はその號。又青軒とも號した。加賀の人とも、能登の人ともいふ。傳記は詳かでない。その筆に成つた風神・雷神の二圖は最も世に知られてゐる。寛永二年（一六二五）歿。年六十八。

一三　かぐや姫

1 解題

「竹取物語」の結末「かぐや姫」の昇天する條の拔萃である。

「竹取物語」（二卷）は、延喜の初の頃の作と思はれるが、何人の手になつたか明らかでない。竹取の翁が、竹の中に得たといふ天女を主人公とし、これに婚嫁を迫る五人の皇子・公達を配して成された物語である。

なほ本書に關する池邊義象の評及び三浦圭三の編にかゝる日本文學辭典にかゝげられた本書の概評を左に揭げよう。

(一)　池邊義象の評

そも〳〵平安朝の物語は、大抵當代の宮中を本とし、その皇族・大臣・貴紳等を以て組立てたる、いはゆる現代の思想・風俗をうつすを目的とせるものたるに、この物語のみは、皇族・貴紳等の事を書きながら、是等とやゝ面目を異にし、全く滑稽飄逸、常に讀者を掌上に玩ぶが如きさまあるは、全篇變化の筋を以てせる一種の趣向といふべし。さはれ、かの某々の皇子・大臣等の一人娘に戀すとて、身も忘れ家も忘れて放浪する狀は、猶平安朝式物語卽ち現代を寫すを務とするものと相似たる時代風潮ともいふべきか。この書、修辭雅醇にして、遒勁奇拔、しかも流暢洒落なるは、實に得がたき名文にして、千古に傳はるも故ありといふべし。

(二)　日本文學辭典の評

一、構想の妙。短篇物語だから、別に工夫をこらさずとも冗漫の失は免れ得られるものを、作者はいろ〳〵と工夫して變化をつけ五人五色の失敗と落ちとを取らせた。しかのみならず、天女の天女たる崇高をうつして、王侯の貴もこれを如何ともする能はずとした。對照もよし、昇天の間際をうつす漸層法もうまくいつてゐる。

二、秀句趣味を多分に發揮してゐる。よばひ・はちをすつ・あへなし・あなたへがた・かひなし・ふじの山など、國民の洒落性を遺憾なく表したものだ。

三、行文は簡潔古雅。

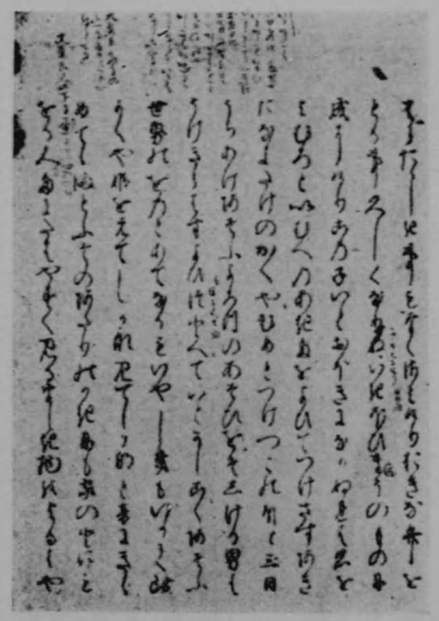
四、本邦假名文の鼻祖であり、小說、短篇小說・滑稽文學の魁楚である。

2 編纂の用意

第八課より、本課に至る五課は、我が中古文學の作品である。本卷の組織は大體文學史的排列によつてあるので、卽ちこゝは平安朝文學の概略を了解せしめんとするものである。就中前課は所謂歌物語の形のもの、本課は源氏物語に所謂「物語のおや」で、先づ平安朝物語の最初と見られてゐるところの、傳奇的並びに優雅的文學の物語である。その語句文章によつて所謂中古文の妙味を窺はしめ、併せてその素樸なロマンスの特色を看取せしめたい。

3 要旨

竹取物語の最後の一節、かぐや姫の昇天の話である。今までさうした素振りもなかつた姫が、月を見て物を思ふ夜がだん〳〵多くなつて來る。さうして遂に養育の恩ある竹取の翁に對して、自らが月世界の人であり、望月の夜、月世界よりの迎によつて昇天すべきことを告げる。翁夫妻は驚駭し狼狽する。姫も養育の恩に感じて離別の悲しみに沈む。終に帝の上聞に達し、衞府の兵二千を遣はして、姫を守護して、月世界よりの迎を拒ませることになつた。



愈〻迎の夜は來た。地上の兵はすべき所も知らずして、姫は迎に應じて昇天した。しかし形見として、御文と不死の靈藥とを帝に奉つた。帝も殊の外、姫の昇天を惜しみ給ひ、形見の文と藥の壺とを駿河なる富士の頂で煙にせさせ給うた。その煙が今尙雲の中へ上つてゐる、といふ筋である。

4 概說

第一節（一〇一頁——一〇二頁七行）　かぐや姫は月を見て物思に沈む。竹取翁は心配する。

第二節（一〇二頁八行——一〇四頁五行）　かぐや姫はおのが身の素性を打ちあけ、この望の夜天上に歸るべきことを語る。翁は驚き且つ悲しみ、さま〴〵に泣く。召使どもも悲嘆にくれる。

第三節（一〇四頁六行——一〇五頁六行）　事は上聞に達した。翁は帝の御下問に對し、姫が昇天する理由を奉答する。帝より警衞のため六衞府二千の兵を遣はされる。

第四節（一〇五頁七行——一〇六頁三行）　翁の屋外、屋內の警衞の狀。

第五節（一〇六頁四行——一〇行）　かぐや姫は警衞の無益なことを告げる。翁は必ず守り了せようと力める。

第六節（一〇六頁一一行——一〇七頁一一行）　姫は翁夫婦に對して、多年の養育の恩を謝し、別離の悲しみを嘆く。

第七節（一〇七頁一二行——一〇九頁一行）　天からの迎が來た。內外を守る人々は、頓に戰ふ氣力を失ふ。

第八章（一〇九頁二行——一一〇頁六行）　迎の者と翁と問答をかはすが、結局、姫は戶外に出る。翁等はこれを止めることが出來ないで泣く。

第九章（一一〇頁七行——一一三頁八行）　姫は別離に當つて、翁及び朝廷に對して文を書置きする。翁等は姫の昇天の後、悲しんで病に伏せる。

第十章（一一三頁九行——一一四頁）　姫の昇天の事情が朝廷に奏聞される。帝は御悲嘆あらせられ、姫よりの文と形見の藥とを富士山に持行きて燃すべき旨を命じ給ふ。富士山の噴煙はこゝに由來するといふ。

5 取扱上の注意

◪かぐや姫が月界の僊でありながら、人間の恩義にほだされ、その養親たる翁夫婦に對してどこまでも纏綿たる惜別の悲しみにうち沈むところに、いかにも可憐な情趣がある。しかもそれが、古樸にして簡潔・遒勁な詞章のうちによく表現されてゐるので、尙さら捨てがたい、一種獨得の味はひがある。かういふ點を鑑賞せしめると同時に、古來「物語のいできはじめのおや」と稱へられた竹取

物語といふ書の、國文學史上における位置についても指導するところありたい。

▲尙本課の前後の關係については、用意してかゝる必要があらう。今左に藤岡博士の國文學史平安朝篇に據つて、この物語の梗概を錄する。

昔、竹取の翁といふものありき。野山に入り、竹を取りて業とす。ある時、竹の中より小兒を得たり。歸りてこれを養ふに、すく〳〵と生長して、見るがうちに年頃の婦人となりぬ。容貌見るも眩く輝けば、赫奕姫といふ。世の人その美を傳へ聞きて婚嫁をきほひ望めども、姫は耳にだに入れず。競爭者の多かるうちに、殊に眷戀の念に堪へざるもの、皇子・公達の五人あり。されど姫は思ふ所ありて、何れにも應ぜず。强ひて難題を設けて、その事なるまじくば、われ亦君の妻たらじといふ。石作皇子は天竺の佛の石の御鉢を、求むべく、車持皇子は東の海の蓬萊山の玉の枝を折るべし。阿倍御主人には唐土の火鼠の裘を望み、大伴御行は龍の首の五色の玉を、石上麻呂は燕の子安貝を、それぞれ取れかしとなり。五人或は寶を取らんとして成らず、或は姫を欺かんとして謀敗れ、國色無雙の處女は遂に人の妻たることを肯んぜず。帝その名を聞召して、后に入れ給はんとの勅使下りしが、姫はこれをも諾ひ奉らず。

本課の話は、以上の話の次に來るのである。尙便宜の爲、藤岡博士の梗概を左に續載する。(前の要旨と多少重複はするけれども)

快々として樂しまざる色あり。翁夫婦に向ひて、われはもと月界女僊の罪を得てしばらく下界に下りしもの、來る中秋望の夜には迎を得て故の棲處に歸りなん、養育の鴻恩は忘れ難けれどもと歎く。夫婦はあるにもあられず、いかでか見ぬ世界に歸しやるべき。袂をつかみ首にすがりてもとかき口說き、帝も護衞の衞士を送られたれど、かひもなくて、姫は明月の光を踏んで消え去りぬ。勅命を背くも畏し、せめては御記念にもとて不死の藥を奉りしが、思ふこと叶はでは靈藥も何かせん、却りて思の種なるをと、富士の山の頂にて焚きすて給ひきとなん。

▲最後は、富士山の名の起り、及びその噴煙の由來談として結ばれてゐるが、こゝに竹取物語が傳說或は說話文字としての一つの型を示してゐることに注意させたい。この物語は、こゝに到るまでに、屢〻物の起原を附會的に語つてゐる。この最後の結語は、またその一つの例と數へることが出來るのである。

6　設　問

1　この文章に用ひられた「いみじ」といふ語の意味について說明せよ。

2　「な……そ」といふ打消の言ひ方を應用して短句を作つて見よ。

3　「使はるゝ人々も年頃ならひて……同じ心に悲しがりけり」(一〇四頁三行——五行)の文脈は、如何に考へたらばよいか。

4　「賜はる」と「賜ふ」との差異を、意義・用法の上より說明せよ。

5　今日の文語體と比して、特に古風であると思はれる言ひ方(語句)をあげよ。

6　次の動詞の活用形を言へ。
迎ふ。侍り。おはす。仰す。傳ふ。思す。

7　本課は、前二課と比して、內容上如何なる點が最も異なつてゐるか。

7　釋　義

【かぐや姫】赫奕姫。竹取物語の主人公。前、取扱上の注意、藤岡博士のものせられた「梗概」參照。

【月の顏見るは忌むことと云々】月の面をじつと見つめるのは、忌み避くべきことですからと、さしとめたけれども。月の姿を御覽になるのは、よろしくありませんから、およしなさいませと、とめたけれども。

【ともすれば】やゝもすれば。どうかすると。
後撰集に「思ふとはいふものからにともすれば忘るゝ草の花にやはあらぬ」

【人ま】人の見ぬ間。人の居ぬ間。
萬葉集卷十一に「人まもりあしがきごしにわぎもこをあひ見しからに事ぞさだ多き」

【いみじく泣きたまふ】 たいそうお泣きなされた。

「いみじ」は、はなはだしい。いちじるしい、たいそう、非常に、などの意。

伊勢物語に「神さへいといみじう鳴り。」

源氏物語の桐壺の巻に「女もいといみじと見奉りて。」

【ふづき】 ふみづき(文月)の略。陰暦七月の雅稱。

「穂見月」の轉か。

さて、陰暦の月の異稱は

正　月……睦月
二　月……如月(衣更着)
三　月……彌生
四　月……卯月
五　月……早月(皐月)
六　月……水無月(ふづき)
七　月……文月
八　月……葉月
九　月……長月
十　月……神無月
十一月……霜月
十二月……師走

【望の月に出でゐて】 十五夜の月の皎々とかゞやいてゐる時に、家の端近く出てゐて。

「望」(モチ)は「ミチ」(滿)の轉。陰暦十五夜の月は少しも虧けず滿ち足らつてゐるから、起つた名だといふ。

爲忠百首卷上に「數ふればもちに二日は足らねども光は空に滿てる月かな」

【切に】 セチに。「セツに」の轉。しきりに。ひたすら。たつて。

枕草子卷四に「仲忠がわらはおひのあやしさを切に仰せらるゝぞ。」

【物思へるけしき】 物を思つてゐるやうす。思案にくれてゐるやうす。

「けしき」は、氣色。やうす。ありさま。けはひ。

枕草子卷八に「子生むべき人の、程すぐるまで、さるけしきのなき。」

【竹取の翁】 赫奕姫の養父。名は讃岐造麿。野山に入つて竹を取ることを業としてゐたから、かやうに稱せられてゐた。

【例も】 かねても。いつも。ふだんにも。

【たゞ事にも侍らざめり】 なみ一通りの事ではなささうに見えます。

「たゞ事」は、徒事。世の常のこと。普通の事。尋常一樣の事。

源平盛衰記、三、殿下乘合の條に「攝籙の臣のかゝる憂目を御覽ずるもたゞ事にあらず。」

【侍らざめり】 「侍らざるめり」の略。

【よく〳〵見奉らせ給へ】 姫の昨今の御樣子をよく〳〵お氣をつけて御覽なさいませ。

「見奉らせ」は、近侍のものが竹取の翁に對する敬語。「見給へ」「御覽なさい」などの意。

【なでふ心地すれば……うましき世に】 そんなに物思はしげな御樣子で月を御覽になりますのは、いつたい、どんなお心持からなのでございます。このやうに結構な世に何の御不足があつて?」といふほどの意。

「なでふ」は、「何といふ」の約略。普便で「なんでふ」ともいふ。いかなる。なにほどの。どういふ。どんな。

宇津保物語の俊蔭に「さる幼き程なれば、なでふわざをも得せず。」

「うまし」は、美し、よし、好まし、などの意。

萬葉集卷一に「うまし國ぞ、あきつしま大和の國は。」

【あが佛】 「あが」は「わが」に同じ。「あが佛」とは姫を呼びかけたのである。佛と呼ぶのはやゝいぶかしく思はれるけれども、これによつて、如何に翁が姫を大切がり、鍾愛してゐたかがうかゞひ知られる。

【思すらむこと何事ぞ】 前の「何事を思ひ給ふぞ。」の形をかへて、重ねて問ひかけたのである。

【物なむ心細く覺ゆる】 何といふことなしに心細くおもはれます。何がなしに心細くおもはれます。

「物」は「物のあはれ」「物悲し」「物淋し」などの「物」と同樣である。これは平安朝文學獨得の語で、平安朝時代を支配した無形の精神である。

【月な見給ひそ】 月を御覽になりますな。

こゝで　な……その用法を十分に知らせたい。
な　泣きそ。　な笑ひそ。
な語りたまひそ　酒をな飲みたまひそ。

【これを見給へば物おぼすけしきはあるぞ】　月を御覽になるので、物思ひがおこつてくるのです。
「物思すけしき」は、物思ひの樣子。
【いかでか月を見ずてはあらむ】　どうして月を見ないでゐられませうぞ。（反語）
【出でゐつゝ】　家から外に出て、端居をしながら。
【夕闇】　ユフヤミ。宵の間に月がなくて暗いこと。夕方の闇黑なこと。又その時。よひやみ。
萬葉集卷四に「夕闇は路たづ〳〵し月待ちていませわがせこその間にも見む。」
【月の程になりぬれば】　月の出る頃になると。
【つかふものども】　竹取の翁の家に召し使つてゐるものども。
【なほ物おぼすことあるべしとさゝやけど】　やはり物思ひがおありになるのだらうとさゝやくけれども。
「さゝやく」とは、低聲にいふこと。私語すること。耳もとに口をよせていふこと。耳語すること。
字鏡集には「呢」の字をあてゐる。

【親をはじめ云々】　養父母たる竹取の翁夫婦をはじめとして、皆のものは、姫が何故物思にしづんでゐるのか、一向にその理由を知らなかつた。
【八月望ばかりの月に出でゐて】　八月十五日ごろの月の時に端居をして。
「八月」は「はづきとよみ、葉月とも書く。なほ前の「ふづき」の條參照。
「ばかり」は、ほど。ころ。刻限。
伊勢物語に「今日の入りあひばかりに絶え入りて。」
【いといたく泣きたまふ】　たいへんにひどくお泣きなされた。
「いといたく」は、「最甚」の字をあてる。甚だひどく。
竹取物語に「くつら麻呂かく申すを、いといたく悅びたまひて。」
【人目も今は包み給はず】　人目をも今は恥ぢたまはず。
「人目」は、人の見て知ること。人の目につくこと。
萬葉集卷十二に「うつせみの人目をしげみ逢はずして年の經ぬれば生けるともなし」

【さのみやはとて打ちいで侍りぬるぞ】　そんなにいつまでも隱して居ることは出來ないとおもひますので、これからすつかり事の子細を申し上げます。
【昔の契ありけるによりてなむ云々】　前世よりの約束がありましたので、この世界へやつて來たのでございます。
「契」（チギリ）は、前世よりの約束。宿緣。
源氏物語、若菜の卷の上に「わが昔よりのこゝろざしのしるしにやと、ちぎりうれしき心地して。」
「まうで」は、「參出で」の音便。「至る」又は「來る」の敬語。
竹取物語に「國のつかさまうでとぶらふにも、えおきあがりたまはで。」
【今は歸るべきになりにければ】　今は歸るべき時節になりましたから。
【かの本の國】　あの本國、卽ち月世界。
【迎に人々まうで來むず】　私をむかへるために、多くの人が、この世界へやつて來ようとしてゐます。
「來んず」は、「來むとす」の約。

【さらず罷りぬべければ】　已むを得ず月の都へかへりますから。
「さらず」は、避けること能はず、已むを得ず、否でも應でも。
伊勢物語に「うるはしき友ありけり、片時さらず相思ひけるを。」
「罷る」は、歸る、退き去る、などの意。
萬葉集卷五に「もろこしの　遠きさかひに　つかはされ　まかりいませ」
【思し歎かむが悲しきことを云々】　私（姫）が月の都へ歸りますことを、おとうさまたち（竹取の翁たち）がお歎きになるでありませう。私は、そのお歎きを目のあたり見る私（姫）の悲しさをこの春の頃から、思ひ歎いてゐるのでございます。
【こはなでふことを宣ふぞ】　これは、なんといふことをおつしやいますぞ。まあ、何たらことをおいひになるのですか。
【竹の中より見つけ聞えたりしかど】　竹の中からお見つけ

申したけれども。

「聞ゆ」は、こゝでは敬意をあらはす語。たてまつる、まつる、まゐらす、などの意。

源氏物語の桐壺の巻に「疑ひなきまうけのきみと、世にもてかしづきこゆれど。」

枕草子卷五に「いかやうなるにかあると問ひきこえさせたまへば。」

【わが丈立並ぶまで云々】 わがせたけと同じほどにまでそだてあげたわが子を、だれが迎へに來ませうぞ。

【まさに許さむや】 たとひ迎へに來ましたとて、それを許して、おめ〳〵とそのものに渡しませうか、斷じて渡しはいたしませぬ。

【われこそ死なめとて】 若しそんな事がありましたら、生きてゐる甲斐はないから、私はもう死んでしまひます。

（竹取翁の語）といつて。

【泣きのゝしる】 大聲で泣きさけぶ。

「のゝしる」は、聲高く言ひさわぐこと。やかましく言ひたてること。

土佐日記に「とかくしつゝのゝしるうちに夜ふけぬ。」

【月の都の人にて】 この上に「わらはは」などの語を加へて見よ。

【片時のま】 わづかの時間。ちよつとの間。しばしの間。

「片時」（カタトキ）は、一時の半。わづかの時間。

宇津保物語、藏開上、に「かくあやしきところに、一日かたとき立ちとまり給ひなましや。」

【かの國】 あの國。月の國卽ち月世界。

【こゝには久しく遊び聞えてならひ奉れり】 久しい間この下界に遊びまして、皆さんとおなじみを重ねました。

「聞えて」の解は、前の「竹の中より見つけ聞えたりしかど」を見よ。

「ならひ」は、慣れ親しむ意。なじみになる意。

【いみじからむ心地もせず云々】 月の都へ歸ることは決してうれしいとは思ひませぬ、たゞ怨めしさでいつぱいでございます。

「いみじからむ心地」は、たいそううれしい心地。

【己が心ならず云々】 氣が進みませんけれども、不承々々

歸らなくてはなりませぬ。

【諸共にいみじう泣く】 翁夫婦や、召使のものやといつしよに、（姫も）たいそう泣いた。

【使はるゝ人々も……同じ心に悲しがりけり】 召使の者どもも、年久しく姫に慣れ、姫をしたつてゐるので、今更お別れするのが悲しく、姫の上品な氣だて、優麗な姿等がかねて深く腦裡にしみこんでゐるので、この姫におわかれした後は、戀しさがいやまさることであらうと思ふと、堪へ難くなつて、湯も水も喉へ通らず、翁夫妻と同樣に悲しんでゐた。

「年頃」は、數年このかた。年來。多年。

「心ばへ」は、心のおもむき。心ばせ。心ぐみ。心だて。心さし。こゝは「心だて」とみるのが最も適當であらう。

枕草子卷一に「たゞこの心ばへどものゆかしかりつるぞと仰せらるゝついでに。」

「あでやか」は、みやびやか、しなやか、上品。

枕草子卷四に「尼なるかたはの、いとあでやかなるが出できたるを。」

【帝】 ミカド。「御門」の義。天皇の尊稱。直にその御身を指しまゐらせないで、その御居所について申し奉る語。

萬葉集卷二十に「かしこしやあめのみかどを掛けつればねのみし泣かゆ朝よひにして」

【御使に竹取出であひて】 帝の御使に竹取の翁が出て面接して。

【髮も白く腰も屈まり目も爛れて】 あまり泣き悲しんだので。

【物思】 モノオモヒ。物事を思ふこと。憂へ思ふこと。心配。

古今集卷上に「年ふればよはひは老いぬしかはあれど花をし見れば物おもひもなし」

【仰言】 オホセゴト。おほせられるおことば。御命令。

【たふとく問はせ給ふ】 わざ〳〵おたづねをいたゞきましたことは、まことにかたじけない次第でございます。

【人々賜はりて】 帝から武士たちを拜借しいたしまして。

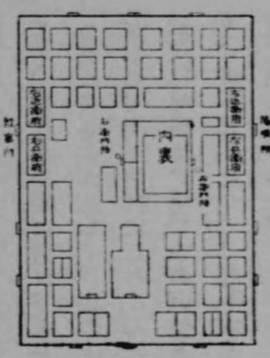
【奏しつる事ども申すを】 竹取の翁が奏上したことを、御使が帝にお取次申し上げると、帝はそれをきこしめし

て、次にやうにおほせられた。

【明暮見馴れたる云々】 明けても暮れても、見なれてゐるかぐや姫を月世界にやつてしまつては、老人夫婦がどんなに力を落すことだらう。

【司々】 ツカサ〳〵。各〻の司。それ〴〵の役所。「司」は役所、官廳、官署、官府。こゝは主として六衛府などをいふ。

【六衛のつかさ】 ロクエのつかさ。六衛府、卽ち宮城の警衛・行幸の供奉等を司る左近衛府・右近衛府・左衛門府・右衛門府・左兵衛府・右兵衛府をいふ。



【家に罷りて】 六衛府の兵士どもが、竹取の翁の家へまゐつて。

【築地】 ツイヂ。築泥(ツキヒヂ)の略。柱を立てて板を心とし、泥土でぬりかため、屋根を瓦で葺いた垣。古くは泥土を築き固めて造り、今の土手のやうな墻であつた。ついひぢ。ついがき。ついぢべい。

枕草子卷二に「ついぢのくづれ。」

【あける隙もなく守らす】 あいてゐる隙間もなく、嚴重に守らせる。

【弓矢を帶して居り】 それ〴〵、弓矢をたづさへてゐる。「帶す」(タイす)は、おぶ、つける、佩(ハ)く、などの意。

【母屋】 オモヤ。「主屋」の義。家の中央の部分。もや。庇・廊下などの對。

【嫗】 オウナ。老いたる女。こゝは竹取翁の妻。

靈異記卷中に「嫗、於于那。」

宇津保物語、藤原君に「京わらはべ、おうなおきな、召め集めてのたまはく。」

【塗籠】 ヌリゴメ。周圍をかたく壁でぬりこめ、あかりとりをつくり・妻戸によつて出入する室。納戸の類。衣類・調度などを納めおくところ、又寢所にも用ひる。

宇津保物語、藏開、上に「寢殿一つゝめぐりはあらはにて、ぬりごめの限り見ゆ。」

【抱へて居り】 イダカへてヲり。だきかゝへて居る。

【戸をさして】 戸をたてきつて。

「さして」は、鎖(ジャウ)を加へること。門戸を閉ぢること。とざすこと。

源氏物語の末摘花の卷に「二間のきはなる障子、てづからいと强くさして。」

【かばかり守る處に云々】 こんなに嚴重に守つてゐるところへ、よし天人が攻めて來ようとも、なんで負けるものか。「かばかり」は、これほど。こんなに。かほどに。

【つゆも物空に翔らばふと射殺したまへ】 ちよつとでも、あやしさうなものが空をかけつてゐたら、すぐに射殺しなさい。

「つゆ」は、すこし。いさゝか。

「ふと」は、たゞちに。ぢきに。たちまち。

宇津保物語、樓上、下に「扇して招きたまへば、打ちゑみして、ふとおはしたり。」

【かばかりして守る處に云々】 かほどにまでして嚴重に守つてゐるところに、もし蝙蝠の一匹でも出て來たら、早速これを射殺して、見せしめのために、さらしものにしたいとおもつてゐます。

「蝙蝠」(カハホリ)は、カウモリに同じ。哺乳動物、翼手類に屬する小獸。よく空中を飛翔する。前肢の骨は甚だ長く、その指骨は特に細長い。指間には薄い膜を張る。晝は洞穴の内にひそみ、夜間飛び出て昆蟲類を食ふ。

【頼しがり居り】 たいそうたのもしいことに思つてゐた。

【さし籠めて】 門戸を閉ぢて、嚴重に警固して。門戸をさしかためて。

源氏物語の帚木の卷に「いとむづかしげにさしこめられて、人あまたはべるめれば、かしこげにときこゆ。」

【したぐみ】 下組。用意。準備。もくろみ。計畫。

【あの國の人をばえ戰はぬなり】 あの國(月の國)の人とは、到底戰をすることは出來ません。あの國の人にはとてもかなひません。

【弓矢して射られじ】 あの國の人は、弓矢で射殺すことは

とても出來ますまい。

【かの國の人來なば云々】 あの國の人が來ましたならば、勇猛心を十分に發揮して、これと戰を交へる人は、よもやありますまい。

「よも」は、よもや。まさか。萬に一つも。やはか。

枕草子卷四に「更によも語らひ取らじ。」

【さが髪】 そが髪に同じ。その者の髪。その奴の髪。

【かなぐり落さむ】 「かなぐり落す」とは、亂暴にひつかいて落すことをいふ。

【さが尻を搔きいでて云々】 その者の尻をひきむいで、多くの大宮人どもに見せて、恥をかゝせてやりませう。

「搔きいづ」は、かき出だすこと。出すこと。「かき」は接頭語。

「こゝら」は、そこばく、こゝだ、こゝだく、甚だ多く。

古今集、春下に「木づたへばおのが羽風に散る花を誰におほせてこゝら鳴くらむ。」

「おほやけ人」は、宮仕への人。大宮人、宮人。

枕草子卷四に「おほやけ人・すまし・をさめなどして、たえずいやしめにやり。」

【聲高になのたまひそ】 大きな聲でそんな事をおつしやいますな。

「聲高」(コワダカ)は、高い聲。大聲。

宇津保物語、藏開、上に「寅の時ばかりに生れたまひて、こわだかに泣き給ふ。」

【いとまさなし】 たいそうみにくうございます。たいそう見苦しう存じます。

「まさなし」は、よろしからず、不都合なり、見にくし、見ぐるし、などの意。

源氏物語の紅葉賀の卷に「見る目にあくは、まさなき事ぞとよ。」

【いますかりつる志どもを云々】 これまでうけました多年の御養育の御恩をおかへし申さうともしないで、やがて月の都へかへらねばなりませぬのが、まことにざんねんでございます。

「いますかり」は、「います」に同じで、おはす、あらせられる、などの意。

「つる」は完了の助動詞。

【長き契のなかりければ云々】 長くおそばにゐることが出來るといふ因緣のありませなんだために、まもなく月の都にかへらねばならぬのかと思ひますと、まことに悲しうございます。

【親たちのかへりみを云々】 年老いたまへる御兩親に對しまして、老後のお世話をして御恩報じをいたさねばなりませんのに、それさへ露ほどもせず、このまゝ歸りましては、歸る途すがらもきがかりでなりませんので、この幾月かの間、外に出て、月に向つて、今年だけはと猶豫を願ひましたが、どうしてもおゆるしがないので、かやうに思ひ歎いてゐるのでございます。

「かへりみ」は、世話、なさけ、恩顧。報恩。

源氏物語の少女の卷に「身に餘るまで御かへりみを給はりて。」

「月ごろ」は、數月このかた。數月來。

宇津保物語、忠乞に「待ちわたりたまへど、御文をだにきこえで、月ごろになりぬ。」

【御心をのみ惑はして云々】 御兩親にお歎きばかりおさせ申しておそばを去るといふことが、悲しくて〳〵たまりません。

【かの都の人は云々】 彼の月の都の人はたいそうきれいで、年よることもなく、心配もなく、樂しう暮してゐます。

【さるところへまからむずるも云々】 さうした結構なところへ歸るのでございますけれども、うれしいとはおもひません。

【老い衰へたまへるさまを云々】 御兩親樣の老い衰へていらつしやる御樣子を今後目のあたり見て、御孝養をおつくし申すことの出來ないことが、さぞや戀しくてならないことでございませう。

【胸痛きことなしたまひそ云々】 そんな悲しい、胸のせまるやうなことを言ひなさるな。どんな立派な姿の天使でも、これ程嚴重にかためてゐる以上、何の事もありはしまいよ、安心しなさい。

「障らじ」(サヤらじ)は、さしつかへあるまい、さはりに

はなるまい、何の事もあるまい、などの意。
萬葉集巻五に「もゝかしも行かぬ松浦路今日ゆきて明日は來なむを何かさやれる」
【子の時ばかり】夜の十二時の頃。
子……午後十二時
丑……午前二時
寅……〃　四時
卯……〃　六時
辰……〃　八時
巳……〃　十時
午……〃　十二時
未……午後二時
申……〃　四時
酉……〃　六時
戌……〃　八時
亥……〃　十時
【ある人】そこらにゐあはせる人。
【立ちつらねたり】立ちならんだ。
【内外なる人】ウチトなるヒト。竹取の翁の宅の内外を守つてゐる人々。
【物に魘(オソ)はるゝやうにて】物のけなどにうなされたやうで。
「魘はる」とは、恐ろしい夢など見て、うなされること。
【辛うじて思ひ起して】これではならぬと、やつと元氣を出して。
【痿(ナ)え屈まりたる中に】くだ〳〵になつて、よわり入つてゐる中に。
【心さかしきもの】心のつよくたけきもの。氣丈なもの。
【念じて】心をこめて。神佛に祈願をこめて。
宇津保物語、嵯峨院に「心の中におのれを相見むと念じたまへ。」
【外ざまへ往きければ】矢が的をそれて、ほかの方へいつてしまふから。
「外ざま」(ホカザマ)は、よその方。他の方。
源氏物語の帚木の巻に「方ふたげてひきたがへ、外ざまへとおぼさむは、いとほしきなるべし。」
【心地たゞしれにしれて】正氣を失つて。茫然として。ただもう、ぼけたやうになつて。
「しれる」とは、愚になること。ぼけること。

土佐日記に「上・下・わらはまで、醉ひしれて。」
【まもりあへり】じつと見つめてゐた。
「まもる」は、目を放たず見ること。見つめること。
萬葉集巻八に「ころもでにみしぶつくまで植ゑし田をひきた吾れはへまもれるくるし」
【裝束】シャウゾク、サウゾク。こゝは、身じたく、身なり、などの意。
【物にも似ず】何ものにもたちまさつて、これに似たもののないことにいふ。
【羅蓋】ラガイ。薄絹を張つた長柄の傘。古、貴人にさしかけたもの。きぬがさ。
萬葉集巻三に「ひさかたのあめゆく月をつなにさしわがおほぎみはきぬがさにせり」

【家に造麿まうで來】家の中にゐる造麿(ミヤツコマロ)よ罷り出よ。(造麿は、竹取の翁の名)
【うつぶしに伏せり】うつむいて伏さつてしまつた。
【汝をさなき人云々】汝おろかなる者よ、汝翁はいさゝかの功德をつくつたので、汝の助にもと、しばしの間姫を汝の手もとにつかはしておいた。そのため、この年月の間、あまたの黄金を與へたので、汝は今、かやうに別人の如く富み榮えたのである。
「をさなき人」は、おろかなるもの。こゝは竹取の翁をあはれんでいふ。
「功德」(クドク)は、現在又は未來を資益する善き作業。こゝは竹取の翁が竹の中からかぐや姫を見つけ出してこれを養育した善業をさしていふ。
宇津保物語、藤原君に「佛に奉るものはいたづらにならず、來世、未來のくどくなり。」
「そこら」は、幾許、いくらか、幾多、多く、などの意。
【罪の限りはてぬれば】犯した罪に對する懲罰の期限が果てたから。
【能はぬことなり】姫を返すまいとしても、それは到底不可能のことである。
【二十年餘り】ハタトセアマリ。

【片時と宣ふに怪しくなりぬ】 前文の「片時のほどとて降ししを云々」をうけていふ。「私はこのかぐや姫を二十年餘りもそだててゐますのに、あなたさまは『片時のほど云々』とおほせられますので、何だかあやしくなりました。どこか、ほかに、あなたさまのおさがしになつてゐるかぐや姫と申すお方がおありになるのではございますまいか。」といふほどの意。

【こゝにおはするかぐや姫は云々】 こゝにいらつしやるかぐや姫は、今重い病氣をわづらつていらつしやいますから、ようお出でにはなりますまい。

【いさかぐや姫云々】 さあ、かぐや姫さま、こんなきたないところに、どうして長居がお出來になりませうぞ。

【たゞあきにあきぬ】 わけもなく、ひとりでに、あいてしまつた。

【格子どもも人はなくしてあきぬ】 たてこめてある格子どもも、ひとりでにあいてしまつた。

「格子」（カウシ）は、寢殿造の建具の一。細く角なる木を縱横に組合はせて造つたもの。柱と柱との間にはめ、上下二枚にして、上なるを巳釣りあげ、下なるをば立ておくのを常とする。

【え留むまじければ云々】 だれ一人、かぐや姫を留めることの出來るものがないので、かぐや姫は、外に出て、空を見あげて泣いてゐた。

【こゝにも心にもあらで、かく罷るに云々】 私も、不本意ながら月の都に歸る次第でございますから、どうか、私の切なる心の中をおくみとり下さいまして、せめて、私が月の都へ昇つて行きます處なりとも御覽下さつて、お見送り下さいませ。

【何しに悲しきに見送り奉らむ】 こんなに悲しいのに、なんで、お見送などが出來ませうぞ。

【われをばいかにせよとて、云々】 どうして、わたしをふりすてて月の都にのぼりゆかれるのです、あとにのこつたこのわたしを、どうしろとおつしやるのですか。

【具して率しておはせね】 わたしを月の都へつれていつてください。

【御心惑ひぬ】 かぐや姫も、はたと當惑された。

【この國へ生れぬるとならば云々】 私が若しこの國に生れたものでございますならば、老いたまへる御兩親に歎きをおかけ申さぬ時節まで（末長う）この國に居りませうものを、人間ならぬ悲しさ、それも出來ませず、このまゝおわかれいたさねばなりませぬことは、くれ〴〵も不本意でございます。

【脱ぎおく衣を云々】 私が脱いでおくきものを、私のかたみとして御覽下さいませ。

「かたみ」は、亡き人又はわかれた人などを思ひ出すたねとなるもの。記念。

萬葉集卷十五に「わぎもこがかたみに見むをいなみづま白波高みよそにかも見む」

【見すて奉りてまかる空よりも云々】 お見すて申して、月の都へかへる、その空の上から墜ちさうなきもちがいたします。（あまりに下界に心がひかれるから）

【天人】 テンニン。天上界に棲むといふ想像上の人。普通に描くは、頭に華鬘（ケマン）をつけ、羽衣を着て、天上を飛行する女性の像である。

【天の羽衣】 アマのハゴロモ。天人のその身につけてゐるといふ衣。鳥の羽で造られてゐる薄く輕い衣。

【不死の薬】 フシのクスリ。服用すると、永く死なぬといふ藥。仙藥。

史記の封禪書に「蓬萊・方丈・瀛洲、三神山、在勃海中。諸仙人及不死藥皆在焉。」

【壺なる御藥奉れ】 壺にある不死の藥をおめしあがりなさいませ。

【衣着つる人は心ことになるなり】 天の羽衣を着れば、天人の心となつてしまつて、この世の人は忘れてしまふから、それまでに一言いひのこしておくことがある。

【天人遲しと心もとながり給ふ】 天人どもは、おそくなるといつて、たいそうじれつたがりなされた。

「心もとなし」とは、心のいらだつこと。待ち遠におもふこと。じれつたいこと。

【物知らぬことなのたまひそ】 そんな無情なことをいふも

のではありません。

【いみじくしづかにおほやけに御文奉り給ふ】　たいそう敬虔の態度で御文をしたゝめて天子に奉られた。かぐや姫のおくゆかしい態度が、あさやかに文字にあらはれてゐる。

「おほやけ」は、(一)朝廷。政府。官廳。(二)天子また皇后を稱へ奉る語。(三)國家。公共。(四)表だつてのこと。祕密ならぬこと。(五)私有ならぬこと。公有。共有。(六)私なきこと。公平。こゝは(二)の意。

伊勢物語に「おほやけのみけしき惡しかりけり。」

【許さぬ迎】　私のこの世界に留まることを許さぬ、月世界からの迎の使者。

【取率てまかりぬれば】　私をつれてかへつてしまひますから

【口惜しく悲しきこと】　この下に「いふばかりなし。」などいふほどの句が省かれてゐる。

【宮仕つかうまつらずなりぬるも】　宮仕を申しあげずにおしとほしましたのも、かやうに厄介な身の上だからでございます。上樣には、さぞがつてんのゆかぬ奴だと思召されたでございませうが、かやうな次第でお斷り申し上げたのでございます。しかし折角の御仰をそむきましたので、さぞ無禮なものと、いつ〳〵までもお憎しみ遊ばされますことと、それのみ心にかゝつてなりません。

「煩はしき身」は、めんどうな身の上。厄介な身の上。

「心得ず思し召す」とは、合點のゆかぬ奴だ、不思議な奴だ、奇怪な奴だと、思し召すこと。

「心強く」は、つれなく。强情に。無情に。

源氏物語の末摘花の卷に「つれなう心づよきは、たとしへなうなさけおくるゝまめやかさなど。」

「なめげ」は、無禮なさま。

枕草子卷九に「ずんざのなめげにあなづるも。」

【いまはとて天の羽衣着るをりぞ云々】　「今しも、天の羽衣を着て月の都に上らうといたしますとき、上樣への宮仕をも否み奉りましたことどもを追想いたしまして、まことに恐れ多くおもつてゐます。」といふほどの意。

【頭中將】　トウノチュウジャウ。近衞の中將で藏人頭を兼ねてゐるもの。

枕草子卷五に「宣陽殿の一の棚にといふことぐさは、頭中將こそしたまひしか。」

【ふと】　こゝは、たちまち、たゞちに、早速に、などの意。

【この衣(キヌ)着つる人】　天の羽衣を着た人、卽ちかぐや姫。

【何せむにか、命も惜しからむ云々】　「何のために命が惜しからう、誰のために長命をねがはうぞ、そんなものは何の役にもたちはせぬ。」といふほどの意。

【かぐや姫をえ戰ひ留めずなりぬることを云々】　かぐや姫を迎へに來た月の都の人と戰つて、姫をひきとめようとしましたが、たうとうその目的を達することが出來ませんでしたといふことを、事こまかに帝に申し上げた。

【いといたくあはれがらせ給ひて】　たいそう、竹取夫婦の心中をおかはゆさうにおぼしめして。

【御遊】　ギョイウ。「遊」(アソビ)の敬語。おんあそび。

東宮年中行事、七月に「ふるくはぎよいうある時は、管絃に堪へたるともがら召して。」

【大臣】　ダイジン。オトド。太政官の上官、卽ち太政大臣、左右大臣・內大臣の稱。

【上達部】　カンダチベ、又カンダチメ。公卿に同じ。

公は攝政・關白及び大臣。卿は大・中納言、參議及び散一位並に三位以上。

【駿河國】　スルガノクニ。東海道の一國。修して駿州ともいふ。西は大井川を以て遠江と界し、北・西は赤石山脈を以て信濃・甲斐に連なり、北方甲斐の國境には富士の靈峯が聳え、東は箱根・足柄の諸山を以て相模・伊豆に接してゐる。而して南方駿河灣に面してゐる一帶は氣候が溫暖で風光がよく、保養に適してゐる。靜岡縣の所管。

【あふこともなみだにうかぶわが身には云々】　もはや、永久にかぐや姫に逢ふ機會がなくて、涙ばかりうかべてゐる我が身は、たとひ不死の藥を飲んで長生したとて、何の甲斐があらうぞ。」といふほどの意。

「あふことも涙」は「あふことともない」の「な」を「なみだ」(涙)の「な」にいひかけたのである。

【月岩笠】　ツキノイハカサ。

【あなる】「あるなる」の略。

【峯にてすべきやう教へさせ給ふ】富士の山頂でなすべき次第を一々御教へあそばされた。

【そのよし承りて】そのおもむきを承つて。

「よし」は、わけがら。ことがら。おもむき。いはれ。次第。由緒事情。

土佐日記に「それの年しはすの二十日餘り一日の日の戌の時に門出す。そのよしいさゝか物にかきつく。」

9　挿　圖

望の月夜　吉村忠夫筆

かぐや姫が、月世界から迎へに來た「飛ぶ車」に乘つて今しも昇天せんとするところ。翁媼をはじめ人々の悲歎のさまが、巧に描き出されてゐる。

作者吉村忠夫は日本畫家。明治三十一年福岡縣生。大正八年東京美術學校日本畫科卒業後、更に研究科に學ぶこと三年。大正七年以降文展帝展に入選すること數回、同十一年特選となつた。昭和三年帝展委員に推され、同五年更に審査員に擧げられた。外に東豪邦畫會、日本畫會、中日美術聯合研究會の會員である。

10　參　考

○竹取物語の解說、文學的地位等について、故藤岡作太郎博士の所說を揭げよう。

文學作品としての性質…世に稱す。竹取物語は物語のいできはじめの祖なりと。然り、竹取は我が國最初の小說なるべし。然れどもこれは廣き小說の意義においてのことにして、これをローマンスとノーヱルとの二種に別ちていへば、竹取は人生を活寫したるノーヱルにあらずして、事實の怪奇に興をとるローマンスの一なり。我が國の傳奇的說話（ローマンチック）にはやく「夢野の鹿」「浦島が子」の物語あり。その他、紀・記・風土記等に見えたるものあれど、いづれも世を經て漸々に成りたる傳說にして、一箇の作家が構想を文學の上に現したるものにあらず。文武天皇の頃、伊與部馬養が筆に成れりといふ漢文の浦島子傳あれど、これも在來の傳說のまゝを記せる短篇に過ぎず。一作者の想像に出でたる小說は、實に竹取を以てはじめとすべし。而してその趣向は記事の變怪を以て讀者の空想を刺戟し、また滑稽を交へたるものにして、人生の自然を描き、人情の祕奧に徹するが如きは、作者が深く注意せざりしところなり。本居宣長が、物語は物の哀を寫すものなりといふ說を引いて、竹取物語解に、この心して竹取をも見るべきやう說きたるが、この說は源氏物語等にこそ全く適應すべけれ、竹取は、この說のみを以て繫肘せんは誤れり。

梗概…「別項取扱上の注意」のところに揭げてあるからこゝには省く。

書名…この書の題目については多言を要せず。竹取物語、つぶさには、竹取翁物語といふ。また物語といふ語を略して、竹取翁とのみいふは、この一書に限りたることにもあらず。竹取翁の名は書中の事實に取りたるものにして、この翁は一篇の主人公にはあらねど、篇首にまづ見ゆれば、取りて書名としたるのみ。かく簡單素樸なる命名法は古の物語にその例多し。竹取翁の名は既に萬葉集にあり。竹を取りて業とせりといふ事も見ゆれば、これはこの集より借り來れるなり。竹取の二字、普通にはタケトリと訓むこと無論なりといへども、タカトリと訓むべしといふ說あり。六百番歌合に、顯昭がタカトリといへるを、俊成の判にこれを難ぜしかば、顯昭陳狀して、却つてタケトリといふ古例こそ見たけれと辯じたることあれば、平安朝の末、既に訓方の諍論はありしにて、萬葉仙覺抄にもタカトリといへり。されど、この物語の名は從來の例によりて、タケトリといはん方穩かなるべし。源氏物語蓬生の巻などに、かぐや姫の物語といへるは、主人公の名によりて稱したるこの書の一名なり。

時代…竹取物語の成りたる時期は明らかならずといへども、平安朝の中頃既に盛に行はれたることは、その名の當時の物語に發見するを以ても知るべし。宇津保物語初秋の巻の下に中秋十五夜のことをいひて、赫耶姫の名を引き、源氏物語繪合の巻には「まづ物語のいできはじめのおやなる竹取の翁に、うつぼの俊蔭を合はせて爭ふ。」といひて、赫耶姫およびその他の人物をも評し、下りては狹衣・榮華物語などにも見えたり。河海抄に、竹取翁は古物語なり。作者を知らずとあり。俗に源順の作なりと傳ふれど、毫も根據なき說にして、天曆時代の源順が和漢の學に長けたりといふより、古風の物語はすべてその作に歸せしめんとす。河海抄に、宇津保を源順の作といへど疑ありといひ、また俗說に落窪をも源順の作といふ。これらの三書が一手に成れるものにあらざることは識者を待たずして知るべし。玉小櫛に、竹取物語は誰が何時の代に作れりとは確かに知られねども、いたく古きものとも見えず、延喜よりは以來のものとぞ見えたるといへど、從ふべからず。（中略）竹取物語は醍醐天皇の頃は既に行はれ

たるものにして、しかも假名が弘通して後の作なれば、昌泰・延喜（醍醐天皇の御宇、皇紀一五五八―一五八二）を隔つることまた甚だ遠からじと覺ゆ。（中略）

準據…竹取物語の全體の趣向は、もとより著者が構案に出でたるなるべしといへども、書中局部の事柄は、古傳說、古典籍に憑據を求めたるもの少からざるが如く、その源に泝れば、或は印度の經文に、或は支那の書籍に、我が國の口碑に、これが出典を求め得べし。しかれども單に些事の似たるのみ、名稱の通ひたりといふのみ。著者は片々たる材を己が記憶に求めて、これを彩り、これを更めて、假にも剽竊の名を下すべき嫌は、力めてこれを避けたり。しかもその古事を取り、古書に據りたりといふも、著者が有意にことさらに求めたるものとするは、或は妥當を闕くべく、平生蘊蓄せるところの、この書を編むに當りて、知らず〳〵腦裏に再現して、以て書中の一分子を構成するに至りしなるべし。そはとにかく、この出典と見るべきは如何。これにつきて第一に思ひ出でらるゝは、萬葉集卷十二の竹取翁歌なり。されど、これとても竹取翁といふものと僊女とありといふだけの等しきのみ、全體の組織は大いに異なり。この異同を存せしめしこそ卽ち著者が技倆のあるところにあらずや。（下略）

技巧…元來邦人は快活の性に富みて、滑稽を好むこと甚し。惜しむべし、その滑稽は古往今來ともに意義の上に見ること少くして、言語の戲弄に終ること多きを。太古以來、言語に技巧を弄すること盛に行はれて、枕詞となり、懸詞となり、滑稽も主として言語の末に涉れり。されば竹取物語にも言語の上の滑稽多くして、一齣の末毎に世諺・通語の說明を以て局を結ぶ。妻爭ひのことを述べては「さる時よりなむよばひといひける。」といひ、佛の御鉢の條には「かれ鉢を捨ててまたいひけるよりぞ、面なきことをはちをすつとはいひける。」といひ、…（中略）一篇の終には「御文、不死の藥の壺ならべて火をつけて燃すべき由仰せたまふ。その由承りて、兵士ども數多具して山へ登りけるよりなむ、その山をふしの山とはなづけける」といへり。（下略）

（國文學全史、平安朝篇に據る）

一四　愚禿親鸞

西田幾多郎

1　解題

親鸞の人格、眞宗の本旨並に宗教といふものに關する評論である。原文は「思索と體驗」に載つてゐて、（明治四十四年四月）と文末に括註がしてある。

「思索と體驗」は西田幾多郎博士の論文集で、自序の冒頭に、「この書は、最後の二篇を除いては、悉く余が京都に來てから書いたものを集めたものである。『思索と體驗』と題したのは、單に余が思索したもの、體驗したものといふ意に過ぎない。」とある。「認識論に於ける純論理派の主張に就いて」以下すべて十四章を收めた。右の自序は大正三年にものされてゐるが、大正十一年增訂版が出てゐる。岩波書店發行。

2　作者

西田幾多郎　ニシダイクタラウ。

哲學者、文學博士。石川縣の人。東京帝國大學選科出身。多年第四高等學校教授であつたが、京都帝國大學の創設と共に擧げられて教授となつた。現に京都帝國大學名譽教授である。

3　編纂の用意

前數課にわたつて平安朝文學を講讀したから、本課に於ては方向を轉じて、思索的教材を課し、「愚禿親鸞」を通じて宗教の本質の何物たるかを了解せしめたい。

4　要旨

本課は思索的教材である。常に思索の生活を送つてゐる作者は、冒頭の一節に於て、「愚禿の二字は能く上人の人となりを表すと共に、眞宗の教義を標榜し、かねて宗教そのものの本質を示すものではなからうか。」といつてゐる。この語はやがて本文の要旨を示してゐる。われらは、作者の思索の跡を辿つて、「宗教」の神髓を思ひ、「愚禿」の眞義を味はひ、「眞宗」の本旨を考へ、「親鸞」の人となりを偲ばねばならぬ。殊に「愚禿」の二字に本文の出

發點があることに着眼し、その「他力といはず、自力といはず、一切の宗教はこの愚禿の二字を味はふに外ならぬ。」と斷じてあるところに思を致すべきである。

5　取扱上の注意

◆本文の要旨は、前項で述べた通り極めて明瞭であり、論述の順序・構成も、概說を要するまでもなく、極めて自由に、聯絡もよく、まことに纏つたものである。たゞ、內容は生徒に果してどれだけ味讀が出來ようかと案ぜられないでもない。殊に思索的傾向のない生徒には難解であらう。かういふ文章では、あまり初めに部分的に辭句的にこだはつてゐることは、取扱上いかがかと思ふ。まづ全文を再讀三讀させて、文章の順序に拘らず、分るところを十分に分らせて、それから分らぬところに及ぼすべきであらう。さうすれば、案外、別の語句で註釋しなくても、本文の甲の語句が、本文の乙の語句を說明し註釋してゐることを發見するであらう。つまり、本文を以て本文を解することに着眼させるがよいと思ふ。

◆宗教といふものの本質を說いてあるが、やはり、具體的に讀者の心に響いて來るものは、愚禿親鸞である。それが又本文の目的である。殊に末段、日蓮と比較して親鸞を敍した處は、文章も鮮かなものである。この作者が、たゞの冷い思索家でないことも、この一節で知られる。

◆又作者の篤學な、學者としての愼重な態度は、「ではなからうか」といふ口調に伺はれるし、その斷乎たる學者的信念の强いところは、「である」といふ口調に察せられる。それらの個々の場合に着眼して、「心と言葉」との關係をも考へ、作者の人格を思ひつゝ、この文を熟讀玩味するやうに生徒を導かれたいものである。

6　設問

1　この文は、如何なることがらを語らうとして書かれたのであらうか。

2　この文を通して見るとき、作者はどんな性格の人であると思はれるか。

3　この文を熟讀玩味して、各自の心に得たと思ふことはどんなことであるか。

4　「愚禿」の二字を、この作者が說いてゐるよりも更に平たく言ふと、どういふ義になるか。

5　この文に說いてある點から見て、宗教家としての日蓮上人から受ける感じと、又、親鸞上人から受ける感じと、どんな風に異なるか。

6　鳥が花を啣んで來たとか、來なくなつたとかいふ話は、何を意味してゐるのか。

7　「自己の本體」と「愚禿」の二字とは、どういふ關係にあると考へられるか。

7　釋義

【愚禿親鸞】　グトクシンラン。親鸞上人の自稱。

親鸞上人は淨土眞宗の開祖、皇太后宮大進日野有範の長子。承安三年（一八三三）生れた。幼名は松若丸。九歲のとき青蓮院慈鎭の門に入つて範宴といひ、假名を少納言と號した。翌年叡山に上り、苦學二十年、求道の熱誠もその志を果さず、洛東黑谷の法然の唱道する淨土念佛の法門に「唯有淨土一門」の眞宗敎を見出して、これに身を投じた。かくて名を綽空と改め、法然の了解を得て、在家往生の實を示さんが爲に九條兼實の女惠信を娶り、名を善信と改めた。建永二年（一八六七）念佛停止の禁制のため、法然に連坐して越後國國府に流された。この間、愚禿と自稱し、更に親鸞と改めた。流刑五年、師と共に赦免せられ、信濃路の巡錫を經て、關東有緣の招請に應じ、滯留二十餘年に及んだ。元仁元年（一八八四）『敎行信證』を脫稿した。これを淨土眞宗の立敎開宗とする。かくて文曆元年（一八九四）關東を出發し、近江の木部に在住すること三年、六十六歲にして京都に歸着した。「三帖和讃」・「三經往生文類」・「一念多念證文」・「唯信鈔文意」・「文類聚鈔」・「愚禿鈔」・「入出二門偈」等を著はし、弘長二年（一九二二）京都の西洞院で入寂した。年九十。明治元年見眞大師の諡號を勅賜された。消息文に「末燈鈔」・「御消息集」・「血脈文集」・「高田御書」等がある。

なほ、釋仰誓の著「淨土和讃略解」に記す所が、ちよつとおもしろいから、左に鈔錄する。

祖師聖人三十五歲にして「越後の國に左遷せられ給ひしとき、藤井善信（ノヨシザネ）と俗名を賜うて後、上（カミ）を敬ひ、自ら御身をつゝしみ給ひ、髮を剃り給はず、禿（カムロ）の如くなりまし〳〵しゆゑ、「非レ僧非レ俗（ニズニズ）、是故以二禿字一爲レ姓（ノヨテノヲスト）。」とのたまひて、自ら愚禿となのりたまふなり。愚とは無智の義、造惡の義なり。禿とは老者無髮の稱といひて、俗人の如く髮長くなるにもあらず、禿の姿にてましますゆゑ、自ら卑下して愚禿とのたまふなり。

親鸞とは、祖師聖人の御諱なり。聖人九歲にて出家し給ひ、法名を範宴と申し奉る。二十九歲にして吉水の禪房に入り給ひ、法然聖人の御弟子となり、名を綽空と改め給ふ。然るに六角堂の觀音の靈告によりて、又善信（ゼンシン）と名のり給ふ。その後自ら親鸞と名づけ給ふ。按ずるに、天親・曇鸞・道綽・源空・善導・源信の

六高祖の名をよせ合せて假名・實名とし給ふこと、不思議なることなり。

【眞宗】　淨土眞宗の略。親鸞の始めて開いた宗派。親鸞の師法然上人の開いた宗派を淨土宗と稱するに對して起つた名である。淨土宗は行を以て要としてゐる、卽ち六字の名號「南無阿彌陀佛」を數多く稱へることを貴ぶ。眞宗は信を以て要としてゐる、卽ち信心獲得といふことに重きを置き、六字の名號は報謝の稱名として相續させる。特に眞宗が、肉食妻帶を許したのは親鸞の卓見である。眞宗を、一名一向宗といふは、阿彌陀如來を一心一向に賴むといふことから附けた名で、他宗からいふ語。(眞宗の人自らは言はぬ。)

【信者】　シンジャ。その宗教を信仰する人。信心者。

【上人】　智德を具備して專念佛道を修する人。又、高德の僧を呼ぶに用ひる稱。

摩訶般若經に「云何名二上人一。佛言、若菩薩一心行二阿耨菩提一、心不二散亂一、是名二上人一。」

又、

禪林寶訓音義に「內有二智德一、外有二勝行一、在二人之上一、故稱二上人一。」

眞宗の信徒は、親鸞上人とは書かず、親鸞聖人と書き、その後の歷代の法主を上人と書く。

聖人（シャウニン）とは、智慧博通にして、慈悲深大なる人の稱。

【在世の時】　この世にまし〳〵た時。

「在世」は「ザイセイ」ともよみ、又、ザイセともよむ。この世に生存してゐる間。

十訓抄卷中に「われ在世の時殺生を事とするによりて苦報を受く。」

【人となり】　生れつき。もちまへ。性質。

【教義】　ケウギ。をしへの主旨。宗教の旨義。教理。

周書の宣帝紀に「朕欽承二寶曆一、服二膺教義一。」

【標榜】　ヘウバウ。主義・主張又は自己の立場を公然とあらはすこと。看板にすること。

「標」は、しるし、「榜」は、たてふだの義。

【宗教】　シュウケウ。人間が無限者、絕對者、永久なるもの、

神的なるものに對して取る態度。かくの如き超絕的實在に歸依し、これを自己の裡に體驗する生活を宗教といふ。而してこの超絕者を如何に解釋するかによつて種々の現實的宗教が生ずる。

世界に於けるおもな宗教は、佛教・基督教・ムハメッド教・ユダヤ教・印度教・儒教・道教等である。我が神道も亦間〻その中に加へられる。

【本質】　本來の性質。本體。實質。

【飜身一回】　ホンシンイックヮイ。ころりと心機に一大回轉を行ふこと。

【生命】　(一)いのち。壽命。(二)物事の要所。最も大切な部分。こゝは(一)の意。

【神髓】　シンズヰ。その道の奧義。蘊奧。

「眞髓」といふも、ほゞ同意の語である。

【交涉】　カウセフ。かけあひ。かゝりあひ。關係。

【コペルニクス】　Nicolaus Copernicus. 獨逸の有名な天文學者。ポーランド系の獨人で、プロシャのトルトンに生れた。天文學革新の始祖と稱せられてゐる。彼は、太陽は靜止してゐて、地球並に他の惑星が太陽の周圍を運行するものだと說いた。これを地動說（Heliocentric Theory)といふ。この說は、一五〇七年に着手し、一五三〇年に完成した彼が大著作(De Revolutionibus Orbium)にくはしく見えてゐる。

【眞理】　まことの道理。適當のすぢみち。まことの法則。正理。眞諦の理。

方干の詩に「聞二僧說一眞理一、煩惱自然輕。」

【トレミ】　プトレマイオスともいふ。Claudius Ptolemaios; Ptolemy 埃及アレキサンドリヤの星學者・地理學者・數學者。西紀一三九年乃至一六一年代の人。この人の創唱した說は、地球は靜止し、他の天體が總べて同一速度を以て地球を中心として回轉するものであるといふ。卽ち天動說 Geocentric theory である。

【德行】　トクカウ。道德にかなつたおこなひ。正しい行爲。

易經の上經に「君子以常二德行一、習二教事一。」

【この兩者】　德行と宗教との二つをいふ。宗教信仰の結果は自然に德行を伴なふものではあらうが、德行と宗教と

を同一視することは出來ぬといふのである。

【融禪師】　ユウゼンジ。「牛頭法融禪師」の略。達磨大師より第四世、道信大醫禪師の傍出法嗣。牛頭禪の祖。姓は韋氏、潤州延陵の人。十九歲にして經史に通じ、尋いで大般若を閱し、眞空の理に達した。後、志を發して落髮し、牛頭山幽棲寺北岩の石室で禪を修し、四祖の來訪に逢ひ、その提撕によつて心要を明らめた。唐の永徽中、邑宰蕭元善の請に應じて建初寺に住し、顯慶二年閏正月六十四歲で寂した。鳥が花を啣んで來た云々の語は、よく禪僧より耳にする所である。但し、何書に出てゐるかは未詳。

【牛頭山】　コヅサン。支那江南の潤州にある禪寺。

【花を啣(フク)んで】　花をその口にくはへて。

【供養】　クヤウ。供給資養の義。佛語。佛・法・僧の三寶又は父母・師長・亡者等に物を供へて資養すること。

法華經の序品に「香花伎樂、常以供養。」

源氏物語、御法の卷に「法華經千部いそぎて供養したまふ。」

【四祖大師】　支那の禪宗第四世の祖道信。

【參す】　まゐること。こゝは、參つて、教を受ける義にいふ。

【宗教の智は智そのものを云々】　この智は、いはゆる大圓鏡智といはうか、妙觀察智といはうか、眞如の當體といはうか、眞宗のいふ智慧光か、戒定慧でいへば慧に當り、自己を脫却して眞理の根本に悟入するをいふ。この大智の現前する所、こゝに大德がある。卽ち萬德圓滿である。自己を脫却して天地と我と一體なる時、そこに此の智があり、この德がある。この智こそ純智である、その德こそ純德である。その智、その德そのまゝに全體作用し、敢へて他の小智・小德に拘はらぬ、まして智・德にあらぬものは猶更である。これを智そのものを知り、德そのものを用ひるといふのである。平たく言へば、「智そのものを知る」とは、智の本體を知るのである、「德そのものを用ふ」とは、道德の大體に達し、それを體得して用ひるのである。區々たる小智・小德に拘はるのでない。

【三角形の幾何學的性質】　三角形がもつてゐる幾何學上のもの。

「幾何學」(Geometry)とは、空間の性質を研究する數學の一分科。研究の方法によつて直接に概念から幾何學的圖形の性質を闡明しようとする綜合幾何學又は純正幾何學と、解析的數學を應用する解析幾何學との二科に分れる。又、平面內の圖形を論ずるのを平面幾何學、空間の圖形を論ずるのを立體幾何學、圖形の位置の關係を研究するのを位置幾何學、圖形の位置の關係を射影によつて研究するのを射影幾何學、立體を平面上に描きあらはす方法を論ずるのを畫法幾何學といふ。幾何學は實際上測地の必要より太古エジプトに端を發し、ギリシャに傳はつて發達し、ユークリッドによつて大成されたが、第十九世紀に至つて、ガウス及びルジャンドルによつて非ユークリッド幾何學が建立されるに至つた。

【心靈上の事實】　心靈に關する實際のことがら。

「心靈」は心意の主體。心魂。精神。

隋書の經籍志に「詩者所下以導二達心靈一、歌詠中情志上也。」

【英雄】　エイユウ。才智能力の絕倫な人。

人物志卷十に「聰明秀出、謂二之英一、膽力過レ人、謂二之雄一」

魏志の太祖紀に太祖(曹操)謂二劉備一曰、天下英雄、惟使君與レ操耳。」

【豪傑】　ガウケツ。智勇などの衆人にすぐれてゐること。又、その人。

淮南子の泰族訓に「智過二百人一者、謂二之豪一、千人者、謂二之傑一」

孟子の盡心上に「若夫豪傑之士、雖二無二文王一猶興。」

【匹夫匹婦】　ヒッブヒップ。身分のいやしい一對の夫婦。庶民の夫婦。一夫一婦。

左傳の桓公十年に「庶人夫婦相匹。其名旣定、雖レ單亦曰レ匹。故通謂二匹夫匹婦一。」

【眼は眼を見ることは出來ず云々】　自己を離れ、自己を脫却して、超然として自己を反照する底の境地に至らなければ、この智この德は知ることが出來ぬといふのである。

【頭出頭沒】　頭を出したり、かくしたりするといふ義。ここでは、この智この德の間に浮沈出沒して、これを離れ、これを脫し得ないことにいふ。

【赤裸々】　セキララ。(一)すつぱだか。あかはだか。(二)つゝみかくしのないこと。いつはりかざりのないこと。むきだし。露骨。

【一たび懸崖に手を撒(サッ)して絶後に蘇る】　斷崖千尺といふべき、がけつぱらに手を引つかけて、あはやその手がはづれて、落ちて、一旦氣絶して、それから再びいきをふきかへすといふことで、大死一番、迷ひの境地を脱却して、大悟徹底闊天地に躍り出ることをいふ。

「懸崖」(ケンガイ)は、きりたつたやうながけ。きりぎし。斷崖。

張懷懽の書斷に「懸崖墜レ石、驚電遺レ光。」

「手を撒して」は、手をふりはたして。

「蘇る」(ヨミガヘ)るは、生きかへること。蘇生。

【他力・自力】　他力とは、彌陀の力にすがつて救はれるといふ法門、即ち淨土眞宗の類。

自力とは、自己の修行の力によつて佛果を得る法門、即ち禪宗の類。

親鸞作の正像末和讃に

聖道門の人は、みな自力の心をむねとせり。他力不思議に入りぬれば、義なきを義とすと信知せり。

又親鸞聖人御書の中に

マヅ自力ト申スコトは、行者ノオノ〳〵ノ縁ニシタガヒテ、餘ノ佛號ヲ稱念シ、餘ノ善根ヲ修行シテ、ワガ身ヲタノミ、ワガハカラヒノコヽロヲモチテ身口意ノミダレゴコロヲツクロヒ、メデタウシテ淨土ヘ往生セントオモフヲ自力ト申スナリ。マタ他力ト申スコトハ、彌陀如來ノオンチカヒノナカニ選擇攝取シタマヘル第十八ノ念佛往生ノ本願ヲ信樂スルヲ他力ト申スナリ。云々。

【着眼】　チャクガン。目ぼしをつけること。氣をつけること。

蘇軾の詩に「着眼細看君勿レ誤。」

【愚人惡人を正因とした宗教】　親鸞作の正信念佛偈に

「惑染凡夫信心發、證二知生死即涅槃一。」

又同偈に「一生造レ惡、値二弘誓一、至二安養一證二妙果一。」

又同偈に「極重惡人唯稱レ佛、我亦在二彼攝取中一。煩惱障レ眼雖レ不レ見、大悲無レ倦常照レ我。」

親鸞作淨土和讃の中に「大聖おの〳〵もろともに、凡愚底下のつみびとを、逆惡もらさぬ誓願に、方便引入せしめけり。」又「五濁惡時惡世界、濁惡邪見の衆生には、彌陀の名號あたへてぞ、恒沙の諸佛すゝめたる。」

又同七、高僧和讃の中に「極惡深重の衆生は、他の方便さらになし。ひとへに彌陀を稱してぞ、淨土に生るとのべたまふ。」

蓮如上人の御文に「末代無智ノ在家止住ノ男女タラントモガラハ、コヽロヲヒトツニシテ、阿彌陀佛ヲフカクタノミマヰラセテ、サラニ餘ノカタヘコヽロヲフラズ、一心一向ニ佛タスケテタマヘトマウサン衆生ヲバ、タトヒ罪業ハ深重ナリトモ、カナラズ彌陀如來ハスクヒマシマスベシ。」又、「ソレ末代ノ惡人女人タラン輩ハ、ミナ〳〵心ヲ一ニシテ、阿彌陀佛ヲフカクタノミタテマツルベシ。」

「正因」(シャウイン)は、佛教の語。原因。

大乘法數に「正謂二中正一。中必雙照三諦具足。故名二正因一。」

【絶對的愛・絶對的他力】　絶對的愛とは、彌陀の一切衆生をかはいゝと思ふ慈悲心をいふ。この慈悲心は、惡人・凡夫であればあるほど、なほかはいゝといふのである。絶對的他力とは、唯彌陀を信ずるばかりで助かるといふ宗旨をいふ。彌陀は衆生かはいさのあまりに、五劫に思惟し、永劫に修行し、四十八願を成就して正覺の彌陀となり給うた。一切衆生は只唯これを信じさへすればよいといふのである。

【彌陀】　ミダ。阿彌陀佛。西方極樂世界の教主。梵音Amita(「無量」の義)はAmitābha(無量光)及Amitāyus(無量壽)の略。光明と壽命との無限の意義を含んでゐる。この佛ははじめ四十八願を立て、これに應ずる大行を修し、その願行に酬報して成道したので、これを報身佛とする。四十八願中に、至心に信樂(シンゲウ)して往生せんと願ふものは、乃至十念によつて必ず往生すべきを說く第十八願があり、この本願力によつて凡夫の救濟疑なしとするところに他力教又は淨土教は成立する。この佛を主とする經は無量壽經・觀無量壽經及び阿彌陀經である。これを淨土三部經といふ。

【粉骨碎身】　フンコツサイシン。骨を粉にし、身を碎く義。ほねみを惜しまないでつとめること。身心のつゞくかぎ

り盡力すること。

太平記卷七、吉野城軍の條に「數日の粉骨甲斐もなくて。」

【宗祖】　シュウソ。一宗を開いた人。祖師。

【人格】　ジンカク。人の性格。人の品格。ひとがら。

倫理學上では、人間に於て恆常的・自己意識的・自己決定(自律)的・目的意識的等の特性を具備する統一ある自由な主體をいふ。

【日蓮上人】　ニチレンシャウニン。日蓮宗の開祖。安房國東條鄉(今の小湊)の漁夫貫名(ヌキナ)重忠の第三子。十二歲清澄山に登り、道善を師として天台・眞言を學んだ。長じて西遊し、南都・北嶺に諸碩學を訪うてその奧旨を極めたが、法華經のみ末法の今時に弘通すべき妙法であつて、他は釋尊の眞意でないと覺り、この主義を以て世を救はうと決心した。建長五年(一九一三)故鄉に歸省し、清澄山に登り、四月二十八日東天に旭日を拜して南無妙法蓮華經の題目を高唱した。これを一宗開創の起源とする。爾來他宗のものを謗法の徒としてこれを折伏し、當時の天災・地變を以て官府が謗法の邪宗を信じて法華經を信じないためであると主張し、「守護國家論」「立正安國論」を作つて諫曉した。鎌倉幕府の執權北條時賴は大いに怒り、妖言を以て民衆を惑はすものとして伊豆に流した。然るに日蓮の所說に隨喜して、或はその弟子となり、或は外護(ゲゴ)の檀越(ダンヲチ)となるものが少くなかつた。文永八年(一九三一)將に龍口に斬られようとしたが、危く赦されて佐渡に流された。乃ち「開目鈔」、「觀心本尊鈔」を作つて故國の信徒に寄せ、又、十界勸請の大曼荼羅を圖顯して一宗の本尊とした。同十一年赦されて鎌倉に歸り、再び幕府に諫曉したが、容れられなかつた。そこで去つて甲斐國身延山に入り、專ら門弟の養成及び教義の闡揚に努めた。弘安五年(一九四二)病を得、十月十三日武藏國池上に入寂した。年六十一。門弟日昭・日朗等を六老僧といひ、日法・日家等を十八中老僧といふ。これらの門弟が師の著述及び書簡を輯錄したものを錄內・錄外の御書といふ。

【意氣沖天】　イキチュウテン。意氣の高くあがること。

「沖天」は、高く天にあがること。天にひゝること。

史記の滑稽傳に「此鳥不レ蜚則已、一蜚沖レ天。」

【他宗を罵倒し】　タシュウをバタウし。日蓮上人が「眞言亡國、律國賊、念佛無間、禪天魔。」と高唱して、これらの宗派をのゝしつたことをいふ。

「罵倒」(バタウ)は、はげしくのゝしること。ひどく惡口をいふこと。いたくけなすこと。

【北條氏】　ホウデウシ。北條時政より高時に至る九代。時政の子義時以後、執權として將軍を助け、天下の政權を掌握してゐた。

時政(一)—義時(二)—泰時(三)—時氏—┬經時(四)
　　└時賴(五)—時宗(六)—貞時(七)—高時(九)
　　└宗政—師時(八)

【小島の主等が云々】　高祖遺文錄卷之二十、「種々御振舞御書」の中に「佛滅後二千二百二十餘年が間、迦葉・阿難等、馬鳴・龍樹等、南岳・天台等、妙樂・傳教等だにもいまだひろめ給はぬ法華經の肝心、諸佛の眼目たる妙法蓮華經の五字、末法の始に一閻浮提にひろまらせ給ふべき瑞相に、日蓮さきがけ(魁)したり。わたうども(和黨共)二陳三陳つゞきて迦葉・阿難にも勝れ、天台・傳教にもこえよかし。わづかの小島のぬしら(主等)がをど(威嚇)さんをおぢ(恐)ては、閻魔王のせち(責)をいかんすべき、佛の御使となのりながらおく(臆)せんは、無下の人々なりと申しふくめぬ。

【壯語】　サウゴ。大言壯語などと熟して用ひる。勇壯なものがたりをすること。大げに言ふこと。

晉書に「敦果謂二錢鳳一曰、彼不レ知レ懼、而學二壯語一。此之不武、何能爲也。」

【吉水一門の奇禍】　吉水一門といへば、僧源空、卽ち法然上人の門下に屬する者をいふ。而して親鸞はその最高弟である。

初め源空、諸宗の奧義を究め、遂に淨土宗を開き、洛東吉水(今の知恩院の地)に居つて盛に專修念佛を弘めた。諸宗の僧徒これを議する者多く、文治二年、大原の勝林院に於て、南都・北嶺の僧徒と會して法門を論議した。世に大原談義といふ。元久元年、延曆寺の衆徒が專修念佛を

禁ずべしと訴へた。源空は七ケ條の起請文を書いて他意なきことを述べ、弟子八十八人連署して座主に贈り、漸く解決した。が、同二年十月興福寺の大衆等が、上人及び一門の弟子が諸宗を誹謗すると出訴し、罪科に處せられんことを請ふに至り、遂に承元元年二月を以て、朝廷は專修念佛教を禁じ、源空を土佐國に、その徒弟を越後國に流した。奇禍とはこれをいふのである。

この時の事を、前大僧正堯秀の文には、「シカルニ空聖人(法然上人をいふ)刑流ノキザミ、鸞師(親鸞をいふ)三十五歳ニシテ都ヲ出デ、越後國府ニ左遷セラレ、五年ノ居諸ヲ經、岡崎中納言範光卿ヲ以テ勅免ヲ蒙レリ。シカレドモ、ナホカシコニ化ヲホドコサンガタメニ東關ノ修行ヲ企テ、五十餘歳ニシテ一代藏ヲヒラキ、經律論釋ノ要文ヲヌキンデ、教行信證マタ諸經要文等ヲ撰集ス。總ジテ製作ヲイハバ百餘卷ニ及べリ。」と記してゐる。

「奇禍」(キクワ)は意外の禍。不慮の災難。

【北國の隅】　越後の國府。古越後の國司の廳舍のあつたところ。今中頸城郡春日村大字大場なる小丸山は上人の遺跡であると稱せられてゐる。

二十四輩順拜圖會に、左の如く記してある。

五智の南四町、大場の西、山の麓、竹の鼻に小丸山といふ所あり、聖人左遷の配處たり。後は叢林の蔭鬱え、前は深淵の沼左右にめぐり、中に山脚の狹き地面十歩に足らざる所、石碑兩基を建てたり。その銘に曰く「親鸞聖人五年之遺跡、石燈籠、延寶九年酉六月廿八日」とあり、又一基は「親鸞聖人五年遺跡、大谷本願寺奉報謝、石燈籠、貞享二乙丑六月廿八日」とあり。按ずるに、承元元年三月、宗祖三十五歳、越後の國府へ配流せられ、郡司萩原民部敏景、この山脚にいふせき藁屋をしつらひて入れ置きまゐらせたりといふ。一說に、小丸山に光源寺とて眞言宗の寺あり、即ち聖人配所の寺なりといへり。又高田の性宗寺に聖人自畫とかや、藁屋の内の委にして、傍に勅勘の裝束をかけたり。銘に「南無阿彌陀佛、於二越後配處笠島國府一畫、承元丁卯年五月六日善信。」とあり、この寺佛光寺派なり。

建永二年三月、法然房源空の師弟遠流せらる。その中に善信は

末弟におはすと雖も、その略諸人に勝れ、宗の奥旨を極めらるる旨相聞ゆるに依りて、越後の國府笠島といふ處へ被二配流一。(七條日記)

善信房洛東岡崎御坊より出駕なり、師範の御離京を聞くに堪へずとて、三時先だちて都を出でたまへり。

罪名流人藤井善信、配所北陸道越國頸城郡國府、御年三十五歳、行程十三日を經て、三月二十八日少輔年景が許に御下著云々。四月七日國分寺の謫居に移りたまふ。翌承元元年三十六歳、民部少輔年景、聖人たゞ今の謫居はあまりに狹少なりとて、國分寺の東南平岡といふ所を點じて舍屋を造り、こゝに居せしむ。國分寺と平岡との幽棲合はせて五箇年なり。去年流罪の節より右愛塞の如くにましませば、愚禿と名のりたまへり。亦御名をも親鸞と改めたまふ。(正統傳)

【若し我配所に赴かずんば云々】　本願寺第三代覺如上人の著「親鸞傳繪鈔」の中にある語。流されたのが却つて邊鄙の衆生濟度に仕合であつたといふのである。

「配所」(ハイシ・)は、罪人を配流する處。流罪にする場所。謫所。

北史に「元坦配二北州營一死二配所一。」

「群類」(グンルヰ)は、多くの生類。多くの人。

沙石集卷二の下に「眞如平等の故に、四生の群類に少しきの隔てなく。」

「化す」は、教へみちびくこと。教化すること。

【怒濤】　ドタウ。いかりくるふ波。烈しくうちよせる波。荒れたつ波。怒浪。激浪。

孟貫の詩に「江上秋風捲二怒濤一。」

【澎湃】　ハウハイ。水の漲りさかまくさま、又、その聲。

司馬相如の上林賦に「沸乎暴怒、洶涌澎湃。」

【煙波渺茫】　エンパベウバウ。水煙が立つてひろ〳〵と見える波が、はてしもなくつゞくこと。

江總の詩に「日向二煙波一長。」

朗詠に「范蠡扁舟之泊、煙波惟新。」

章莊の詩に「扶桑已在二渺茫中一。」

【胸懷】　キ・ウクヮイ。むねの中。胸中。心中。こゝろ。

「胸懷豁然」などと用ひる。

9　挿圖

親鸞聖人像　京都本願寺の藏幅より取つた。

親鸞聖人筆蹟

四日安居院法師聖覺作。

寛喜二歳仲夏下旬第五日以二彼草本一眞筆一
愚禿釋親鸞書寫

【安居院法師聖覺】　アンゴキンノホフインシャウカク。天台宗の高僧。藤原通憲の孫、澄憲の子。安居院法師と號した。法然上人大原問答の席に列し、その說に服して淨土門に入つた。文筆に達し、畫に巧であつた。嘉禎元年（一八九五）三月五日入寂。勅撰集、續千載集の作家。

「安居院」は比叡山延暦寺にある佛舍。僧徒の安居を修するところ。安居とは、僧徒が四月十五日から九十日間、籠居して業を修することをいふ。

「法印」は僧侶最高位で、僧正に相當するもの。學德の具備してゐるものを以てこれに任ずる。

【寛喜二歳】　クワンキニサイ。後堀河天皇の御代。皇紀一八九〇年。

【仲夏】　チュウカ。陰暦五月の異稱。

運歩色葉に「仲夏五月。」

【下旬】　ゲジュン。月のあと十日。二十一日より月末まで。下浣下澣。

【草本】　サウホン。草稿の本。したがき。稿本。

明月記、文暦二年三月十三日の條に「自二巳時一至二未時一炙記。此間淨意來。依レ請更與二草本廿卷一。」

一五　おもかげ

一　解題

法然上人集より法然の「一枚起請文」、正法眼藏隨聞記より道元禪師の「學道」、歎異抄より親鸞聖人の「念佛」、高祖遺文錄より日蓮上人の「土牢御書」を採錄して一課とした。

一、「一枚起請文」（イチマイキシャウモン）は、法然上人が後世の異議を豫め憂へて、入滅前二日の建暦二年（一八七二）正月二十三日、弟子勢觀房源智のために書いた遺誡文である。一枚とは、一枚の紙に書けるほどのものであり、又實際に一枚の紙に書いたからである。「起請」とは、盟を立てる意で、德川時代、男女が互に愛のかはらぬことを誓つたものをいふ。こゝは彌陀の本願にうそいつはりはないことを誓つたものである。又の名を「黑谷上人起請文」、「一枚消息」ともいふ。鎭西・西山の諸派及び眞宗の諸派に、法然の自筆と稱せられるものが幾枚もある。

二、「正法眼藏隨聞記」（シャウホフゲンザウズキモンキ）は六卷。永平道元禪師が隨時にその嗣懐奘禪師に親誨した示教を、懐奘が自ら筆記したものである。和文で綴られ、語も亦平易だから、參學者の爲に好箇の指南書である。久しく寫本として傳はつてゐたが、寶暦八年（二四一八）、面山和尙がこれに序して重刊した。面山和尙は天和三年（二三四三）に生れ、明和六年（二四二九）に死んだが、眼藏學者として名高く、正法眼藏に關する數種の著述がある。隨聞記の校訂については、和尙自身の序文に於て見る如く、晩年十餘年を費して、古寫本によつて逐次刊行したものであるといふ。面山和尙はその記の問難を評して、

この記の問難は、一々理極せり。祖師無師知の自在にあらずんば容易に答釋なりがたかるべし。實に祖師は日本の無上尊なり。（重刊文凡例）

といつてゐる。

三、「歎異鈔」（タンイセウ）は、唯圓房が親鸞上人の示教を記錄し、且これを解說したもの。題の意は、その緒言に、

竊廻二思案一、粗勘二古今一、歎二異先師口傳之眞信一、思レ有二後學相續之疑惑一。幸不レ依二有緣知識一者、爭得レ入二易行一門一哉。全以二自見之覺悟一、莫レ亂二他力之宗旨一。仍故親鸞上人御物語之趣、所レ留二耳底一、聊註レ之。偏爲レ散二同心行者之不審一也。云々。

とあるによる。如何なる宗教にも學問にも藝事にもあるが如く、或大家又は偉人が出ると、革新に統一されるが、その人が死んで中心と尊敬とを失ふと、弟子たちは自流を立て、或は自己の淺見に解釋し得るところのみを以て、これ流祖の主眼なり

と高唱するものが出來、既に道そのものを忘れて、お互に自說を主張して擠排を事とするに至る。隨つてその說くところは大同小異ながら、小異に力こぶを入れ、段々に流祖の本旨にもとるに至る。若し流祖の本旨を眞に理解し、小異分裂を憂へ、流祖の本旨に歸らうとする熱情のある人が出ると、卽ち異を歎するに至るであらう。歎異鈔もこのやうな動機で書かれてゐる。始め四十條は親鸞上人の御物語を記して正準を示したもの、後の八條は正異を辨ずる作者の解說である。

四、「高祖遺文錄」（カウソヰブンロク）は三十卷。日蓮の遺文を輯錄したもの。日蓮上人の遺文は、錄內・錄外といひ、いづれも開版せられて世上に流布してゐる。しかし秩序なく蒐集したもので、誤謬も多かつたが、尾張の僧日明がこれが輯錄校訂に志し、稿成るもの三千八百紙、分つて五十卷とし、新撰祖書と名づけた。後年相模の小川孝榮がその稿を得て世に版行するに至つた。これらは皆著作年序によつて輯錄してある。後、活版に附して發行された。

錄中のおもなものは、守護國家論・十法界明因果鈔・唱法華題目鈔・立正安國論・教機時國鈔・聖愚問答鈔・生死一大事血脈鈔・開目鈔・如來滅後五五百歲始觀心本尊鈔・如說修行鈔・當體義鈔・撰時鈔・報恩鈔・本尊問答鈔・四信五品鈔・本門戒體鈔・諫曉八幡鈔等である。

2　作者

法然　ホフネン。

僧名は源空、法然房といふ。童名は勢至丸。父は美作國久米の押領使なる漆時國（今は漆間といふ）。母は秦氏。長承三年（一七九三）四月七日久米南條郡（今は久米郡）の稻岡に生れた。九歲の時父は伯耆權守源長明の子定明のために、夜襲されて殺された。家人の驚惶してゐる際に、少年勢至丸は小弓を執つて敵の眉間に一矢を報いた。定明はその疵によつて罪の發覺を恐れ、終生その身を隱したといふことである。人々はこれによつて源空を小箭兒と呼んだ。父の橫死は永治元年（一八〇一）のことである。源空は、父の遺志によつて出家し、菩提寺（今は那岐山の麓）の僧觀覺の弟子となつた。久安三年（一八〇七）二月十五日十五歲、師に伴なはれて叡山に登り、源光の室に入り、同年四月八日、功德院の皇圓の室に轉じ、久安六年九月十二日十八歲、黑谷の叡空に從ひ、初めて法然房源空と稱した。源空は源光・叡空の二字をとつたのである。既にして天台の奧義を皇圓に學び、密乘・大乘律を叡空にうけた。また三藏の聖敎を飜譯し、諸宗に亙り、一切經を讀破すること五度に及んだ。二十四歲の時からは諸國修行に出た。かく修行によつて道を求めたが、どうしても得られなかつた。ところが、ふと源信（惠心僧都）の「往生要集」を見て淨土敎に興味をもち、更に善導和尙の「觀無量壽經疏」を見て、始めて彌陀本願の玄義に悟入し、歡喜踊躍した。

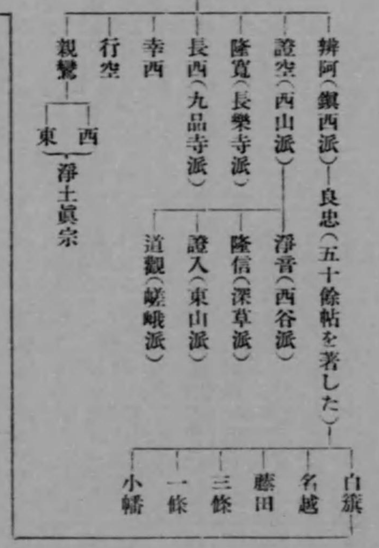
承安五年（一八三五）43）三月洛東吉水に住み、念佛易行を弘通し、上下の信仰を得た。建久九年（一八五八）66）關白九條兼實（玉葉の作者慈圓の兄、親鸞の妻玉日の父）のために「選擇本願念佛集」

をかいた。これよりさき文治二年（一八四六）の秋、洛北大原に於て天台その他の諸宗の碩學に促されて聖道・淨土二門に就いて論戰を試みたが、博學と善辯とを以て彼等を壓倒した。既にして南都・北嶺の嫉妬をうけたが、たま〳〵後宮の侍女と念佛僧とのあらぬ噂があつたので、彼等はこれを口實として讒訴した。安樂房・住蓮房の二弟子は賀茂川原に於て斬首に處せられ、その罪は源空に及び、念佛宗を禁じ、源空を讚岐に流した。時に承元元年（一八六七）二月である。その年十二月早くも恩赦されたけれども、なほ入京せず、暫く攝津の勝尾寺に留つた。建曆元年（一八七一）79）十一月十七日再び京に歸り、洛東大谷に住んだ。翌二年正月二月から病んで、廿五日入寂した、年八十。諡號は左の如くである。

東山天皇　元祿十年五月十八日　圓光大師
中御門天皇　寶永八年正月十八日　東漸大師（五百年忌）
桃園天皇　寶曆十一年正月十八日　慧成大師（五百五十年忌）
光格天皇　文化八年正月十八日　弘覺大師（六百年忌）
孝明天皇　萬延二年正月十八日　慈敎大師（六百五十年忌）
明治天皇　明治四十四年　明照大師

現存する淨土宗は鎭西派と西山派とである。鎭西派は知恩院を總本山とし、增上寺・京都黑谷金戒光明寺・百萬遍知恩寺を大本山とする。西山派は山城の粟生光明寺を總本山とし、東山永觀堂禪林寺・誓願寺を大本山とする。

○門派は左の如くである。



○淨土宗の大綱は喜導の「觀無量壽經疏」と「選擇本願念佛集」とを主な宗典とし、一切經の內では「無量壽經」「觀無量壽經」「阿彌陀經」を三部經とし、「往生論」を加へ、正依三經一論として聖典とする。佛敎を聖道門と淨土門とに分け、一つは難行道であり、自力であるが、他は易行道であり、他力である。吾々は到底自力によつて悟りを得る事はできない。吾々の願はすべて阿彌陀如來が既に代表者として成就して下さつてゐる。吾々は阿彌陀如來におすがりしてその成就されてゐる願の德を授けてもらふより外に方法がない。そこで一生懸命に阿彌陀樣を信仰すればよいとなる。つまり悟りそのものの內容には觸れないで、その內容は既に完成してゐるから、それを授けてもらひさへすればよいとなる。

阿彌陀如來は梵語にて Amitābha, Amitāyus といひ、大乘佛敎

に於て重要な佛である。その性質から多くの名がつけられてゐるが、時間的には無量壽であり、空間的には無量光であり、功德の上では無量德である。阿彌陀如來は因地にあつて、法藏比丘であつたとき、世自在王佛の所で四十八願を立ててゐられる。それは二百十億の諸佛の國土から選擇攝取した大願であるので、選擇本願ともいふ。四十八の名に就いてはいろ〳〵の說があるが、望西樓了慧の說によると、次の通りである。

(1) 無三惡趣願　(2) 不更惡趣願　(3) 悉皆金色願
(4) 無有好醜願　(5) 宿命智通願　(6) 天眼智通願
(7) 天耳智通願　(8) 他心智通願　(9) 神境智通願
(10) 速得滿盡願　(11) 住正定聚願　(12) 光明無量願
(13) 壽命無量願　(14) 聲聞無數願　(15) 眷屬長壽願
(16) 無諸不善願　(17) 諸佛稱揚願　(18) 念佛往生願
(19) 來迎引接願　(20) 係念定生願　(21) 三十二相願
(22) 必至補處願　(23) 供養諸佛願　(24) 供具如意願
(25) 說一切智願　(26) 那羅延身願　(27) 所須嚴淨願
(28) 見道場樹願　(29) 得辯才智願　(30) 智辯無窮願
(31) 國土清淨願　(32) 國土嚴飾願　(33) 觸光柔軟願
(34) 聞名得忍願　(35) 女人往生願　(36) 常修梵行願
(37) 人夫致敬願　(38) 衣服隨念願　(39) 受樂無染願
(40) 見諸佛土願　(41) 諸根具足願　(42) 住定供佛願
(43) 生尊貴家願　(44) 具足德本願　(45) 住定見佛願
(46) 墮意開法願　(47) 得不退轉願　(48) 得三法忍願

この内の(18)は念佛往生願であるから、行住坐臥に彌陀の名號を唱へてをりさへすれば、凡夫でも極樂に往生することができると信じるのである。それ故、一切の雜行雜修を排して、專ら正行に力めねばならぬ。正行は五つあつて

(1) 禮拜門
(2) 讚嘆門
(3) 作願門　彼の國土に生れようと願ふ。
(4) 觀察門　知的作業。
(5) 廻向門　功德を施して、それによつて成佛をはかる。

と分れてゐるが、その内彌陀の名號を唱へる(2)讚嘆門を主とし、他は補助にする。又至誠心（眞實に淨土を願ふ心）・深心（深く淨土を願ふ心）・廻向發願心（所修の功德を廻向して淨土往生を願ふ心）を三心といひ、別安心ともいひ、厭欣心を總安心といふ。これらの心行の修行を完全にするために、慇重（佛を尊重する）・無餘（餘念なきこと）・無間（餘念をさしはさまぬこと）・長時（信仰を中止しないこと）の四修を敎へる。又無餘・長時・無間・恭敬を四修といふこともある。而してこれらのすべてを簡約したものが一枚起請文である。

選擇本願念佛集は前述の如く、建久九年關白兼實の爲に書いたものであつて、淨土宗根本の要典となつてゐる。源空は善惠房（證空）・安樂房・直觀房等の弟子を助手として、三部經を始め弘く諸師の註釋などから材料をとつて選擇本願念佛の要文を記したのである。その内容は、

(1) 聖淨二門　(2) 正雜二行　(3) 念佛本願
(4) 三輩念佛　(5) 念佛利益　(6) 持留念佛
(7) 光明攝取　(8) 具足三心　(9) 行用四種
(10) 化佛讚歎　(11) 讚歎念佛　(12) 付屬阿難
(13) 念佛多喜　(14) 證試念佛　(15) 諸佛護念
(16) 付囑身子

の十六章からなつてゐる。

京都の廬山寺には七百年前の「草稿本」が國寶として殘つてゐて、卷題に「選擇本願念佛集、南無阿彌陀佛、往生之業、念佛爲レ先。」とあるのは、源空の自筆である。大和の往生院にも古寫本があつて、奥書に「元久元年十一月廿八日書寫了、願以二此功德一、往二生一佛土一而已。」とある。元久元年は源空の歿する建暦二年よりも八年前であり、建久九年より六年後である。版本で一番古いものは源空の入寂する前年のものであるが、反駁者が多い。そこで、嘉祿四年（一八八七）定照は「彈選擇集」を出し、朝廷に訴へて流行を禁じ、版木を比叡山に燒きすてた。次には延應元年（一八九九）建暦版より廿八年後）版がある。この版本は今はたゞ一部だけ京都の法然院に殘つてゐる。大正十一年京都帝國大學の司書にして知恩院山内信重院の住職たりし藤堂祐範は「選擇集大觀」によつて、あらゆる古寫本と古刻本との異同考勘を試みた。

道元　ダウゲン。

我が國曹洞宗の開祖。希玄又は佛法房と號した。久我通親の子。八歲母を喪ひ、世の無常を感じて出家し、比叡山に登つて天台の敎觀を學んだが、後榮西及び明全に就いて禪を學んだ。貞應二年（一八八三）明全に從つて宋に渡り、天童山の如淨に隨侍して印可を得た。安貞元年（一八八七）歸朝して京都の深草に庵居し、天福元年（一八九三）宇治の興聖寺の第一世となつた。後寛元二年（一九〇四）越前永平寺の開山となり、四來の參徒が常に萬指に盈ちた。寶治元年（一九〇七）執權北條時頼に招かれて鎌倉に下り、菩薩戒を時頼に授けた。後嵯峨上皇はその德風を仰がせられ、紫衣並に佛法禪師の號を賜つた。建長五年（一九一三）入寂。年五十四。嘉永七年（二五一四）佛性傳東國師と諡し、明治十二年、更に承陽大師を加諡された。正法眼藏・永平廣錄・永平清規・學道用心集等の著作がある。

懷奘　エジャウ

俗姓藤原氏。九條相國爲通の曾孫。中納言爲實の孫。京都の人。建久九年（一八五八）に生れた。號は孤雲。幼にして横川の圓能の侍童となり、二十一歲で具足戒を受け、止觀・法相・俱舍・成實・三論に精進した。遂に算沙の蟲を屑しとせず、錫を曳いて遊行し、先づ多武峯の覺晏師に就いて禪を學んだ。たま〳〵道元禪師が宋より歸朝して建仁寺に寓すと聞き、往いて所解を呈したが、許されず、再び諸方に遊歷した。文暦元年（一八九四）冬、重ねて道元禪師に參じ、誠意歸仰した。翌嘉禎元年（一八九五）菩薩戒を受けた。かくて禪師に參窮して、終に桶底を脫し、印可を蒙つた。爾來常隨侍者として禪師の左右を離れず、永平開法の際、全力をつくして禪師の法業を助けた。建長五年（一九一三）禪師が院を退か

れたとき、命を受けて席を補し、永平寺第二代となつた。文永四年(一九二七)に東堂に退隱し、席を徹通价公に讓つた。弘安三年(一九四〇)八月二十四日病を以て入寂した。年八十三、臘六十三。法嗣に義价・寂圓・義演・義準・佛僧・道嚴の六人を出した。

道元と懐奘との關係及びその筆錄の年代については、面山和尙の重刊文、凡例の末尾に、

この記、前半には跋語なし。古寫本には跋語あれども、作者の名をのせず、又年號なし。然れども「先師奘和尙」とあれば、徹通和尙はいづれ奘師の法嗣ならん。嘉禎年中の記錄と跋にあれば、祖師の興聖寺に御在住の中なり。ゆゑに越山の事見えず。考ふるに、奘師は文曆甲午(一八九四)年三十七にて始めて祖師に參ぜらる。この時祖師は三十五歲なり。三年ありて嘉禎二年丙申の冬秉拂せらる。嘉禎は三年の丁酉に改曆す。嘉禎年中の記錄とあれば、隨侍より四年の間ほどの記錄なり。奘師は祖師より二年の年上なり。後に光明藏三昧に遞せられしを拜讀すれば、顯密の學も祖師に劣るまじ。但し佛祖正傳の訣別分明ならぬゆゑに、祖師に依賴せらるゝなるべし。(後略)

と見えてゐる。

親鸞　シンラン。

前課「愚禿親鸞」の釋義の中に見えてゐる。

唯圓　ユキエン。

この人のことは、しかと分らぬが、歎異鈔の書きぶりによつて見れば、親鸞の直弟子で、東國に住んでゐたものであることがわかる。傳說的には「遺德法輪集」(宗書)「巡拜圖會」(了眞)「諸寺異說彈妄」(先啓)「大谷遺跡錄」(同)「最須敬重繪詞」などに出てゐるが、異論紛々である。たゞ共通するところは、もと常陸國茨城郡河和田の人で、親鸞の巡錫中に弟子となり、後京都にのぼり、大和に弘通し、再び常陸に歸つた。法燈をつぐほどではなかつたけれども、學・德・辯共にすぐれてゐて、親鸞歿後の重鎭であつたことが想像される。

唯圓といふ人がもう一人あつた。それは鳥喰の唯圓といひ、日野左衞門の傳說が附會されてゐる。倉田百三氏の著「出家とその弟子」の唯圓はこの方であるが、歎異鈔にある唯圓のことも書中に採つてあるから、つまり二人の複合と見るべきである。

日蓮　ニチレン。

前課「愚禿親鸞」の釋義の中に見えてゐる。

3 編纂の用意

平安末期に於ける佛教界の狀況は腐敗墮落の極に達し、圓頂緇衣の僧侶も救世濟民の務を忘れた。かゝる際、蹶然起つて熱烈な信仰を說き、淸淨な法の世界を建立しようと努力したものが鎌倉時代の新興佛教で、法然・親鸞・榮西・道元・日蓮・一遍等はその代表的存在である。本課はこの期に於ける宗教文學を研究の對象としたもので

ある。常に知的であるが故に枯淡・乾燥となりがちな宗教文書の中に於て、やみ難い感じによつて自己の環境や感慨をのべる文章、苦惱の多い人生の慰安者たらんと責任を感ずる愛から成つてゐる文書は、御文・法語・語錄・御書等である。我等はこれらの中に、先覺者の教義の普偏化を見ると共に、靈魂の苦惱・鬪爭・慈愛・祈の聲等を聞き、そこに御文・法語・語錄・御書の本質を見出すのである。卽ち念佛の他力主義に對する日蓮の自力主義、さては道元の眞理至上主義等の主張を味はうて見ようとするのである。

4 要旨

法然・道元・親鸞・日蓮は、何れも一宗の祖師若しくは開山であり、日本有數の大宗教家として、當代及びその後の社會民衆の心靈界に偉大な光芒を放つた人々である。これ等が直接に說いた文字を講讀することによつて、それ〴〵特色ある宗旨の一斑を理會せしめ、また大導師としてのそれ〴〵の面目及び人格的おもかげをも仰がしめようとするのである。

5 概說

一枚起請文。法然が說いた淨土宗の究竟義は、この一枚起請文によつて窺はれる。就中「たゞ往生極樂のためには、南無阿彌陀佛と申せば疑なく往生するぞと思ひとりて申す外には、別の子細候はず。」といふ文言に、一宗の面目を示してゐる。

學道。道元禪師のこの教示は、「身心を放下して一向に佛法に入るべし。」といひ、「百尺竿頭一歩を進めよ。」と說くところに、禪宗の第一義說が窺はれる。

念佛。親鸞の言葉として、この一篇の主旨は正に法然の一枚起請文を承けるものであつて、殊に「たゞ念佛して彌陀に助けられまゐらすべし。」と引いたのは、卽ち法然の說くところである。また、この一篇で見のがし難い言葉は、「いづれの行も及び難き身なれば、とても地獄は一定住處ぞかし。」の一句である。

土牢御書。これは日蓮の書牘であるが、短文の裡に克く日蓮が一方に於て溫い人情の持主であり、他方に於て法華經に對する信仰の無類に篤かつたことを語つてゐ

る。

6　取扱上の注意

▲この課に對しては、各生徒をして、自家の宗旨に執することなく、何れもこれを日本の佛教家として考察し、その所說を傾聽する所あらしめるやうに先づ導きたい。

▲各篇とも材料が材料であるので、たゞ辭句の講讀だけで通つてしまつては、一向有りがたくない教授となつてしまふであらう。その弊に陷らぬためには、教授者たるものは先づこの各篇の眞精神を頭で理會するに止らず、腹で胸で理會しておかなければなるまい。

▲「一枚起請文」といふ「起請」の意義は、本文としては「この外に奧深きことを存ぜば、二尊の御憐にはづれ、本願にもれ候ふべし。」といふ文句に表されてゐる。殊に「二尊の御憐に……本願にもれ候ふべし。」といふのが、普通の起請文にいはゆる罰文である。手つ取り早く言へば、「むづかしい理窟などは絕對に言つてはならぬぞ。言へば罰が當る。」の意である。結局、南無阿彌陀佛と稱へさへすればよいといふことを、强く固く教へたものである。

▲「學道」にいはゆる「身心を放下」し「百尺竿頭一歩を進める」境地は、前課にいはゆる「一たび懸崖に手を撒して絕後に蘇る」境地である。

▲「念佛」は四篇のうちで最も長いが、よくも巧に法然を祖述したものである。說き方はおだやかなやうであつても、實に徹底してゐると思はれる。殊に、概說の項にも摘錄したが、「とても地獄は一定住處ぞかし。」の一語は、例の日蓮の「念佛無間」の一格言を持つて來ても殆ど施すに所はあるまいと思はれるほど徹底してゐる。日蓮は日蓮で偉いが、親鸞は親鸞でやはり偉い宗教家であつた。

▲「土牢御書」は、「土籠御書」と遺文集の類には記してあるのが常である。又別に「與二日朗一書」とも言ふ。この一通の書牘は數多い日蓮の書牘の中でも殊によく引用され、讀誦されるものである。それは卽ち日蓮の情的方面と信仰的意志的方面とを短文の中に最もよく語つてゐる故である。そして、何れかと言へば、前後の辭令から見て、寧ろその情的方面が殊に表現されてゐるのである。

7　設　問

1　各篇の文で、最も重要な辭句を、それ〴〵指摘して見よ。

2　四篇が說くところで異なつてゐるのは、どういふ點であらうか。

3　四篇に說かれてゐることで、各〻に共通してゐるところがあるか。

8　釋　義

一枚起請文　　法　然

【沙汰し申さる】　論議し主張せられること。「沙汰」(サタ)は、(一)處置し定めること。(二)理非を斷すること。(三)官府の指令。(四)報知。(五)世間の評判。こゝは(二)の意。

【觀念の念にもあらず】　「念佛の念は觀念の念にもあらず。」の略。「心を一にして精神狀態を高め、以て宇宙の本體觀念をつかまう、そこに信の心を持たうとするやうなものではない。」といふ意。佛教では戒(カイ)・定(チヤウ)・慧(エ)の三學といふことがある。戒(Sila)とは惡を止めて善を修めることである。定(Samadhi)とは心の散亂を防ぐことである。慧(Srajna)とは迷を去つて理を悟ることである。觀はこの定と慧との複合したものである。隨つて心を靜かにして一境に專注することを觀念といふ。精神そのものを集中統一するのが觀であり、然る後普遍の理をさとらうとするのが念である。

「觀念」とよく似た語に「止觀」といふ語がある。止とは、心を一點に集中して物の普遍性を見ることをいひ、觀とは、ものをよく觀て、その特殊性をさとることをいふ。

【又學問をして念の心を悟りて申す念佛にもあらず】　知識から來る信念でもなくて、體驗から得る信仰である。このあたりの文脈は、主語を置かないで、念佛とは如何なるものかと人々の心が既にその方に向つてゐるものとして、「それは……」のやうな口調になつてゐる。

【往生極樂】　ワウジャウゴクラク。「往二生極樂一」の意。「往生」とは、この世に死んで、他の世に往つて生れるこ

とをいふのであるが、普通には阿彌陀佛の淨土に生れることをいふ。未來佛である彌勒菩薩の兜率天に生れるのを上生といふに對し、現在佛たる阿彌陀佛の極樂に生れるのを往生といふ。

「極樂」は阿彌陀佛の淨土、卽ち西方淨土。梵語 Sukhavitr の譯で、一に安養國・安樂國ともいふ。その土の相狀は、淨土の三部經及び世親の淨土論等に詳說されてゐる。これによれば、阿彌陀佛は成道のとき、これより西方十萬億土を過ぎたところに佛土を構へた。その土は淸淨で、氣候が調和し、衣服・飲食は意に隨つて至り、佛は常に現在して說法してゐる。諸〻の快樂があるのみで、一切の苦難あることなく、その土の佛及び聖衆は壽命無量である。卽ち人類の理想國であつて、大乘佛敎の興起と共に、佛敎徒の殆どすべてに通じて未來の生處と思念されてゐる。

【南無阿彌陀佛】「南無」は梵語 Namah, Namo. 歸命・敬禮・歸禮・救我・度我などと譯す。これらは衆生がひとへに佛を信ずるといふ意、又は佛が我々を救ふといふ意である。隨つて「南無阿彌陀佛」は、衆生がひとへに阿彌陀佛を念じて、その力にすがる意をあらはす語である、卽ち念佛である。阿彌陀佛のことは、前課「愚禿親鸞」の釋義中、「彌陀」の條に見えてゐる。

【思ひとりて】 さう信じて。さう思つて。

【申す】 マウす。念佛を申す。

【別の子細候はず】 別にかはつた、むづかしいことなどはない、別に種などはない、などの意。

「子細」は仔細とも書く。(一)こまかなこと。くはしいこと。綿密。(二)くはしい事情。ことがら。いはれ。(三)かれこれといひたてる程の事情。差支のことがら。こゝは(三)の意。

平治物語、源氏勢汰の條に「平氏の一類を滅さんこと、何の仔細かあるべき。」

【三心】 至誠心（眞實に淨土を願ふ心）・深心（深く淨土を願ふ心）及び廻向發願心（所修の功德を廻向して淨土往生を願ふ心）をいふ。

【四修】 長時修（長時にわたつて信仰を中止しないこと）・慇重修（佛を恭敬すること）・無餘修（餘念なく信仰すること）及び無間修（餘念をさしはさまないで、一途に信仰すること）をいふ。

【申すことの候は】……と申すことのあるのは。

【決定】 ケツヂャウ。事の定つて動くことなきをいふ。

【二尊】 阿彌陀佛と釋迦牟尼佛。

「釋迦牟尼佛」は佛敎の敎祖。孔子・基督と共に世界の三聖（ソクラテスを加へては四聖）と稱せられる。又釋迦牟尼如來・釋迦牟尼世尊とも尊稱し、略して釋尊とも、世尊ともいふ。釋迦（Sakya）は種族の名で、能仁と譯し、牟尼（Muni）は寂默又は僊人と譯する。卽ち釋迦種族から出た聖人の義。西紀前五六五年（但し異說もある）四月八日、中印度迦毘羅城主淨飯王（シャウボンワウ）の皇太子悉達太子として降誕。幼時婆羅門の聖典を學び、武藝を修めたが、人世の生・老・病・死の四苦を感じて出家度生の念を起し、二十九歲の或夜、竊に城を遁れて出家した。かくて苦行林の婆迦婆（バカバ）仙、王舍城外の阿藍迦羅摩（アランカラマ）仙及び優陀羅（ウッダラ）仙の許に至つて出塵の要道を求めたが、遂に宇宙の大眞理を徹見するには寧ろ無師獨悟に若くはないことを覺り、乃ち尼連禪河（ニレンゼンカ）を渡り、優婁頻羅（ウルビンラ）村の樹林に入つて苦行すること六年、三十五歲の二月八日曉の星を見て豁然として大悟し、我と大地有情と同時成道の確信を得て、三界の大導師となつた。これより愈〻衆生濟度に向つて精進し、先づ鹿野苑（ロクヤヲン）に憍陳如（ケウヂンニョ）等の五比丘を度したのを始とし、摩揭陀・迦毘羅・舍衞・王舍等の都邑に於て說法敎化に努め、最後に拘尸（クシナ）城の娑羅樹林の間に於て須跋陀羅（シュバッダラ）を度し、八十四歲の二月十五日に入滅した。釋尊一代四十五年間の說法を古來判類して、華嚴・阿含・方等・般若・法華涅槃の五時敎とする。弟子が甚だ多いうちに、舍利弗・目連等の十人が最も顯れた。これを十大弟子と稱する。

【本願】 ホングヮン。阿彌陀佛の四十八願中の第十八願なる念佛往生願。前の作者「法然」の條の「四十八願」參照。

【一代の法】 釋迦が如來成道から滅度に至るまで、一代の間に說かれた敎法。

【學すとも】 ガクすとも。學ぶとも。

【一文不知の愚鈍の身】 無學文盲で、のろまな身。一といふ文字さへ知らぬ愚かな身。

「愚鈍」（グドン）は、おろかにしてにぶいこと。のろまばか。

元結の詩に「天下昔無レ事。僻居養二愚鈍一。」

狂言、どこんさうに「この人、ぐどん第一の人にてあつた。」

【尼入道】 アマニフダウ。(一)尼の入道。(二)尼と入道。こゝ

は(一)の意であらう。

【智者の振舞をせずして】「かしこぶらないで」といふほどの意。「して」の「し」は「候」だらうといふ説がある。

【一向に】　イッカウに。ひたすらに。いちづに。

「一向」とは、意を一處にむけて、餘念のないこと。心を一事に集注して散亂させないこと。

學　道

道元述
懷奘受

【示して云く】「禪師(道元)教示して曰く」の意。正法眼藏隨聞記には、「示して云く」『一夜示して云く』『一日示して云く』『亦云く』などの語で書きだしてある。

【學道の人】　ガクダウのヒト。學人(ガクニン)、「學佛法の漢」に同じ。

「學」は戒・定・慧の三つを學習すること。「道」は能通の義で、次の三つの意味がある。

一、善惡の二業を道と名づけ、所至所趣の處を道といふ。

二、無漏道。七覺・八正等の法は、能く行人を通じて涅槃に至らしめるから、これを道と名づける。又行體が虛融無礙であるとよく通ずる、故にこれを道と名づける。

三、涅槃の體一切の障礙を排除して無礙自由であるから、道と名づける。

されば、正法眼藏隨聞記にいふ「學道の人」とは、「參禪修道の人、或は佛道修行の人」などいふ意味に解してよい。

【身心を放下して】　身も心もうちやつて。身をも心をも顧みないで。

「放下」(ハウゲ)は、なげおろすこと。すておくこと。うちやること。

徒然草に「直に萬事を放下して、道に向ふ時は、さはりなく所作なくて、心身長く靜かなり。」

【古人云く「百尺竿頭如何んか歩を進めん」と】　會元卷の四、長沙景岑の章に「師、僧に擧示して曰く『百尺竿頭に坐する底の人、しかく得入すと雖も、未だ眞と爲さず、百尺竿頭須らく歩を進むべし、十方世界是れ全身。』と。僧曰く『百尺竿頭如何か歩を進めん。』沙曰く『朗州の山、澧州の水。』僧曰く『不會』。沙曰く『四海五湖王化の裏。』」とある。

傳燈錄に、招賢大師示二偈一曰、百丈竿頭不レ動人、

雖モ然得入ニ未レ爲レ眞。百丈竿頭須レ進レ歩、十方世界是レ全身、僧問、只如ニ百丈竿頭一如何進レ歩、師云、朗州山澧州水。

(傳燈錄には百丈とあるが、秉燭談はこの偈を引いて、百尺に作り、人の字を身の字につくる)

「百尺竿頭」は昇りつめた向上の絕頂であつて、修行の結果到達した悟の境界である。「進ニ一歩一」はその悟境に坐著せずして、更に上位の悟境に達すべく工夫を加へて向上することをいふ。

「如何んか」は、悟の境界から更に上位の悟境に進むべき理由を問ふ意味である。

【しかあれば】「如何んか歩を進めん。」と理由を問ふ境界をさす。

【百尺の竿頭に上りて足をはなたば死ぬべしと思うて】

「足をはなたば死ぬべし」と思ふ百尺の竿頭は「我」を離脫し得ぬ悟の世界である。「我が身のために」『己が惱みの救はれんがために』『永遠の安樂を得んがために」これらは尙我欲・名利の心に根ざしたものである。若し魂の救ひ、永遠の幸福が究竟の目的であるならば、佛法は一の手段たるに止まつて、最高の値ではない。

【つよく取附く心】　その境致に執着する心。

【よもあしからじと思ひ切つて身命を放下するやうに】

「よもあしからじと思ひ切る」ところに悟を見出し、「身命を放下する」ところに「我」と捨離して、佛道に身心を投げすてる姿が見える。これが佛の眞理に身を投げかけたことである。

【度世の業】　ドセのゲフ。世間濟度のしごと。これぞ佛道修業者の最高位の業である。

【一身の活計】　イッシンのクッケイ。一身のくらし。身すぎのわさ。下位の業である。

【思ひすつべきなり】　佛法修行者たるものは我欲・名利の心から利他・度世(悟道得法)の業に至るまで悉くこれを放下して、只管に修行すべきことを要求してゐる。かくて道元は、學道の目的は眞理の要求であり、「佛法のための佛法修行」であるとした。

【それを捨てさらんほどは】　度世の業より一身の活計に至

るまでの一切を思ひ捨てない間は。身心を放下してしまはない間は。

【いかに頭燃(ヅネン)を拂うて云々】　いかに頭上に燃えてゐる火を拂ひのけ、心頭を滅却して佛道を修行するやうであつても。

「やうなりとも」の一句は、眞にその境地に達してゐないことをあらはしてゐる。

【たゞ思ひきつて身心共に放下すべきなり】　これぞ學道の要目で、一篇の結語である。

參考

◎本課は道元の修行方法と目的とを暗示するものである。正法眼藏隨聞記中には、同一思想を時に從ひ處に應じて說いてゐるものが各所に散見する。次にその一二を引用しよう。

示して云く、人は思ひ切つて命をも棄て、身肉手足をも截つことは中々せらるゝなり。然あれば、世間の事を思ふに、名利執心の爲にも多くかくの如く思ひ切るなり。只依り來る時に、事に觸れ物に隨つて心品を調ふること難きなり。學者身命を捨つると思うて且くおししづめて、云ふべきことをも、修すべきことをも、道理に順ずるか順ぜざるかを案じて、道理に順ぜば行ひ、若しくは行じもすべきなり。(同書第一卷)

× ×

示して云く、學道の人は、吾我の爲に佛法を學することなかれ、只佛法の爲に佛法を學すべきなり。その故實は我が身心を一物ものこさず放下して佛法の大海に廻向すべきなり。その後は一切の是非管することなく、我が心を存することなく、なし難く忍び難きことなりとも、佛法の爲につかはれてこれをなすべし。我が心に強ひてなしたきことなりとも、佛法の道理なるべからざる事は放捨すべきなり――下略――

(同書第五卷)

◎なほ、道元の人格と思想とを最もよく知らんとするためには、和辻哲郎氏著「日本精神史研究」中「沙門道元」を一讀せねばならぬ。その內容を概觀するため、次に目次を示さう。

一、序言
二、道元の修行時代
三、說法開始
四、修行の寸法と目的(本課はこゝに多くの示唆を與へられる)
五、親鸞の慈悲と道元の慈悲
六、道德への關心

七、社會問題との關係
八、藝術への非難
九、道元の「眞理」

(イ)禮拜得隨　(ロ)佛性　(ハ)道得　(ニ)葛藤

念佛

親鸞述
唯圓受

○本課に取つたところは第二條であつて、東國の人々がはる〳〵京都に上つて親鸞から直接に念佛の眞諦を聞かうとした時の親鸞の答である。第一に遙々の道を辿つてわざ〳〵門倡たちが入京してきたことの挨拶をなされ、第二に念佛には奧義のないことをいひ、第三に念佛無間を否定し、第四に往生の道は念佛のみであることを繰返し、第五に誠實な自覺をよびおこしたものである。建長五年日蓮が日蓮宗を立てて、念佛無間以下他宗攻擊をしたのは親鸞在世中である。新しい親鸞宗を信仰した人は傳統を捨て得るだけの流動性をもつてをり、しかも今の信仰があまりに單純すぎるところに、足もとから日蓮が立つて念佛無間とやつたので、彼等は再び動搖し、且つ自己の信仰方法の內容が如何にも貧弱なのに不安を感じ、到底日蓮宗に對抗ができないと考へたのである。そこで念佛にはもつと深みがあるのであらう。親鸞にきいて見ようと遙々上洛を思ひ立つたのである。唯圓房もその內の一人であつたと考へられるが、よく親鸞からきいて見ると、なるほどと合點の行つたところがあつたのであらう。親鸞歿後に於ても、そのやうな不安が同行中にあるので、曾て自分がその疑をもつて親鸞を訪ねたとき、親鸞の話したことが、再び生きて思ひ出されるのである。

【身命を願みずして】　法華の壽量品に「一心欲レ見レ佛、不ミ自惜二身命一」

【尋ね來らしめ給ふ御志】　尋ねておいでなされた御志。

【存知し】　知つて。心得て。承知して。

平家物語卷一、殿下乘合の條に「既に十二三にならんずる者が、今は禮義存知してこそふるまふべきに、かやうの尾籠を現じて。」

【法文】　ホフモン。佛法を說いた文句。佛法を記した文章、卽ち經・論・釋など。

源氏物語、手習の卷に「法華經は更なり、異法文なども、いと多く讀みたまふ。」

同、橋姬の卷に「尊きわざをせさせ給ひつゝ法文などをよみ習ひたまへば。」

【心にくゝ思し召しておはしましてはんべらんには】　たのもしく、おくゆかしく思し召しておいでになりました次第でありますならば。

「心にくし」とは、何となくゆかしく頼もしいことをいふ。憎いといふのは一つの抵抗感である。「かはいさ餘つて憎さが百倍。」といふのも、この心理に外ならぬ。憎さから抵抗だけを引き出すと、反對心理がはたらいて、たのもしくゆかしくなる。

宇津保物語、樓上、下に「いと心あてに、けはひなども、式部卿の君よりも心にくゝ、はづかしげにものし給へり。」

「はんべらんは」は「侍らんは」の撥音便。

【南都】　ナント。奈良。こゝは奈良の東大寺・興福寺などをいふ。

「東大寺」は華嚴宗の大本山。奈良市雜司町にある。南都七大寺の隨一で、大華嚴寺・城大寺・總國分寺・金光明四天王護國之寺とも稱する。東大寺とは西大寺に對する俗稱。本寺は現に奈良市内名蹟の中心となつてゐる。聖武天皇の本願によつて、良辨を開基とし、孝謙天皇の天平勝寶元年(一四〇九)に成り、同四年開眼供養を行つた。本尊は金銅盧舍那の大佛像で、俗に奈良の大佛といふ。その勸進は行基、導師は菩提仙那であつた。その大佛殿は治承・永祿の兵火に失はれた。今の堂宇は元祿年間公慶の再建したものである。國寶「大佛」は鑄像として世界に於ける最も大なるものと稱せられ、天平十九年(一四〇七)の鑄造に係り、三年間八度の改鑄によつて成つたといふ。治承・永祿に破損し、頭首は元祿五年(一三五二)、右手は壽永二年(一八四三)の改鑄にかゝる。その蓮瓣の蓮華藏世界の圖を毛彫にしたものは天平藝術の最も雄大な遺品として重んぜられてゐる。その大佛殿・三月堂・二月堂等はすべて特別保護建造物であり、その正倉院は帝室の御保管である。

「興福寺」(コウフクジ)は法相宗の本山。奈良市登大路町にある。南都七大寺の一。藤原氏の氏寺。藤原鎌足の意志によつてその夫人鏡女王の草創。藤原氏の盛時には寺勢が大いに振ひ、幾多の學匠が輩出したが、やがてその勢を恃むの餘、僧徒等横暴を逞しうし、比叡山の山法師に對して奈良法師と稱せられた。元慶二年(一五三八)以後火災に逢ふこと前後八回に及んだ。今寺觀が大いに衰へ、中金堂・南圓堂・東金堂・北圓堂・五重塔及び三重塔が殘つてゐるだけである。右の諸堂のうち、東

金堂以下の四字は特別保護建造物である。

【北嶺】　ホクレイ。比叡山延曆寺。

天台宗の總本山。三井寺(園城寺)を寺門といふに對して山門といひ、南都に對して北嶺と呼んだ。延曆七年(一四四八)最澄がこの山に上つて一堂を建て、一乘止觀院と號したのをその草創とする。後、延曆二十三年、最澄は唐から歸朝して天台宗を當寺に傳へた。弘化十四年(一四八三)、勅して延曆寺の號を賜はつた。天長元年(一四八四)始めて天台座主を置き、同五年大乘戒壇院を建立した。爾來寺勢が益〻盛大となり、最盛時には寺域三十六町に亙り、一山三千餘坊を有し、時に僧兵を擁して横暴を逞しうした。元龜二年(一二三一)織田信長のために破却せられ、殆ど滅亡に瀕したが、豐臣秀吉がこれを再興し、德川氏に至つて稍〻舊觀に復した。古來一山を東塔・西塔・横川(よかは)の三塔、十六谷に分ち、東塔を一山の中心とし、根本中堂をこゝに建てた。

【ゆゝしき學匠】　たいへんにえらい學僧。

「ゆゝし」とは、(一)忌々しい。(二)甚だしい。すばらしい。めざましい。(三)たいへんにめでたい。けなげな。をゝしい。あつぱれ。こゝは(三)の意。

「學匠」(ガクシャウ)は、(一)ものしり。學者。(二)佛道を學習して師匠たる資格あるもの。こゝは(二)の意。

古今著聞集卷九に「まことにゆゝしかりける上手なり。」

砂石集卷上、五に「常州の東城寺に圓幸教王房の法橋とて、寺法師の學匠ありけり。」

【よき人】　唐の善導和尚及び法然上人などをいふか。

「善導」は支那唐代の念佛門の名僧。姓は朱氏。幼時密州の明勝に投じて出家し、三論を秘めた。後觀無量壽經を讀むに及んで、廬山の慧遠に私淑し、遂に道綽の門に入つて專ら淨土の行業を修した。後長安の光明寺に住して傳道に從事し、爾來三十餘年の間常に禮佛を事とし、自行・化他の方法として阿彌陀經を寫すこと十餘萬卷。淨土曼荼羅を畫くこと三百餘に及んだといふ。高宗の永隆二年(一三四一)寂。年六十九。その思想は曇鸞・道綽等の說を傳承し、更にこれらの不徹底な點を改めて、支那淨土教義を大成した。我が源空(法然)は「偏依善導」を標榜して日本淨土教を立てた。隨つて善導は實に日本淨土教の祖師と仰がるべき高僧である。

【念佛はまことに淨土に生るゝ種にてやはんべるらん】　念佛こそは淨土に生れるに最も必要な中核であらう。

「種」はシュ。又タネ。業に對しては「シュ」とよむ方がよからうと思ふ。且「シュ」とよめば眞言にいふ種子(しゅし)にも通じる。種子はわれ〳〵の持つてゐる佛性であるが、それが諸欲のために覆はれてゐるから、他の助けによらねば

ならぬ。その開發を象徴したものが三昧耶形である。開發の結果佛になる、卽ち尊形となる。
梅原眞隆著「數異鈔の意譯と解說」(大正十三年雙樹社)にはタネと訓んでゐる。本文が假名で書いてあれば問題はない。

【地獄】 梵語では Naraka. 不樂・可厭・苦具・苦器・無有などと譯す。地下にあるので地獄といふ。地獄は八層をなして八大地獄といふ。卽ち

(1) 等活地獄　いろ〳〵の責め苦にあつても凉風にふかれて前に等しく活ける
(2) 黑繩地獄　黑繩で縛られて鋸でひかれる
(3) 衆合地獄　多くの苦しみが衆合する
(4) 叫喚地獄　苦しみの叫びうめきをあげる
(5) 大叫地獄　更に大きな叫びをあげる
(6) 炎熱地獄
(7) 大熱地獄
(8) 無間地獄　限なく無窮に苦をうける

この八大地獄の傍に八寒地獄がある。又各〻に副地獄が十六ある。これを十六遊增地獄といふ。合計 (16×8=128) 百二十八あることになる。これに八大地獄を加へて百三十六になる。地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天人を六道といひ、始めの三つを三惡といひ、修羅を加へて四魔といふ。

【業】 ゴフ。梵語 Karma (羯磨) の意譯。身口意にてなす善惡の所作をいふ。この三業上の行爲は未來に於て善惡の果を生ずべき因種であるから、これを業因 (ゴフイン) といふ。

【嫌(スカ)されまゐらせて】 おだまされ申して。「だます」意を敬語でいつたのである。

【自餘の行】 ジョのギャウ。それより外の行。念佛以外の行。
「行」(ギャウ)は、身口意の作用。一說には修行。

【いづれの行も及び難き身】 佛性を認めず、自力を認めないのである。

【とても地獄は一定住處ぞかし】 どうしても地獄に墮ちることは免れないといふ意。
「とても」は、どうしても、いかにしても、何としても。但しこの場合には、下に打消をつけて「どうしても出來ない」などとなるのが普通であるが、今日では打消をつけないで、「とても美しい」などといふこともある。こゝの「とても」の用法も、それに似てゐる。

「一定」(イチヂャウ)は(一)たしかにその事がきまつてゐること。(二)果してその通りになること。こゝは「たしかに」「疑ひもなく」などの意。
「住處」(スミカ)は住むところ。甘んじて地獄へ行くといふ心持から「すみか」といつたのである。

【彌陀の本願まことにおはしまさば云々】 釋迦を中心としていへば、「釋迦の說敎虛言ならずば、彌陀の本願まことにおはします。」となる。こゝは彌陀の方に重きを置いてゐるので、彌陀の方からかやうに言つたのである。なほ、このあたりは上から順に連鎖法を用ひて論を進めてゐることに注意させたい。

【善導の御釋(オンシャク)】 善導和尙の觀無量壽經の疏・往生禮讚・法事讚・觀念法門・般若讚等をさしていふ。
「善導」のことは、前の「よき人」の條參照。

【詮ずるところ】 つまるところ。つまり。要するに。所詮。

【愚身】 グシン。おろかなる身。親鸞の自らへりくだつていつた語。

【信心】 シンジン。信仰の念。信念。
大藏法數に「中道經云、妙信ニ常住ニ、一切妄想、滅盡無レ餘、中レ道純眞、名曰ニ信心。」
古今著聞集卷二に「信心を致して孔雀經をよませ給ふ。」

【面々の御はからひなり】 めい〳〵のお考へ次第でござる。
このところ、原文には「面々の御はからひなり云々。」とある。

參考

念佛の心理は物のあはれを繼承してゐるやうである。平安朝の人々は物のあはれに止ることによつて安住してゐた。それは主情的なものであつて、沒入するものである。物のあはれからはみ出た人間をそのまゝ肯定して、それで安んじ、更にかなたに阿彌陀の光を認め、その二元を確かに對立させるものが念佛であるやうである。一方日蓮の方はどこまでも人間の

意志的活動を認める構成主義であるので、新思想といふことができる。然し日蓮の自力といふことは徹頭徹尾自我主義ではないのであつて、本然の性と、本然の性の開發との二段に於て、自力・他力がまた二段に用ひられてゐるのである。この關係を表にすれば左の如くである。

	本然の性・成佛しうる根本	手段方法
日蓮宗	萬有佛性論・妙法の理により一切の人間に成佛をなし得る佛性がある（自力）	この佛性を開發するのは大慈大悲の佛を信仰することによつてである（他力）
眞宗	成佛は彌陀の本願によつて解決されてゐる（他力）	彌陀本願に參加するために彌陀を信仰する（他力）

即ち日蓮の自力と法然・親鸞の他力とは信仰の態度に於ては同一であり、本佛觀に於て相違がある。自力といつて鬪犬のやうに考へるのは誤である。この樣に二つの思想が雙び起つたところに、思潮史上の鎌倉時代に興味があり、文學史の上から見ても面白いのである。

土牢御書　日蓮

【土牢御書】　龜山天皇の文永八年（一九一二）十月九日、日蓮が鎌倉の土牢にある高弟日朗におくつた書狀で、いはゆる「御書」である、即ち書翰である。日蓮の法論ではない。折伏主義を唱へた勇猛なる宗教家としての日蓮が、その私的生活に於てかくも溫情的であつたところは、誠にゆかしさの限りである。しかしこの短い書翰の中にも、法華經の行者としてその門弟に示す峻嚴壯烈な氣魄の動いてゐることを看取することが出來る。「土牢」（ツチラウ）とは地中にかまへた牢。つちのひとや。

太平記、十一、兵部卿親王流刑の條に「二階堂の谷に土牢を塗りてぞ置きまゐらせける。」

【日蓮は明日佐渡の國へまかるなり】　前の作者の項なる「日蓮」參照。

「佐渡」は本州中部の一國。越後の北方日本海中の孤島で、本陸から約三〇粁を隔ててゐる。島内には二條の並行山脈があつて、眞野・夷の兩灣を連ねる小平野を挾んでゐる。主峯金北山は高さ一、一七三米。西岸の相川町は金山によつて榮え、東部の夷は新潟市の副港の地位にある。新潟縣の所管。

【殿】　トノ。男子の敬稱。こゝは日朗をさしていふ。

「日朗」（ニチラウ）は日蓮門下で六老僧の一。大國阿闍梨と號し、又、筑後坊といつた。十歳日蓮に從ひ、爾後常にこれに隨侍した。文永八年（一九三一）日蓮龍口の危難に際し、自らこれに殉ぜんことを强請して、刀吏と爭ひ、右臂を打たれた。日蓮が佐渡に流さるゝや、日心等と共に鎌倉の土牢に投ぜられた。十一年、日蓮に赦免の令下るや、その赦免狀を携へて佐渡に日蓮を訪ひ、相伴なつて鎌倉に歸つた。日蓮が身延に退くに際し、命を受けて妙本寺を主り、後又池上の本門寺を兼監した。建治三年（一九三七）下總の日禮は一宇を建て、日朗を請じて開山とし、本土寺と號した。日蓮の入寂後、同門の五人と共に身延に祖塔を守つた。元應二年（一九八〇）寂。年七十八。門弟子、日像・日輪・日傳等九人を朗門の九鳳（九老僧）といふ。後光嚴天皇は、勅して菩薩號を賜つた。

【法華經一部】　法華經の一部八卷、即ち法華經の全部をいふ。

「法華經」（ホケキャウ）は妙法蓮華經の略。又、一乘妙典ともいふ。八卷、二十八品。支那姚秦の弘治八年（一〇六六）、鳩摩羅什の譯。一經を分つて本門（前十四品）・迹門（後十四品）とし、本門中に於て如來壽量品をその大宗とする。釋尊出世の本懷は四十九年の一代の說法中、最後九箇年の說法たるこの妙法蓮華經に於て始めて顯現せられ、久遠實成の妙理は本門の中心たる如來壽量品に於て始めて示された。釋迦一代の聖敎中、廣大無邊の慈悲と幽玄微妙の哲理とを包含する點に於て、諸經中最上第一と稱せられ、古來最も尊崇される經典である。

【色心二法】　シキシンニホフ。有形質碍の法。知覺の用のないものを色といひ、これに反して形質の見るべきものはないが能く知覺の用あるものを心といふ。

一切諸法を色心の二法に分ち、質碍あるを色法とし、無質碍で緣慮の用あるもの、或は諸法を起す根本となるものを心法とする。

【六親】　リクシン。父・母・兄・弟・妻・子ともいひ、或は父・子・兄・弟・夫・妻ともいふ。

【一切衆生】　イッサイシュジャウ。世上のあらゆる生物。又、あらゆる人類。

法華經に「爲一切衆生之父。」

智度論に「五衆和合、假名衆生。」

平家物語、六、慈心坊の條に「それ法華は……衆生成佛の直道なり。」

【諸天童子云々】　「諸天」とは、欲界の六天、色界の十八天、無色界の四天、その他日天・月天・韋駄天等の諸天神を

いふ。「諸天童子」とは、護法の諸天が童形を現して人に拾持するものをいふ。

これは法華經安樂行品中の語で、諸天が童形に變現して法華を信ずるものに給使となり、その者はために刀杖によつて傷つけられることもなく、毒によつて害せられることもないといふ意である。

今、日朗は熱心なる法華の信者であるから、諸天の加護があるはずで、たとひ入牢してゐても、決してその身に危難はないといふのである。

【牢をばし云々】　土牢からお出なされたら。出獄なされたら。

「ばし」は或語に添へて語勢をつよめる接尾語。

平家物語卷二、新大納言流さるゝ條に「能く〳〵宮仕つかまつれ、相構へて御心にばし違ふな。」

謠曲、鳥追船に「下人に使はるゝいはればしあるか。」

9　挿　圖

法然上人

肖像資料集に所載のものは光明本所載の「法然上人」からとつたものと思はれる。光明本には盛岡の本誓寺所藏のものと、大谷派東北別院保管のものとがある。その光明本の左上部に淨土宗の宗祖として中央に法然上人が居り（源空上人とかいてある）その左右に淨土宗の次々の列祖が三人づつならんでゐる。

道元自畫像

越前永平寺の所藏にかゝるもの。

「永平寺」は曹洞宗の大本山。福井縣吉田郡志比谷村にある。寛元元年（一九〇三）の草創。波多野出雲守義重の開基。道元（承陽大師）の開山。はじめ大佛寺といつたが、道元の入山後、吉祥山永平寺と改めた。後漢の明帝の年號永平（佛教の始めて支那に傳はつた年）に因んのだといふ。後圓融天皇は、特に「日本曹洞宗第一道場」の勅額を賜はつた。元和元年（一二一七五）德川幕府から永平寺法度を禀け、曹洞宗大本山の規模を立てた。堂宇は度々火災に遭つた。天正二年（一二二三四）罹災後、山上から山下なる今の地に移した。明治十二年祖廟燒失、十四年復興。次いで諸堂を修復し、寺觀が大いに整ふに至つた。

日蓮上人

肖像資料集所載。日本歷代人傑大鑑（大正七年日本調査通信社發行）からとつた。

10　参　考

『おもかげ』四文にわたりて

友田宜剛

本課は、よほど扱ひにくい一課だと思ひます。四大宗教家の面貌躍如たる點を國語の力によつて感得せしめようといふのが一課の目的ではありませうが、事苟も宗教に關係してゐる以上、之が教授者たる御方も、教壇に臨まるゝ前、先づ四宗教についての多少の豫備知識を持たるゝことが大切ではありますまいか。單に國語力によつてのみ解し得べきものではないでせう。

私の管見を以てしますれば、四字共に四宗教家の各特色ある面貌が躍如としては居りますが、しかし又片鱗を以て全龍を窺ふやうな感じが無いでもありません。中にも、一枚起請文と念佛との二文は、いかにも能くその宗旨の極則に觸れてゐて、法然なり親鸞なりの卓爾たる人格を仰望し得ると同時に、その宗教的精神を或る程度まで深く汲んで味はふことが出來ますが、學道と土牢御書との二文については、これ亦共に、道元なり日蓮なりの卓爾たる人格は仰望し得られますけれども、その宗教的精神に至つては、これで以て其の極意極則を十分に味はひ得るとは申されないかと思ひます。尤も、學道中の「身心放下、」土牢御書の「法華經一部を色心二法共に遊ばしたる」といふ片言隻語の裡に曹洞宗なり日蓮宗なりの宗旨が見はれてはゐませうが、これに由て以て、その宗旨の極意極則までを窺知することは我々門外漢にはむつかしいことでせう。それに比しては、一枚起請文中の「たゞ往生極樂のためには、南無阿彌陀佛と申せば疑なく往生するぞと思ひとりて申す外には、別の子細候はず」とか、「皆……決定して、南無阿彌陀佛にて往生するぞと思ふ内に籠りて候なり。」とかいふは、法然によつて開かれたる淨土宗の極意極則が明確に示されてゐるのではないでせうか。又、念佛の文中、「念佛より外に往生の道をも存知し、又法文等をも知りたるらん」と思ふは大きな誤であるとか、親鸞におきては、「たゞ念佛して彌陀にたすけられまゐらすべし」と信ずるほかに別の子細ないといへるなど、正しく親鸞がその師法然上人より繼承して而も新たに生面を開きたる淨土眞宗の極意極則ではないでせうか。かく觀じ來るとき、此等四文の各〻について、おのづからに教授上の取扱手心がちがはなければならぬと思ひます。

尙、別事ながら杞憂をめぐらして見ますならば、之を學ぶ生徒の

各家庭的宗教がいろ〳〵で、禪宗もあれば淨土宗もあり、淨土眞宗もあれば日蓮宗もあり、その他にも佛教に屬する多數の宗派があり、佛教ならぬ宗派も多々ありませうから、邪教ならぬ宗派である以上、互に相親和して以て善思想界に向上的修養を辿る道づれたらしむるやうに導きたいものだと思ひます。昔日やゝもすれば行はれたやうな、異宗教者とは婚嫁も許さないなどといふやうな陋思想がどこかの片隅にでも偏在するやうなことがあつてはならないのであります。「念佛無間、禪天魔、眞言亡國、律國賊。」といつたやうなことは、蓋し日蓮が當時、爲にする所あつての言と見て宜しいかと思ひます。苟も佛教たる以上、その源流に溯つて見れば、皆是れ釋迦の教法に外ならないのであります。

このやうなことを、教壇上で露骨に生徒に說法して聽かせるには及びますまいが、私の管見を以てしますれば、この課にあらはれた四宗派についても、皆その歸着點が一つであるといふことを信じたいのであります。

わけのぼるふもとのみちはおほけれど同じたかねの月を眺めるのであります。富士に登るのに、御殿場口からするのが禪宗なら、須走口からするのが淨土、吉田口からするのが法華宗といつた位のものでせう。結局は同じ眞如の月を眺めるのであります。同じ御來迎をも拜めば、同じ金銀明水をも汲み、同じお鉢めぐりをもするのでありませう。禪は自力難行道、淨土は他力易行道とも申しますから、言はば淨土宗や淨土眞宗が現代式登山のケーブルカーのやうなものだと喩へてもよいのでありませう。法華宗即ち日蓮宗も、南無妙法蓮華經一つで救はれるのでありませうから、淨土門の南無阿彌陀佛一つで助かるといふのと同じく、易行道に屬するといつてもよいのかも知れません。そして法然の開いた淨土宗と、その弟子親鸞が新生面を開いた淨土眞宗の差とは、ほんの一寸したもので、言はば須走口のうちの右道と左道と並行してゐる其のどちらかを選ぶ位の差に過ぎません。たゞ、淨土宗は行に重きを置くところからして、南無阿彌陀佛も數でこなすといふことになり、日に六萬遍の八萬遍の十萬遍のと唱へることも起つて來ませう。淨土眞宗は信に重きを置くところから信ずる一念で助かると申し、信心獲得といふことに力こぶを入れますが、しかし猶報謝の稱名間斷なかれと南無阿彌陀佛の連續唱を奬勵します。さて思ふに、行を離れた信もなく、信を離れた行もないのでありますから、結局は、淨土宗も淨土眞宗も其の歸する所一つになるのではありますまいか。更に日蓮宗を見てみまするに、法鼓を打つて南無妙法蓮華經々々々々々々々と明け暮れ一心に行ずるところ、淨土宗の行、淨土眞宗の信とどこが異つてゐますか。私自身の體驗よりすれば、何等抗爭する程のその差を見ないのであります。

禪にしました所が、臨濟では工案三昧、見性成佛を强調し、曹洞宗では王三昧、身心脫落を强調するかに存じますが、この王三昧、工案三昧が又々その歸趨を一にしてゐると同時に、此等禪宗の極意が又淨土二宗や日蓮宗の極意と、その歸趨を一にしてゐることを信じます。これも聊かながら私自身の體驗が證明してゐる所であります。かく觀じ來りますと、各宗各派、一つも相爭ふべき筋合のものではなく、共に親和し提携して行き得るものと思はれます。

佛教に貴ぶべきもの三つ。曰く佛・法・僧、これを三寶と申します。三寶は個々別々に存在するものではなく、必ず合體一如の妙用を爲して、そこにその眞價が發揮せらるゝのではないでせうか。蓋し、我が大日本帝國の國體として貴ぶべき君・國・民の三位合一なると酷似してゐると思はれますが如何でせう。我が金甌無缺の國家に於きましては、國・君・民が渾然たる一體を爲してゐるのではないでせうか。吾人は、忝き君恩の浩大を思ふとき、そこに國あり民あることを決して忘れてゐません。國家の隆昌を思ふとき、そこに至尊の君おはし、至忠の民あることを決して忘れてゐません。さて又民の福利を思ふとき、又々そこに至尊の君おはし、至幸の國家あることを決して忘れてはゐないのであります。佛教に於ける佛・法・僧の三法も亦又このやうな關係にあるのではないでせうか。而して、私の管見から之を宗教にあてて申せば、概して淨土の二宗は佛即ち阿彌陀佛を中心として立教し、日蓮宗は法即ち妙法蓮華經を中心として立教し、禪宗は僧即ち祖師を中心として立教してゐるといふことも言へるかと存じます。尤も禪に如來禪祖師禪といふやうなこともありませうけれども、今こゝにそれこれの詳說を要することではありますまい。畢竟、佛法僧の三寶が一體合作して佛教の妙用を爲すものとしましたならば、此等諸宗が又一體合作して以て我が思想界の善導を圖るべきではないでせうか。私は斯く感じ斯く信じてゐるのであります。而して、本課を御取扱ひ下さる先生方も、このやうなことを一應御考下さるのが御宜しいのではないかと存じます。

「この外に奧深きことを存ぜば、二尊の御憐にはづれ、本願にもれ候ふべし」といひ、「たゞ思ひ切つて身心共に放下すべきなり」といひ、「たとひ法然上人に讃されまゐらせて念佛して地獄に墮ちたりとも、更に後悔すべからず」といひ、「色心二法共に遊ばされたるこそ貴く候へ。」「牢をばし出でさせ給ひ候はば、とく〳〵來り給へ、見奉り、見え奉らん」といふ、皆以て信者のたましひをゑぐるものでありませう。（藻鹽草第七輯）

（昭和十三年六月六日）（稿筆者は前陸軍教授）

一六　大丈夫の覺悟

1　解題

幸田露伴著「讕言」の中から採つた。

「讕言」は全一冊。幸田露伴の隨筆・雜著をあつめたもので、「長語」の姉妹篇である。明治三十五年、東京春陽堂發行。

2　作者

幸田露伴　カウダ　ロバン。

名は成行。慶應三年(一八五二七)七月二十六日江戸に生れた。明治・大正・昭和を通じて知名の文學者。しかも博覽强記、漢籍・國學・俳書・歴史・稗史・彫刻・俗文學、一として通ぜざるはなく、殊に佛典の造詣が深い。明治四十一年京都帝國大學講師となり、翌四十二年文學博士の學位を授けられた。

氏は明治二十一年「天魔」の一篇以來、筆を小說に染めて「露團々」「一口劍」「風流佛」より「五重塔」に至つて頓に名聲を高め、尾崎紅葉と相並んで文壇の兩大家と稱せられた。その想は雄渾にして男性的、理性的、藝術至上主義的、その文致は西鶴より出でて更に一層の洗練味をそなへ、「二日物語」「きくの濱松」「ひげ男」「天うつ浪」に至つて益々圓熟を示した。氏は又隨筆にも長けて、「長語」「讕言」「潮待ち草」等、いづれも多數の愛讀者をもつてゐる。その他「頼朝」は歴史小說として、「努力論」はその體驗から得た教訓として、「幽情記」は支那古典の鑑識を表したものとして、「日本史傳文選」は多くのいさごから拾つた白珠眞珠として、「冬の日抄」は俳文學の教養の深いしるしとして、いづれも貴い遺作である。これらの書物は今大概露伴叢書の中に收められてゐる。露伴氏の作風及び作品について、高須芳次郎氏の評論を左に拔萃しよう。

幸田露伴

「…硯友社の紅葉に對して、必ず聯想されるのは、幸田露伴である。紅葉がその同人・門下等と手を携へて藝術の道を闊歩したのに對して、露伴は主として、孤獨の道を悠々と歩いた。初期の彼は佛教思想、殊に禪的思想を抱いた詩人であつた。悟道・道念・意力・神興といふやうな言葉は、彼の作中にその意味を見出すことが出來る。彼を解するにはいくらか佛教思想に通ずることを要する。單に彼を「幼稚な主觀派」としてしまふのは、彼を解しないものだ。私は彼の「五重塔」をホイスマンズ

の「大寺院」に比しようなどとは思はないが、少くとも、彼は紅葉のやうに淺い小主觀に甘んじたものではなかつたと見る。人生を遊戯視しようとしたものではなかつたと思ふ。もつと眞面目で心靈を重んずることを知つた彼は、小說のうちに佛敎思想を寓しようとしたのである。この點から、彼を理想派又は理想主義者と呼ぶことが出來よう。勿論彼は大乘佛敎の極意に徹したものでもなければ、佛敎の上に深い造詣を持つたものとも見えない。けれども佛敎、殊に禪的思想などによつて、自家の心境を切り開いてゆかうとする熱意を持つて居たことは明らかである。そしてヨーロッパ哲學や科學などの窓から、佛敎思想を眺めようとしたのではなくて、寧ろ彼の詩情を通じて、それを見ようとした傾がある。この點から言へば、彼は佛敎的詩人である、東洋思想の根を培つた文人である。かうした人の小說が出て、初期の硯友社同人等の皮相寫實乃至現實主義に對したのは、興味あるコントラストである。

彼の出世作は二十二年九月發行の「新著百種」第五篇に出した「風流佛」である。その前に彼は「都の花」に「露團々」を發表したが、それは彼が本質から離れて、歐化熱にかぶれたもので、單に興味中心の作に過ぎなかつた。「風流佛」になると、彼が獨自の天地へ出て來た事がわかる。それから彼は「一口劍」「ひげ男」「艷魔傳」「綠外傳」「血紅星」などを出し、「五重塔」に至つてその特色が殊に闡明された。それは二十二年から二十五年頃迄の收穫で、日清戰爭前に書いた「風流微塵藏」なども、その意氣の旺んなことを示すものであつた。

以上を通觀して、私の考へるところによると、彼を小說家の範疇に封じこめてしまふのはどうかと思はれる。少くとも、現在わが文壇に於て、狹い意味に解して居る小說家とは見たくない。彼はどうしても詩人だ。そして彼の初期の小說は以上の通りだが、さうした小說よりも、寧ろ紀行文・小品などに、より多く彼の詩情が自由に披瀝せられて居るのを見る。例せば「枕頭山水」や「夢日記」等の類である。さうした方面に赤裸々の露伴がよく出て居るやうに思はれる。……(中略)……

彼の表現法は、觀察や實驗などに重きを置かないで、彼の主觀によつて机上に作りあげた人物を空想的に描き出さうとしたため、たとひ人物そのものに奇矯・非凡なところがあつたとしても、個性をはつきり浮べ出すことが出來なかつた。そこには輪郭があつて魂がなかつた。通有性だけあつて特殊性がなかつた。また心理描寫を行つても、ある一角が誇張された丈で、固定的傾向から脫することが出來なかつた。それに時々、文章の調子に引きずられたり、作爲のあとが目立つたり、氣力のみで文章を書き通さうとしたりして、破綻を示すことがあつた。西鶴に私淑しながら、唯西鶴の文章の調子を摸したやうなことは、紅葉のみならず、露伴にもあつた。けれども彼は確に文章の妙手であつた。紅葉のやうに艷麗・華美なところはなかつたけれども、强い氣分で押通してゆく男性的な勁健の趣は彼の獨得であつた。その日記などは、蒼古・簡淨の味があつて殊によい。

唯彼が文章の上に於て、紅葉のやうに時代の大勢に適應して、新しい試みを重ねてゆく傾に乏しかつたため、その初期の時代に於て略〻固定してしまつたのは、彼の弱點であつた……。(中略)

要するに、皮相的な寫實や、江戸式の遊戯氣分が文壇の大勢を支配して居た時に、露伴がひとり別な世界に住んで居たのは文壇の單調を破る一勢力であつた。唯彼が佛敎思想乃至東洋趣味に親炙した割合に、歐米思潮や文藝に親しまなかつたことが、彼の特質を單調な狹いものにしてしまつた。これ彼が日本のホイスマンズとなつて、第二の「大寺院」を書き得なかつた所以である。

(現代文學十二講)

3 編纂の用意

前課に見えてゐる宗敎界の俊髦卽ち法然・道元・親鸞・日蓮等の偉大なる修養及び玄妙なる敎條等に關聯して、受發の二途に於ける大丈夫の覺悟を詳かにせしめ、以て各自が修養の資たらしめたい。

4 要旨

河海の細流を擇ばずしてよくその大を成すが如く、能く他を受け、世の毀譽褒貶に耳を傾けずして、寬仁大度を守り、常に內に反求して大いなる我を成すべし、と說いたものである。

5 段落

第一節(一二五頁——一二六頁二行)大丈夫の覺悟。受は多からんを欲し、發は豐なるべしと說く。

第二節(一二六頁三行——九行)受發はその途を異にするが實は一である。學藝を成し遂げようと思へば、受の途に於て大丈夫の覺悟をもたねばならぬ。

第三節(一二六頁一〇行——一二八頁一行)評の性を說いて、これに對する受の大作用を論じ、聖賢も評を如何ともすることは出來ないが、評も亦聖賢を如何ともすることは出來ないといふ。

第四節(一二八頁二行——八行)學藝に志す者は、勉めて己に克つて人に受くべしといふ。

第五節(一二八頁九行——一二九頁四行)人の毀譽に拘らず、唯反求の功に賴るべしと說く。

第六節(一二九頁五行——一〇行)徐子の言に據つて、謗を止むるは修身の外になしといふ。

第七節(一二九頁一一行——一三〇頁)序說に應じて受發の

二途を說き、更に心に勝つことの必要を論じて全文を總括した。

6　取扱上の注意

▲本課は形式の上からも、內容の上からも、熟讀玩味させたいものである。卽ち、現代の元老作家の手になる嚴肅なる論說文として、修辭的に見ても一言一句を苟もしないその行文を味讀せしめ、又、その洗煉された文辭に盛られた內容が、何れの一部を取つても、格言的の含蓄を有つてゐることを考察せしむべきである。

▲しかも、以上の如き文の特色は、主として作者の人格に根ざしてゐることをも思はしめつゝ讀ませたい。實にこの作者の如きは、世のいはゆる作家の多くと選を異にして、その人格、その人物が、修養談を說くに誠に相應しいまでにすでに修養され、圓熟の境に達してゐられるのである。

▲現代の多くの青年子弟は、自己を反省することに臆病になつてゐるとも謂はれてゐる。とにかく、自己の缺點短所を考へて見るなどいふことは、今日の學生の一般氣風からはかなり緣遠いもののやうである。そのくせ、他を批評すること、他から批評されることには大いに興味と關心とを持つてゐる。さうした現代の子弟に對して、本課は實によい反省の材料でなければならない。

▲たゞこの種の課を、眞にしみ〴〵と自己の反省資料として熟讀せしめるには、敎授者に相當の考慮がいるであらう。「何だか、固くていやな文章だなあ」といふやうな豫感を起させないやうに先づ注意してかゝりたいものである。

7　設　問

1　本文の骨子ともいふべき文字は何か。
2　受の一字からは、修身上如何なる德目が生ずるか。
3　發の一字からは如何。
4　自己に關する批評に對しては如何に心得て居るべきか。
5　次の語句を書取れ。
　イ、褒貶毀譽。
　ロ、批評は堯舜の聖を如何ともする能はず。

　ハ、擊壤の歌。誹謗の木。
　ニ、徐ろに。委ぬ。薄し。
6　次の語句を解釋せよ。
　イ、饒舌の分疏は老婆の醜態、逆耳の言に聽かざるは好漢にあらじ。
　ロ、牛溲馬勃を我が藥籠中に收む。
　ハ、能くその心に勝つ、人に勝つに於て何かあらん。

8　釋　義

【「大丈夫」】　ダイヂャウフ。丈夫の美稱。ますらを。

「丈夫」は男子。支那周の制、八寸を一尺とし、十尺を一丈とし、男子の長(タケ)一丈を正制とするよりいふ。

孟子、滕文公下に「景春曰、公孫衍・張儀、豈不二誠大丈夫一哉。一怒而諸侯懼、安居而天下熄。孟子曰、是焉得レ爲二大丈夫一乎。子未レ學レ禮乎。丈夫之冠也父命レ之。女子之嫁也、母命レ之。往送二之門一、戒レ之曰、往之二女之家一、必敬必戒無レ違二夫子一。以レ順爲レ正者、妾婦之道也。居二天下之廣居一、立二天下之正位一、行二天下之大道一、得レ志與レ民由レ之、不レ行レ志獨行二其道一。富貴不レ能レ淫、貧賤不レ能レ移、威武不レ能レ屈、此之謂二大丈夫一。」

【覺悟】　カクゴ。又覺寤とも書く。(一)物事の道理をさとること。(二)あきらめること。觀念すること。(三)豫め心構へすること。決心すること。こゝは(一)の意。

【受發の二途】　ジュハツのニト。外から受けると、外へ發するとの二つの途。

「受」は容納の義、「發」は宣發の義。

論語に「君子不レ可二小知一、而可二大受一。」

易經の文言に「君子黃中通理、正レ位居レ禮、美在二其中一、而暢二於四支一、發二於事業一、美之至也。」

【受くることは須く大海の百川を呑むが如くなるべし】　受くることの極めて多かるべきにたとへていふ。

管子に「海不レ辭レ水、故能成二其大一。」

戰國策に「河海不レ擇二細流一、故就二其深一。」

老子に「江海所二以能爲一百谷王一、以二其善下一之。故能爲二百谷王一。」

李白の詩に「巨海納二百川一、麟閣多二才賢一。」

【發することは宜しく甘雨の八方に澆ぐが如くなるべし】

發することの極めて豐かなるべきをたとへていふ。

「甘雨」(カンウ)は、草木のうるほひとなり、作物の成育に益する雨。

論衡に「道至レ天者、祥風起、甘雨降。」

准南子に「神農之治二天下一也、甘雨時降、五穀繁植。」

爾雅に「甘雨時降、萬民以嘉。謂二之醴泉一。」

詩經の小雅に「以御二田祖一、以祈二甘雨一、以介二我稷黍一、以穀二我士女一。」

甘雨に對して苦雨といふのがある。これは霖雨(ナガアメ)のことである。

纂要に「疾雨曰二驟雨一、徐雨曰二零雨一、久雨曰二苦雨一、又曰二愁霖一。」

【受くることの多からさらんを嫌ひて云々】受けることが少くはなからうかと嫌つて、河海が流の大小を擇ばず受けいれるやうに、事の大小を擇ばず悉くこれを受けいれることをいふ。

【發することの豐ならさらんを恐れて云々】發することが豐かでなからうかときづかつて、甘雨が方の東西を擇ばず降り澆ぐやうに、おのれの蘊蓄を四方八方に發表することをいふ。

【受は發の本なり云々】大いに發せんことを欲するものは先づ大いに受けいれなければならぬ。大いに受けいれたものでなければ、決して大いに發することは出來ぬ。これ、受が發の本であり、發が受の末である所以である。

【大賢は能く受く云々】賢愚の段階によつて受納の程度に差のあることをいふ。大賢は十分に受け納れる。中才は努力の結果受け納れる。賤人の中には、盲滅法に受け納れるものと、一切拒絶して受け納れぬものとある。

【誓つて必ず賤人たらさらんを期する云々】賤人のやうに、盲滅法に受け納れたり、一切を受け納れなかつたりするやうなことの斷じてないやうにと心がけることをさして、眞に身を學藝に委ねるといふのである。

【受の途に於て工夫刻苦するものは云々】受け納れる方法について、さま〳〵と工夫をこらし、いろ〳〵にほねを折るものは、多分はその志す學藝を成就するであらう。

「工夫」(クフウ)は手段を考へること。思案して方法を立てること。

大學に、「凡傳十章。前四章統二論綱領指趣一、後六章細二論條目工夫一。」

大藏流狂言、禁野に「鷹匠色々工夫をめぐらし、黑金にて鷹を作り。」

「刻苦」は、大いに心力を勞してつとめること。苦勞を積むこと。

宋史の孔文仲傳に「少刻苦問學、號二博洽一。」

「庶幾」は「チカシ」とよむ。ほとんどとゞくこと。

易經の繫辭に「顏氏之子、其殆庶幾乎。」

【爲すにだに堪へさらんとす。何ぞ成ることあらん】「なす」と「なる」とは方法と結果とである。たとひ方法を用ひても、必ずしも結果を期待することは出來ない。況んやその方法をなす事にさへ堪へないものが、どうしてその結果を望むことが出來ようか、といふのである。

「だに」は俚言集覽に「『これだにかくすれば』などといふ。「たゞに」の略語なり。」とある。

伊勢貞丈の隨筆に「『だに』『さへ』、歌の詞にも常の詞にも、『だに』といふと、『さへ』といふとは、その意別なり。『だに』といふは『たゞに』と云ふを略したる詞なり。唯字・啻字等なり。『さへ』と云ふは『そへ』と云ふ詞なり。一つの物ある上に、今一つ物の添ひたる事ある時は、『さへ』といふなり。『だに』と云ふは『心だに』『命だに』『我だに』の類なり。これ皆『たゞに』と云ふことなり。又『さへ』と云ふは『實さへ』『言の葉さへ』の『さへ』の類なり。古今集一に『ちりぬとも香をだに殘せ梅の花、戀しき時の思ひ出にせむ』とある。

【評の性は多く褒貶毀譽を具し】批評といふものは、その性質上、褒貶毀譽の要素をそなへて居るものであるとの意。

「褒」(ハウ)は、ほめること。「貶」(ヘン)は、けなすこと。おとすこと。「毀」(キ)は、そしること。譽(ヨ)は、ほめること。

杜預の左傳序に「春秋雖下以二一字一爲中褒貶上、然皆須二數句一成レ言。」

准南子に「毀譽之于レ己也、猶二蚊蟲之一過一也。」

【或は徒に懼れ、或は人を恨み】他人の己に加へる貶・毀

に對して。

【或は徒に驕り、或は自ら足れりとして】 他人の己に加へる褒譽に對して。

【惜しむべし】 この語は下の「悟らず」にかゝる。

【堂々たる六尺の身】 立派なかつぷくをそなへてゐる六尺大の男兒。

「堂々」(ダウ〳〵)は、立派なさま、雄大なさま、又、威嚴のあるさま。

論語の子張論に「曾子曰堂々乎張也、難二與爲一仁矣。」註に「堂々容貌之盛也。言、其務レ外自高不レ可二輔而爲一仁、又不レ能レ有二以輔一人之仁一也。」

【他人に簸弄せられたるを悟らず】 他人にからかはれ、もてあそばされてゐるといふことに氣がつかぬ。

「簸弄」(ハラウ) は、箕を以て穀物をふるふやうに、自由自在に人を翻弄すること、(「簸」は米を揚げて糠や塵を去ること。)

陳高の詩に「晶光浴二秋日一、簸弄琉璃珠。」

韓愈の詩に「簸弄明月珠。」

【人を颱風にし我を粃糠にす】 前の「簸弄」の語に對していつたもので、甘んじて他の翻弄にまかせることをいふ。

「颱風」(ヘウフウ)は、はげしいつむじ風。

「粃糠」は、ひなとぬか。

粃糠は輕いものであるから、烈しい風に煽られると、たやすく飛散する。よつて、前のやうなたとへにいつたのである。

爾雅に「暴風從レ下上曰二颱風一。」

【自ら待つの薄きのみならず】 自分で自分の價値を低いものとしてしまふばかりでなく。

【學藝に負く】 學藝に矢をむけること。學藝に對して反旗をひるがへすこと。學藝からその心を離すこと。

【大も亦呑む小も亦呑む云々】 河流の大小、水質の清濁をわかたず、悉くうけ容れること。いはゆる「河海不レ擇二細流一、故就二其深一。」の意。

【默々】 モク〳〵。だまつてものをいはぬさま。もだしてゐるさま。

こゝは河海に些の水音だもたてぬさまにたとへていふ。

屈原の九歌に「吁嗟默々兮、誰知二吾之廉貞一。」

【洋々】 ヤウ〳〵。さかんなるさま。こゝは大海の水のさかんに充ちたゝへてゐるさまにいふ。

詩經の國風に「河水洋々。」

【日に活潑々たり圓陀々たる大作用をなす】 日に〳〵、いきいきとしてさかんな、そして、まどかにしてうるはしい大きなはたらきをする。

「活潑々」(クヮツハツパツ)は、力の充ち滿ちて、いきいきとしてゐるさま。

「活潑々地」の略。

中庸の第十二章「詩云、鳶飛戾レ天云々。」の註に「故、程子曰、此一節、子思喫緊爲レ人處、活潑々地、誹者、其致レ思焉。」

「圓陀々」は「圓佗々」とも書く。圓滿和樂の貌。

爾雅の釋訓に「陀々、美也。」

釋文に「佗々、德之美也。」

【大賢の人の言を受くる亦かくの如し云々】 大賢は、大海が大小・清濁の河水を悉く併せ呑むが如く、他人の忠諫を悉く受け容れる。卽ち說の精雜と密疎とを問はず、又、評の毀譽と褒貶とを論ぜず、悉くこれを受け容れて、人人をして、自ら進んで日に〳〵忠言を己に進めさせるやうにと願はぬことはない。

【堯舜の聖批評を如何ともするなしといへど云々】 堯舜の如き聖人も、他より起る批評を抑壓することが出來ず、又變更させることも出來ず、その起るにまかせねばならなかつたが、しかし堯舜に向つて試みられた如何なる批評も、堯舜の德をどうすることも出來なかつた。

「堯」(ゲウ)は支那太古の聖天子。五帝の一。名は放勳。帝嚳の子。陶唐氏と稱した。帝嚳についで位に卽き、山西の平陽に都し、曆法を改定して、民に時を敎へた。この時代と次の舜の時代とは、天下泰平、萬民鼓腹してその治を樂しんだので、後世これを堯舜の世といひ、理想的治世として仰いだ。

「舜」(シュン)は堯についで立つた聖天子。五帝の一。有虞氏と稱した。はじめ庶人であつたが、至孝の名高く、遂に位を堯より讓られて天子となり、中央官制を整頓し、地方行政に努め、天子の巡狩、諸侯の朝覲の制を定め、苗族を驅逐し、禹を用ひて洪水を治せしめ、遂に位をこれに讓つた。

【擊壤の歌は誰か堯の德を傷つくるものとなさん】

昔堯の時代に老人どもが世の太平に慣れるのあまり、壤を擊つて、「日出而作、日入而息、鑿レ井而飲、耕レ田食。帝力于レ我何有哉。」(日中は耕し、日が沒すれば息む。水が飲みたければ井を掘つて飲み、たべものは田を耕して求める。何一つの不足もなければ、何一つの不自由もない。帝王のおかげなど、自分は少しもうけてはゐない。」) と歌つたけれども、そんな歌がのこつゐるからといつて、誰が堯の德を非難しよう。

「擊壤」は木造の履のやうなものを投げる支那上代の遊。困學紀聞に「周處風土記云、壤以レ木爲レ之。前廣後銳。長尺二寸、其形如レ履。將レ戲先側二一壤於地一、遠二於三四十步一、以二手中壤一擊レ之。中者爲レ上。」とある。

【舜の詩猶存すれども云々】 舜の作つた南風の詩は今なほ殘り傳はつてゐるけれども、舜が己の過を聞かうとして立てたといふ誹謗の木に書きしるされた文句は、今どこに殘つてゐるか、どこにも殘つてはゐない。

舜の詩について、孔子家語の辨樂篇に「昔者舜彈二五絃之琴一、造二南風之詩一。其詩曰、南風之薰兮、可レ以解二吾民之慍一兮、南風之時兮、可二以阜一吾民之財一兮。」とある。これはつまり、天下がよく治まり、民がゆたかに富み榮えたことをうたつたものである。

「誹謗の木」(ヒバウのキ)については、通鑑の前篇に「帝欲レ聞二其過一、立二誹謗木一。」註に「誹謗木、所二以書二政治之愆一。」

晉の孫楚反の金人銘に「堯懸二諫鼓一、舜立二謗木一、聽二采風謠一、惟日不レ足。道潤二群生一、化隆二比屋一。」

【己に克つ】 おのれの私慾にうちかつこと。克己。論語の顏淵篇に「子曰克レ己復レ禮爲レ仁。」

【饒舌の分疏は老婆の醜態】 べちや〳〵と言ひわけをするのは、老婆のするみにくいざまであるとの意。

「饒舌」は、ゼウゼツ、又、ニ・ウゼツ。口數の多いこと。多言。多辯。おしやべり。

傳燈錄に「閭丘胤出でて丹丘に牧たり。豐干禪師謂つて曰く、若し任に到らば、文殊・普賢に謁せよ。天台の國清寺にあり、饗を執り器を洗ふもの、寒山・拾得これなりと。閭丘、寺に至りてこれを訪ふ。二人厨にあり、爐を圍みて笑語す。閭丘覺えず拜を致す。二人耳を連ねて叱咤す。寺僧愕きて曰く、『大官何ぞ風狂漢を拜するかと。』寒山、閭丘の手を執り、笑つて言つて曰く、豐干饒舌なりと。久しくして之を放つ。」

豐干は阿彌陀佛、寒山・拾得は文殊・普賢の化身であるといふ。

「分疏」(ブンソ)は、いひわけ。申し開き。辯解。

賓退錄に「世間謂二自辯解一曰二分疏一。」

品字箋に「分疏卽條陳也。」

「老婆の醜態」(ラウバのシウタイ)は、老婆の常に演ずる見ぐるしいざま。老婆は、とかく繰言をして、或は述懷し、或は後悔し、或は怨嗟する。これをさして醜態といつたのである。

【逆耳の言に聽かざるは好漢にあらじ】 自分の耳にさかふやうな忠言を聽き入れないものは、りつぱなをとことはいはれない。

「逆耳の言」(ギャクジのゲン)は、自分の耳にさかふ忠言。わが氣に入らぬ言。苦言。

史記の留侯世家に「忠言逆レ耳、利二於行一、毒藥苦レ口利二於病一。」

孔子家語に「良藥苦二於口一、而利於病一。忠言逆二於耳一、而利二於行一。」

「好漢」(カウカン)は、好ましい男兒。好丈夫。

舊唐書の狄仁傑傳に「朕要二好漢任使一、有乎。」

【縱令】 タトヒ。假令・假使などともかく。豫め假に事を設けていふときに用ひる語。よしや。よしんば。

古今集の序に「たとひ時移り事去り、樂しみ悲しびゆきかふとも。」

【滿面の垢辱】 マンメンのコウジ・ク。かほぢゆうに受けたはづかしめ。非常なはづかしめを受けることを形容していふ。

「垢辱」は、恥辱・媿辱などに同じ。はづかしめ。

【牙關を咬定して隱忍し】 齒をくひしばつて、じつとがまんして。

「牙關」(ガクヮン)は齒。

「牙關」(ガクヮン)は齒。

鬼谷子に「口者機關也、所二以開二閉情意一也。」

說叢篇に「口者關也、舌者機也。出レ言不レ當、駟馬不レ能レ追也。口者關也、舌者兵也。出レ實不レ當、反自傷也。」

【頭を垂れ心を虛しくする工夫の裏より云々】「我見・我情・我欲をすてて、全く虛心坦懷の人、卽ちわだかまりのない心の持主となる工夫の中から、一つの新しい明朗な世界をきりひらいて。」といふほどの意。

【牛溲馬勃を我が藥籠中に收むるが如くならんを期すべし】牛の小便だとか、馬のくそだけだとかいふやうな極めて下等な藥物をも、棄て去ることなく、わが藥籠の中に入れて、病みわづらつたとき、それ〴〵の性能によつてこれを用ひるやうに、他人の言もその價値の有無、多少に拘らず、これを取り入れてわが修養の資とするだけの度量を持たねばならぬ。

「牛溲」(ギウシウ)は牛の小便。馬勃(バボツ)は馬糞。又、馬屁菌卽ち、うまのくそだけだともいふ。

韓愈の進學解に「玉札・丹砂・青箭・青芝・牛溲・馬勃・敗鼓之皮、俱收並蓄、待レ用無レ遺者、醫師之良也。」

本草綱目の獸部に「牛溺、氣味辛溫無レ毒、馬勃、氣味辛無レ毒。」

字貫に「馬勃は草名なり。濕地腐木の上に生ず。一名馬疕」と。これはツチカツギ (Astraeus Mogromechticus) であらう。

俚言集覽に「馬勃、秋のころ、濕地に地より生ずるキツネブクロなり。血止めによし。」

廣惠濟急方に「和名ミヽツブレ(これが飛散して耳に入れば、聾となるといふ說は、諸方にある)又ケムダシ、又ヤマダマ、又ケブリタケ、又テングノヘダマ。」かく種々の名があるので、その物の大要は名によつても知ることが出來るが、左に形狀を說明しよう。

始めて地に生じた時は、指頭大、或は團子大であつて、殆ど球狀をなし、やゝシ・ウロに似、硬皮を有つてゐるが、日を經れば、直徑寸餘にも達し、熟するに及べば、外皮が裂けて數片となり、やゝ柿實の狀を呈する。卽ち數裂した外皮は、柿の實のヘタに相當する。乾燥すれば、外皮はまた閉ぢ、潤へばまた開く。胞子は黑褐色。

この胞子が十分に成長すれば、膜が自然に破れて、胞子を飛散する。その狀は恰も黃煙が起るやうである。

「藥籠」は藥種を入れる箱。

唐書の元行冲傳に「元行冲諫ニ狄仁傑一曰、凡爲レ家者、必有ニ儲蓄一。脯醢以適レ口、參苓以攻レ疾。行冲請備ニ藥物之末一、仁傑笑曰、吾藥籠中物、何可ニ一日無一也。」

【胡言亂說】コゲンランセツ。「胡說亂道」に同じ。不合理な言ひわけをすること。

俚諺集覽に「胡說亂道は、もと中華の俗語なり。みだりがはしきことをいふ。」

普通に用ひられる「胡亂」(ウロン)の語も、別に出典はあるが、「胡說亂道」の略語と看ることも出來る。

【默受】モクジュ。だまつて受けること。こゝは、無言のまゝ、他人の己を褒めることばを受けいれること。

【欣々】キン〳〵。よろこぶさま。

孟子の梁惠王下に「擧欣々然有ニ喜色一。」

【閨閤の兒女】ケイカフのジヂ。屋內深く育てられて世間の樣子を知らぬ兒女。

「閨閤」(ケイカフ)は、閨門。閨中。寢所。

史記の汲黯傳に「多病臥ニ閨閤內一、不レ出歲餘。」

【峻谷に入るものは當に葛藟を攀ぢて顚墜を免るべし】けはしい谷にはいりこむものは、つたかづらを手がかりに、上つていつて、ころびおちることを免れることが出來る。

「峻谷」(シュンコク)は、けはしい谷。

「葛藟」(カツルヰ)は、かつら。つた。

「顚墜」(テンツヰ)は、ころびおちること。

孔子家語に「不レ觀ニ高崖一、何以知ニ顚墜之患一。」

【時俗に處る者は當に道義に據りて云々】當世の一般の人たちに交つて生活してゐるものは、道義に據りもとづいて事を行つて、然る後、こゝにはじめて、ひとり立ちに世わたりをすることが出來るであらう。

「時俗」は、その時代の人情・風俗。又、その時代の俗世

間。

張衡の西京賦に「豈時俗之足レ慕。」

「道義」(ダウギ)は、道と義との二つを合はせた語。又德義と同意にも用ひられる。人のふみ行ふべき正しい道。

易經の繫辭に「成性存々、道義之門。」

史記の太史公自序に「春秋以二道義一。」

【反求の功】 失敗などの原因を他に求めずして、己の不行屆に歸する功夫(工夫)をさしていふ。

「反求」(ハンキウ)は、かへりみてその失敗の原因を己に求めること。

中庸に「子曰射有レ似二乎君子一、失二諸正鵠一、反二求諸其身一。」

孟子の公孫丑上に「仁者如レ射。射者正レ己而後發。發而不レ中、不レ怨二勝レ己者一、反二求諸己一而已矣。」

【深造】 シンザウ。造詣の深くなること。「造」は、イタル義。

孟子の離婁下に「君子深造レ之以レ道。欲二其自二得之一也。」

【揚げらるゝも自滿せず云々】 たとひほめられても、自ら滿足し、自ら慢心しないし、抑へられるやうなことがあれば、愈〻發憤して、その學藝に精進するやうになるであらう。

【徐子】 ジ・シ。徐韓の敬稱。徐韓、字は偉長。後漢の末、魏の初の人。陳琳・阮瑀・應瑒・劉楨・孔融・王粲と共に建安の七子と稱せられてゐる。中論の著者

中論は上下二卷より成り、治學・大象・修本・虛道・貴驗等凡そ二十篇より成る。その所說は大體儒家に據つてゐる。

本書に於ける曾鞏の序に「幹字偉長、北海人。生二漢魏之間一。魏文帝、稱二幹懷レ文抱レ質、恬澹寡慾、有二箕山之志一。而先賢行狀亦稱二幹篤行禮レ道不レ耽二也世榮一。魏太祖特命旌レ之。辭以レ疾不レ就。後以爲二上芥長一。又以レ疾不レ行。……況於二魏之濁世一哉。幹獨能考二六藝一、推二仲尼孟軻之旨一、述而論レ之。求二其辭一時、若有二小矢者一、要二其歸一、不レ合二於道一者少矣。」と述べて、頻にその人物を稱揚した。

【身を立つる云々】 中論の虛道篇に「今夫立レ身不レ爲二人之所一譽、而爲二人之所一謗者、未レ盡二爲レ善之理一也。盡二爲レ善之理一、將レ若レ舜焉。人雖二興レ舜不一同、其敢謗レ之乎。故語稱、救レ寒莫レ如レ重レ裘、止レ謗莫レ如レ修レ身、療レ暑莫レ如レ親レ氷。」とある。

「裘」(キウ)は、かはごろも。けごろも。毛衣。

【子思】 孔伋、字は子思、孔子の孫。孔子の高弟なる曾參に學び、當時學者中屈指の人となつた。孔子の歿後、老子の學が盛に行はれ、かつ孔門の諸子中に、異論を生じて歸着するところがなかつた。子思は深くこれを憂へ、中庸を著して、すべて「中」の尙ぶべき所以を述べ、孔子の道の向ふ所を示した。別に孔子の門人原憲も、亦字を子思といつたけれど、別人である。

【能くその心に勝つ云々】 おのれの私欲・私心にうち克つことが出來るものは、人に勝つくらゐは、何でもない。これに反して、おのれの私欲、私心にうち克つことの出來ぬものは、何として人に勝てよう。

「心に勝つ」は、克己と同じであるが、しかし、かやうな用ひかたは餘り多くない。

淮南子に「聖人勝レ心、衆人勝レ欲。」といふ語があるが、この「勝レ心」は克己とは意味がちがふ。

法苑珠林に「勝レ己得二成就一、故號名爲レ佛。」とある「勝己」は、多分克己の意味であらう。

【倣はんかな海や云々】 百川が、如何に海とその深、その大を爭はうとしても、到底これに敵することは出來ぬ。海なる哉、海なるかな、われ〳〵もどうか、大小の流を併せ呑み、清濁の水を二つながら辭せずうけいれる、あの包容力の極めて大きな海に倣つて、精雜密疎の說や、毀譽褒貶の評などを大いにうけいれ、以て己の度量を大きくしたいものである。

一七　新島守

1 **解題**

増鏡の第二「新島もり」の巻の一部分を抄録した。

増鏡について左に概要を摘記しよう。

1 **作者**　不明。

2 **時代**

大　鏡……○文德天皇――後一條天皇○

水　鏡……○神武天皇――仁明天皇○

今　鏡……○仁明天皇――高倉天皇○

増　鏡……○後鳥羽天皇――後醍醐天皇○

獲麟（絶筆）……正慶二年（元弘三年）（一九九〇）

最古の寫本……永和二年（天壽二年）（二〇三六）

これで凡そ想像される。

3 **題材**　後鳥羽天皇から、後醍醐天皇まで凡そ百五十年間の歴史的事實。

試みに他の鏡物の取扱つた歴史的事實との關係を表示すれば、次のやうになる。

4 **體裁**　編年體。尼の物語となつてゐる。作者が力を入れてゐるのは、政治的大事件であるところの、承久の亂・元弘の亂等である。文體は、軍記物の如き冗漫さが少い。緊縮してゐて、きびきびしてゐる。（太平記と比較すればよくわかる）太平記と雖も、平家物語に比べると、現實の問題が强く出てゐるが、なほ文飾が多く、挿話が多く、美化が多い。然るに、増鏡となると、その態度がすつかり批判的となつてゐる。

5 **鏡物**　「鏡」とは鏡に照らして批判するといふ意である。「増」は眞澄の意。「眞」は接頭語。増鏡とは澄んだ鏡といふ意である。枕詞に用ひられることもある。

天の原ふりさけみればますかゞみ、清き月夜に雁なきわたる

（金槐集　秋）

鏡物は、大鏡に始まる。大鏡は平安朝末期の作品である。材料の分量に於ては、道長の榮華の描寫が大部分であるが、なほ、國文といふ氣持に於て、過去の歴史をまとまつた主觀の下に判斷してゐるのである。

紫式部日記・枕草子の底を流れるものは、自照の精神である。西行は自然に逃れようとし、實朝は自我を立て、上に君を、下に民を立て、更に古代精神を憧憬し、生活と文學・宗教との一致に救を求めてゐる。親鸞は純一を、日蓮は統一を、榮西と日蓮とは國家を求めてゐる。かう考へて見ると、平安朝の末期から鎌倉にかけて、人の心は何物かを求めてゐる。求めようとする心が、あこがれる自己を思索の對象とすればそれは自照であつて、そこに隨筆が生れる。思索の對象を自己から社會、社會の過去に擴張すると、それは批判であつて、そこに歴史が生れる。大鏡はかうした必然性の上に立つてゐる。大鏡を繼承した增鏡には、大鏡とちがつた批判がある。即ち增鏡はもつと深刻に、眞劍に考へてゐる。これは時代性の進化であつて、室町時代の初期は、我が國文學史に於て、最も内化してゐるときである。彼の彖好の徒然草を見ると、人事自然に統一があり、統一ある自我をもつて、事物を凝視してゐるのである。枕草子と徒然草とにはかうした大きな根本の相違がある。大鏡と增鏡との差異も亦之に近いものがある。

註譯書
修訂增鏡詳解（和田英松　佐藤球　明治書院

2　編纂の用意

大鏡と相並んで鏡體歴史文學の雙璧と稱せられる增鏡の文體及び作風の一斑を知らしめ、併せて承久の亂の戰況の大略と、その戰後に行つた北條氏の處置、殊に皇室に對して加へ奉つた暴戾な手段、不臣の振舞等について批判せしめたい。かゝる我が國體上の重大問題に對して誤らざる批判を下し、益〻堅實なる尊王愛國の精神を扶植することは、國語教育の一大使命であらねばならぬ。若し夫れ後鳥羽上皇の御悲運に至つては、億兆の臣民、誰かその御いたはしき御境遇に、萬斛の熱涙をそゝぎ奉らぬものがあらう。本課をこゝに採つた所以は、實に以上に述べた多くの理由による。

3　要旨

後鳥羽院が、承久の亂によつて隱岐に流され給うた次第、及びその隱岐に於ける御生活・御すまひを敍した文である。「院のおぼし構ふる事忍ぶとすれど、やう〳〵洩れ聞えて、東さまにもその心づかひすべかめり。」といふその

結果は、かくの通りになつた。あはれ、そのかみの水無瀬の御遊は春の夜の夢であつたか。そして今の隱岐の孤島の波風をわび給ふ御身の上がまことであるか。さりとは餘りにも御痛はしい畏れ多い次第である。本課は承久の亂の一場を想見せしめると共に、各院の御身の上、殊に後鳥羽院について、その御聖德と新島守のかなしい御境涯とを偲び奉らしめたい。

4　概說

第一節（一三〇頁）　院の御企の漏洩。關東の準備と院方の討伐御着手。

第二節（一三一頁——一三二頁二行）　義時、時房・泰時の兩人を都に攻上らせるに當つて、意を含める所あり、かつ、互に別を惜しむ。

第三節（一三二頁三行——一三三頁二行）　一旦出發した翌日、泰時一人立戻つて、若し鳳輦に遇ひ奉らば如何にすべきかを問ふ。義時、また、これに對して指令を與へる。

第四節（一三三頁三行——一三四頁五行）　關東勢、五月雨の中の諸河を打渡して都に攻上る。官軍いくばくも戰はないで敗北する。

第五節（一三四頁六行——一三五頁一一行）　北條氏の朝廷・院方に對する處置。本院は隱岐へ、本院は佐渡へ移され給ひ、主上は退位せさせ給ふ。

第六節（一三五頁一二行——一三七頁六行）　中院は御心から土佐への御渡りあり、やがて阿波に遷らせ給ふ。

第七節（一三七頁七行——一三九頁）　後鳥羽院の御治政の追憶——隱岐御遠流の悲歎——孤島にての御生活。

5　取扱上の注意

◪後鳥羽天皇及び承久の亂について、歴史で學んでゐるところと聯關して取扱ふべきこと勿論である。

◪義時が討手を西上せしめるに當つての思はく、及び泰時が鳳輦に對して奉つて如何にすべきかを問うた時の指令を記した一節は、十分批評的に考察せしむべきである。

◪文章としては、關東勢の攻め上る樣子、そのいよ〳〵都に押し寄せる有樣、これに對する都方の士民のあわて方など、軍記ではあるが、いはゆる「軍記物」の筆とその

趣が異なつてゐるところに注意せしむべく、又、優雅な文辭のうちに、よくその勢ひとおそろしさと人心の實況とを傳へ得てゐる點を味ははしめたい。

▲隱岐へ渡らせ給ふ院の御心を推し奉つてものした抒情的の章句には、院の御心が卽ち記者の心になつてゐるやうなところが、方々に窺はれる。院に對する御痛はしさを涙ながらに書いてゐる記者の筆は、いかにも、ゆかしさの限りである。

▲殊に第七節の院の御治政を追憶しつゝ、隱岐のみゆきをかなしむところは、抒情の筆が徵に入り精を極めてゐる。進んで、その孤島の敍景には、源氏の須磨の卷の筆つきなどをも聯想せしめるものがあり、水無瀨の御回顧、二千里外の風光を賞美し給ふ處、更に新島守の御製に至つては、優雅で、且、雄々しい後鳥羽院の御風格のほどを偲び奉る料として、おそらくはこれに優るものはないまでに思はれる。

6　設問

1　本文に於て、劇的興味の濃やかなところはどこであるか。

2　また、抒情詩的に最も優れたる節は、どこであるか。

3　敍景文・敍事文としては。

4　「おほやけと聞ゆとも自らし給ふことならねば云々」といふ、義時の考を、大義名分上より批判して見よ。

5　泰時が鳳輦に關して、父の意見を質す言動については如何に感ずるか。

6　次の語句の意義を問ふ。

イ、義時君の御爲に後めたき心やはある。

ロ、さばかりの時は、偏にかしこまりを申して身をまかせ奉るべし。

ハ、誠に「柴の庵のたゞしばし」とかりそめに見えたる御宿りなれど、さるかたになまめかしく、故づきてしなさせたまへり。

ニ、あり〳〵てよしなきひとふしに、今はかく花の都をさへたち別れ、おのがちり〳〵にさすらへ給ふ。

7　釋義

【さても】「さて」に同じ。前文を受けて後文をおこすことば。なほ增鏡「新島守」の前文については、原本によつて、一わたり閲讀せられたい。

【院の思し構ふる事】後鳥羽院の御計畫遊ばされた事、卽ち北條氏追討の御事。

「後鳥羽院」は第八十二代の天皇。御諱は尊成（タカヒラ）。高倉天皇の第四皇子。安德天皇が西海にあらせられた壽永二年（一八四三）八月、神器を傳へずして踐祚、建久九年（一八五八）正月御讓位あつて後、政を院中に決し給ひ、西面の武士を院中に置き、親ら刀劍を鍛へて武士に賜ひ、密に朝權の回復を圖らせられた。承久三年（一八八一）關東追討の院宣を下し給うたが、戰利なく遂に北條氏の爲隱岐に遷され給ひ、延應元年（一八八九）その地に崩御あらせられた。壽六十。世に隱岐院と稱し奉る。

【忍ぶとすれどやう〳〵漏れ聞えて】內密にしておかうとしても、おひ〳〵世の中に漏れ聞えて來て。

【あづまざまにもその心づかひすべかめり】關東がた（北條氏）でも、應戰の用意をするやうすである。

「あづまざま」は、關東がた。關東なる北條方。

「心づかひ」は、心を用ひること。用意。準備。

「すべかめり」は、「すべくあるめり」の約。「する樣子だ」といふほどの意。

【あづまの代官】關東なる北條方から遣はされてゐる京都の守護。

「代官」は、或官職の名代。

平家物語、十二、六代御前の條に「時政は鎌倉殿の御代官に、都の守護して候はれけるが。」

【伊賀判官光季】イガノハウグヮンミツスヱ。檢非違使尉伊賀光季。佐藤朝光の長子。北條義時の命を受けて京師を警衛してゐたが、承久の役官軍に攻められて自殺した。

「判官」は、檢非違尉の別名。

【かつ〳〵彼を御勘事のよし云々】まづとにかくに彼の伊賀判官光季を誅すべきであるといふことを仰せられたので。

「かつ〳〵」は、先づとにかくに。まあ〳〵。まづ〳〵。

萬葉集卷四に「玉もりに珠はさづけてかつ〳〵も枕とわればいざふたり寢む」

「御勘事」（オンカウジ）は勅勘。こゝでは誅殺の意。

【遁るべきやうなくて】この上に「伊賀判官光季は」といふ語が省かれてゐることを注意させたい。光季の自殺したのは、仲恭天皇の承久三年（一八八一）五月である。

【まづいとめでたし】戰のはじめに、東の代官光季の切腹してはてたことは、まあ幸先のよいことであると、御鳥羽院は嬉しう思し召された。

【いみじうあわて騒ぐ】たいそううろたへさわいだ。

「いみじう」は、たいそう。非常に。

【さるべくて云々】「さうなるべき理由があつてわが身の滅亡すべき時が來たのだとは思つたけれども。」といふほどの意。尙、この語の上に「北條義時は」といふ語の省かれてゐることに注意させたい。

「北條義時」は北條氏第二代の執權。時政の第二子。源頼朝の兵を擧ぐるや、父兄と共に軍に從つたが、やがて頼朝が兵馬の權を握るに及び、室政子の弟たる故を以て親任せられた。元久二年（一八六五）父に代つて執權となつた。建保元年（一八七三）和田義盛を滅して文武の權を掌握した。承久元年（一八七九）源實朝の弑せらるゝに及んで、左大臣九條道家の子頼經を迎へて鎌倉の主とした。尋いで承久の亂を起し、元仁元年（一八八四）卒した。年六十二。

「あんなれ」は、「あるなれ」の撥音便。

「思ふものから」は、思ふものの。思つたけれども。

【討手の攻來りなむ時に、はかなきさまにて屍を曝さじ】京都（官軍）からの討手が攻めて來たとき、おめ〳〵と死骸をさらすやうなことはすまい。

「はかなきさまにて」は、「力ないさまで」、「おめ〳〵と」などの意。

【おほやけと聞ゆとも自らし給ふことならねば】たとひ官軍とは申しても、上皇さまが御親征遊ばすわけではないから、何も恐れ入つて、おめ〳〵と犬死せずともよからう。又一つには、自分の運のよしあしをためして見るだけのことだといふ氣になつて。

「おほやけ」は、朝廷。官軍。

「かつは」は、一つには。一方には。

「我が身の宿世（スクセ）」は、我が身の前世の因緣。

「思ひなりて」は、さういふ考になつて。

【弟の時房】北條時房。初名は時連。通稱は五郎。時政の子。義時の弟。義時の卒後執權連署となり、修理大夫に任ぜられた。仁治の初卒した。

【泰時といふ一男】義時の長子泰時。北條氏第三代の執權。性寛厚頗る仁慈の心に富んでゐた。承久の亂に京都に攻めのぼり、六波羅に留まつてよく治安を維持した。後執權となるや、叔父時房を連署として共に政務を統べ、「貞永式目」五十一條を定めて土地制度を確立し、裁判の標準を示した。職にあること十八年、仁治三年（一八〇二）卒した。年六十。

【雲霞のつはものをたなびかせて】雲霞のたなびいたやうな大軍を率ゐて。

「たなびかせて」は、率ゐての意。前に「雲霞のつはものを」といつたから、その緣語として、かやうにいつたのである。

【おのれ】こゝは「汝」「その方」「そなた」などの意。

【思ふ所多し】自分（義時）に、いろ〳〵と考へるところがある。

【本意の如く清き死をすべし】自分の望むとほり、いさぎよく討死せよ。

【人に後見えなむには親の顏また見るべからず】人にうしろを見せるやうな卑怯未練なことをしたら、生きて再びわしの顏を見るな。

「見えなむ」は、「見せなむ」に同じ。逃げて背を見せる意で、卑怯な振舞をなすことをいふ。

「親の顏云々」は、生きて歸つて、二度と親の顏を見るなといふ意。

【賤しけれども義時云々】身分の賤しいものではあるが、この義時は、一天萬乘の大君に對し奉つて、うしろぐらい心、卽ち不忠の心をもつてゐようか、決して〳〵、そんな心を持つてはゐない。

「後めたき心」は、公明正大ならざる心。うしろ暗い心。不忠の心。

【されば横さまの死をせむことは云々】自分（義時）は大君に對し奉つてうしろぐらい心はつゆ持つてゐないから、天罰をかうむつてつまらぬ死に方をするやうなことは斷じてありはしない。だから、心强く思ふがいゝ。

「横さまの死」は、つまらぬ死に方。犬死。横死。

【おのれうち勝つものならば云々】　おまへが若しいくさに勝つたら、二度この足柄山や箱根山を越えて鎌倉へ歸つて來い。

「足柄山」は神奈川縣足柄上郡にある山。駿河の國境に起伏し、南東は箱根山に連つてゐる。足柄村竹之下から北足柄村矢倉澤を經て南足柄村關本に至る坂路は、謂はゆる足柄越で、その分水嶺をなすところは有名なる足柄峠である。標高七九五米。

「箱根山」は神奈川縣足柄下郡の西部にある火山の總稱。富士火山系に屬する一箇の獨立火山で、噴火の時期は第四紀の初頃と考へられてゐる。山中には有名なる蘆の湖が湛へてゐる。山中の水は早川・須雲川となつて流れ、その溪谷及び火口に温泉が湧出する。道路がよく發達し、交通が頗る便利で、天然の美と人工の美とが相俟つて一大遊樂境を現出してゐる。

【鎧の袖】　ヨロヒのソデ。鎧の名所（ナドコロ）。肩より肱（カヒナ）の上を被ふもの。左を射向袖（イムケノソデ）、右を馬手袖（メテソデ）といふ。又、大小・形狀によつて、大袖・廣袖・中袖（チュウソデ）・小袖・壺袖・丸袖・置袖・最上袖（モガミソデ）等の種類がある。

保元物語、軍評定に「清盛などがへろ〳〵矢、何程の事か候べき、鎧の袖にてはらひ……。」

【互（カタミ）に今やかぎりと云々】　義時・泰時の父子は、たがひに、今がこの代での見をさめであると考へて、いかにもあはれに心細さうであつた。

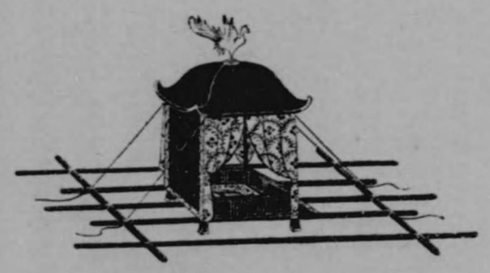
【かくてうち出でぬる又の日】　かやうにして出發した翌日、卽ち承久三年五月二十二日。

【思ひがけぬ程に】　そんな事があらうとも思はぬ時に。

【軍のあるべきやう、大方のおきてまで云々】　軍のはかりごとや、軍法その他一般のさだめなどは、おほせのとほり承知つかまつりました。

【圖らざるに】　思ひがけもなく。意外にも。案外にも。

【辱く鳳輦を先立て云々】　恐れ多くも上皇さまが御車を先立て、御旗をあげられておごそかな御儀式で御臨幸あらせられますところにお



出あひ申しましたら、いかやうに進退いたしましたらよろしうございませうか。

「鳳輦」（ホウレン）は、屋形の上に金色の鳳鳥を据ゑた輿。高く肩の上に舁ぎあげる。天皇の乘御して、御卽位大嘗會・御禊・朝觀・節會など、盛儀の行幸に用ひたまふもの。鳳輿。鸞輿。

續日本後記卷二十、嘉祥三年正月癸未の條に「寄二鳳輦於殿階一、天皇下レ殿、御レ輦而出。」

「臨幸」（リンカウ）は、天子の行幸してその地に臨ませたまふこと。

唐書の儒學傳の序に「數臨幸觀三釋菜一。」

「參りあへらば」は、行きあひ奉りましたならば。「あへらば」は、は行四段活用の動詞「あふ」の已然形「あへ」に完了の助動詞「り」の未然形「ら」がつき、それに助詞假定の「ば」がついたものである。

【泰時とばかりうち案じて云々】　泰時は、しばらく思案して、「よくも問うた。そのことぢや。大君の鳳輦に向つて弓を引きまゐらすことはどうであらう。さういふ時には、兜をぬぎ、弓の弦を切つて、一途に恐れ入りたてまつる旨を申し上げて、わが身を大君に奉るがよい。

「かしこくも」は、よくも。いしくも。

「男」は、泰時をさしていふ。

「偏へに」（ヒトヘに）は、いちづに。ひたすらに。

「かしこまりを申す」とは、恐れ入り奉つて、罪を請ひ奉ること。

「身をまかせ奉る」とは、わが身を上皇の思召のまゝにまかせ奉ること。

【さはあらで】　さうではなくて。上皇は御親征遊ばされないで。

【軍兵（グンビャウ）をたまはせば】　軍勢ばかりをおさしつかはし遊ばされたならば。

【急ぎ立ちにけり】　この上に、「泰時は」の三字が省かれてゐる。

なほ原文には、この次に左の二節がある。

都にもおぼしまうけたることなれば、武夫（もののふ）ども召し集へ、宇治・勢多の橋もひかせて、かたきを防ぐべき用意、心ことなり。公經の大將一人のみなむ、御孫（うまご）（賴經）のこともさる事にて、北の

方、一條中納言能保といふ人の女なり。その母北の方は、故大將（頼朝）のはらからなれば、一方ならずあづまを重くおぼして、さしいらへもせず、院（後鳥羽）の御心の輕き事と、あぶなかり給ふ。七條院（殖子）の御ゆかりの殿ばら、坊門大納言忠信・尾張中將清經・中御門大納言宗家、又修明門院の御はらからの甲斐の宰相範茂など、つぎ〳〵あまた聞ゆれど、さのみは記しがたし。軍にまじりたつ人々、この外の上達部にも、殿上人にも數多ありき。

御修法ども數知らず行はる。やむことなき顯密の高僧も、かゝる時こそたのもしきわざならめ。各〻心を致して仕うまつる。御自ら（後鳥羽）もいみじう念ぜさせたまふ。日吉の社に忍びて詣でさせ給へり。大宮の御前に、夜もすがら御念誦し給ひて、御心の中に、いかめしき願どもを立てさせ給ふ。夜すこし更け靜まりて、御社すごく、燈燈の光かすかなる程に、稚き童の臥したりけるが、俄かにおびえあがりて、院の御前に、たゞ參りに走り參りて、託宣しけり。（神）辱くも、かく渡りおはしましてうれへたまへば、聞きすごし難くは侍れど、一年の御輿ぶりの時、情なく防がせ給ひしかば、衆徒おのれを恨みて、陣のほとりにふりすて侍りしかば、空しく馬牛のひづめにかゝりし事は、今に恨めしく思ひ給ふるにより、この度の御方人は、え仕うまつり侍るまじ。七社の神殿を金銀に磨きまさむとうけたまはるも、專らうけ侍らぬなり。」とのゝしりて、息も絶えぬるさまにて臥しぬ。聞し召す御心地、物に似ずあさましう思さるゝに、只御涙のみぞ出で來る。過ぎにし方悔しう、とりかへさまほし。さま〳〵怠りかしこまり申させ給ふ。山の御輿防ぎ奉りけむ事、必ずしも自ら思しよるにもあらざりけれど、「責一人に」といふらむ事にやと、あぢきなし。中院（土御門）は、他かで位をすべり給ひしより、言に出でてこそものし給はねど、世のいと心やましきまゝに、かやうの御騒ぎにも、事にまじらひ給はざめり。新院（順德）は同じ御心にて、よろづ軍の事などもおきて仰せられけり。

【いつの年よりも】　ことし（承久三年）は。

【富士川】　フジガハ。東海道中第一の急流。山梨縣下の二大川なる笛吹・釜無二川の合流。甲府盆地の南隅から靜岡縣に入り、駿河灣に注ぐ。河中には舟航の甚だ危險な箇所もあるが、鰍澤（カジカザハ）以下は舟運の便がある。下流は大三角洲を作り、分流が多く、河道が屢〻變ずる。流程一六一粁。

【天龍】　テンリュウ。天龍川。遠江の大河。源を長野縣の諏訪湖に發し、木曾山脈と赤石山脈との間を流れて伊那盆地を作り、飯田町の南方八粁の邊から謂はゆる天龍峽の峻を穿ち、三河と遠江との國境を流れること一八粁、遠江に入つて、中部（ナカツベ）で大入川を合はせ、秋葉山の西麓千草で氣田川を合はせ、遠江平野を南流して、掛塚灣の南方で遠江灣に注ぐ。日本有數の急流を以て知られ、上流地方は杉の産地として古來名高い。下流に架した東海道本線の鐵橋は長さ凡そ一、二二〇米、東海道第一の長橋である。流程二一六粁。

【えもいはず】　言ふに言はれぬほど。非常に。

源氏物語、明石の卷に「えもいはぬ入江の水など、繪にかゝば心のいたり少からむ。」

【龍馬】　リュウメ。極めてすぐれた駿足の馬。たつのうま。たつのま。駿馬。千里の馬。

杜審言の詩に「禎符龍馬出、寶籙鳳凰傳。」

【あやしく艱（ナヤ）めり】　非常になんぎした。たいそうくるしんだ。

【君の御武者】　上皇方の兵士。官軍の兵。官兵。

【宇治・瀨田】　兩地は關東から京都へ攻めのぼる關門にあたる。官軍は東口の瀨田と南口の宇治とで橋を撤し、大河（宇治川）を前にした天然の天險に據つて東軍を防いだのである。

「宇治」（ウヂ）は、今の京都府久世郡宇治町。京都市の南方十七粁。宇治川の西岸にある。京都への關門に當り、古來軍事・交通の要地である。附近一帶は宇治茶の産地としてその名を知られてゐる。町の内外には、平等院・宇治上下社・宇治の浮塔・萬福寺・興聖寺・三室戸寺等の名蹟が多く、名産には宇治人形がある。

「勢田」（セタ）は、滋賀縣栗太郎瀨田町。勢田川の左岸に沿ひ、東國から京都に入る要路にあたる。そこにある瀨田橋は古來名高い。

【世の中ひゞきのゝしるさま言の葉も及ばずまねび難し】　世上一般に大さわぎしたさまは、到底言葉にも筆にもい

ひあらはしにくい。

「ひゞきのゝしる」は、騒動すること。

「まねび難し」は、まねをすることが出來ない意。筆紙につくし難い意。

【遠き世界に落下り】遠國へ逃げてゆくことを誇張して言つたのである。

【安げなく】心が安らかでないやうで。不安心の様子で。

【いかゞあらむと】これは次の「君も御心亂れて」を隔てて「おぼし惑ふ」にかゝつてゐる。このさきどうなる事かと、後鳥羽院も、御心が亂れて、たいそう御當惑の御様子であつた。

【豫ては】カネては。平素は。いつもは。

【まことの際(キハ)になりぬれば】いよ〳〵といふ場合になると。

【心あわたゞしく云々】うろたへさわいで、顏色をかへたやうすなどを見ると、一向頼みになりさうもない。

【六月十日(ミナヅキ)あまりにや】仲恭天皇の承久三年(一八八一)六月十餘日のことであつたらうか。(實は六月十五日)

【荒磯に高潮などのさしくるやうにて】その勢のすさまじいさまの形容。

「荒磯」(アライソ)は、荒磯のうちよせる磯。ありそ。

續古今集卷六、冬に「あらいその岩たちのぼり寄る波のはやくもかへる年の暮かな」

「高潮」(タカシホ)は、津波。

同じく增鏡に「その頃波風吹きて、たかしほといふものの入りて、いと恐しく、屋ども皆流れて、寢殿もゆるぐ。」

【亂れ入りぬれば】都をさして。

【上下たゞものにぞ當り惑ふ】都の上下を通じて、物につきあたつたほどの大狼狽・大混雜であつた。

【あづまよりいひおこするまゝに】東の義時から命令して來たとほりに。

【かの二人の大將軍】泰時と時房。

【はからひおきてつゝ】京都の事をそれ〴〵に處理して。

【保元の例(タメシ)にや】保元の亂のあと始末のとき、崇德院を讃岐國に遷し奉つた例によつたのであらうか、院の上を都の外に遷したてまつるさうだといふうはさが立つたので。

「にや」の次に「あらむ」などの語が省かれてゐることに注意させたい。

「保元の亂」は後白河天皇の保元元年(一八一六)京都の白河殿に於ける事變。もと鳥羽法皇は御子崇德天皇を愛し給はず、遂に强ひて御位を御弟近衞天皇に讓らしめ給ひ、更にその崩後は崇德上皇の御期待に背いて後白河天皇をお立てになつたので、上皇は甚だ御不平であつた。一方摂關家に於ては、左大臣藤原頼長は父忠實に愛せられ、兄忠通を凌いで内覽の宣旨を蒙つたが、その驕恣の故を以て鳥羽法皇に忌まれ、後白河天皇の御即位を機會に内覽をさしとめられた。そこで頼長は崇德上皇に頼つて再び政權を掌握しようともくろんだ。たま〳〵保元元年鳥羽法皇は崩御あそばされた。そこで頼長は崇德上皇を擁し奉り、源爲義その子爲朝及び平忠正を味方に引き入れて兵を白河殿に集めたが、後白河天皇方なる爲義の長子義朝、忠正の甥清盛等の夜襲に逢つて大敗した。かくて頼長は流矢にあたつて薨じ、上皇は讃岐に御遷幸、忠正・爲義は斬られ、爲朝は伊豆の大島に流された。

【女院】ニョウヰン。後鳥羽上皇の御生母七條院、土御門上皇の御生母承明門院(源在子)、順德院の御生母修明門院、土御門の中宮陰明門院(藤原麗子)の御方々。

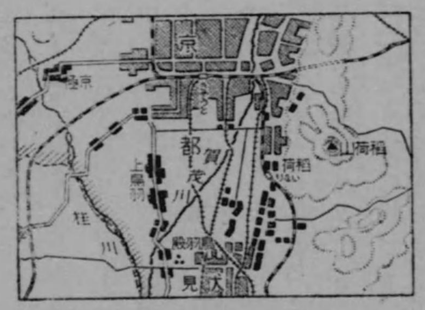
【宮々】後鳥羽院の皇子雅成親王(役後、但馬に流され給うた)、頼仁親王(備前に流され給うた)等。

【處々におぼし惑ふこと更なり】處々で、途方にくれていらつしやることは、申すまでもないことである。

「更なり」は「いふも更なり」の略。いふまでもない、といふ意。

【本院】後鳥羽院。

【隱岐】オキ。山陰道の一國。出雲國の北方約八十粁の海中にある火山島。隱岐は沖の義。神代から知られた古國で、承久の役には後鳥羽法皇、元弘の亂には後醍醐天皇の行在所となつた。今は島根縣の所管。



【鳥羽殿】トバドノ。もと山城國(京都府)上鳥羽に

あつた離宮。應德二年(一七四五)白河天皇の御造營。御讓位の後、こゝに遷御。天永三年(一七七三)まで仙洞御所としてこゝで院政を行はせられた。後鳥羽院はこれを御繼承あそばされたのである。鳥羽離宮ともいひ、平安城の南に當るので、又城南(セイナン)離宮ともいつた。その址は今の京都市伏見區の竹田から芹川の北方に至るあたり。

【網代車のあやしげなるにて云々】 まことにお粗末らしい網代車で、七月の六日に御入御あらせられた。

「網代車」(アジログルマ)は、普通に御所車といふもの。牛車の一種。竹又は檜の網代で車箱の屋形及び左右の脇を張つたもの。庇はない。その網代地及び物見に花鳥等の繪模樣をえがく。おもに四位・五位・中將・少將及び侍從などの乘用する車。これに上皇の乘らせたまふ御有樣が、おもひやられる。

「あやしげ」は、いやしげ。見ぐるしげ。きたなげ。

枕草子卷三に「人もあはなむと思ふに、更にあやしき法師、あやしのいふかひなき者のみ、たまさかに見ゆる、いと口をし。」

【今日を限りの御ありき、あさましうあはれなり】 都の中の御幸は今日が最後であらせられるとおもへば、何とも申し上げられぬほどおいたはしくおもはれる。

「あさましう」は、驚きあきれるさま、きものつぶれるさま。

【ものにもがなやとおぼさるゝもかひなし】 どうか、朕の境遇をもとのとほりにとりかへすことの出來るものならばなあ」とおぼしめしても、今更いたしかたはない。

「ものにもがなや」は、源氏物語、帚木の卷の空蟬のうた「とりかへすものにもがなや世の中をありしながらの我が身と思へば」の一句を借り來つたのである。

【その日やがて御ぐしおろす】 その日に、早速御落飾遊ばされた。

「やがて」は、早速。すぐさま。たゞちに。

宇津保物語、藏開、中に「まかで侍りしまゝ、やがてまうでてはべりしに。」

「御ぐし」は、御髮。

宇津保物語、國讓、上に「御とし十七歳ばかりにて、御ぐしいとめでたし。」

「おろす」は、髮を剃ること。薙髮。剃髮。

宇津保物語、國讓、下に「御ぐしおろし給うてかくれぬ。」

【まだいとほしかるべき御程なり】 御剃髮には、まだおいたはしい程の御年である。

【信實朝臣】 ノブザネアソミ。鎌倉時代の歌人且畫家。初名隆實。右京權大夫に累進した。畫を父隆信に學び、又光長を慕つて妙手の稱があつた。その筆にかゝる北野緣起繪卷物の如きは天下の絕品と稱せられてゐる。又肖像畫を描くに長じてゐた。晩年入道して寂西と稱した。文永二年(一九二五)卒した。年八十九。

「朝臣」は上古の姓(カバネ)の一。アソンともアソともいふ。天武天皇の十三年(一三四五)十月に定められた八姓中の第二。源・平・藤原・橘・菅原・大江・藤原等の諸氏は皆朝臣である。

【七條院】 シチデウヰン。高倉天皇の典侍藤原殖子(ヤスコ)。修理大夫信隆の女。後鳥羽院の御生母。七條院と稱し、落飾して貞如智と號せられた。安貞二年(一八八八)薨去。御年七十二。

【御船に奉りて】 御船にお乘り遊ばされて。

「奉り」は、お乘りになる意。ら行四段、自動詞。

この語は、他動詞にもなるが、意味はそれ〴〵ちがふ。

【この世の同じ御身ともおぼされず】 先には院中で何の御不足もあらせられなかつた萬乘の尊が、今御遠島とは、まるで現世に同じ御身とは思はれぬ。

【いみじういかなりける世々の報にかとうらめし】 どういふ宿世の因果應報やらと、たいそう殘念に思召された。

「いみじう」は、下の「うらめし」にかゝる副詞。たいそう、まことに、などの意。

【新院】 シンヰン。順德上皇。第八十四代。御諱は守成。後鳥羽天皇の第三皇子。正治二年(一八六〇)立皇太弟。承元四年(一八七〇)受禪御卽位。承久三年(一八八一)仲恭天皇に御讓位。承久兵亂の事によつて佐渡國に遷幸、仁治三年(一九〇二)九月その國で崩御。壽四十六。同國眞野陵に葬り奉つた。天皇は最も和歌に秀でさせられた。世に佐渡院とも申す。

【佐渡の國】 越後の北方日本海中にある孤島。本陸から約三〇粁。主峯は金北山（一、一七三米）。兩岸の相川町は金山によつて榮え、東部の夷（エビス）は新潟市の副港の地位にある。新潟縣の所管。

【帝】 ミカド。こゝは仲恭天皇。第八十五代。御諱は懐成。順德天皇の第四皇子。御母は東一條院藤原立子。建保六年十月降誕、立太子。承久三年（一八八一）四月受禪。幾ばくもなく承久の兵亂が起り、まだ卽位の大禮を行はせられるに及ばずして同年七月御位を遜れ、文曆元年（一八九四）五月崩御。壽十七。山城の九條院に葬り奉つた。世に九條廢帝と稱し奉つたが、明治三年七月二十三日、仲恭天皇の號を御追贈あらせられた。

【卯月】 ウヅキ。陰曆四月の異稱。卯（ウツギ）の花の咲く月の義か。

【これや始なるらむ】 原文には、この次に左の一節がある。

唐土にぞ四十五日とかや位におはする例ありけるとぞ、唐の書讀みし人のいひし心地する。それもかやうの亂やありけむ。

【上達部】 カンダチベ、又カンダチメ。「公卿」（クギャウ）に同じ。

「公」は攝政・關白及び大臣。「卿」は大中納言、參議及び散一位並に三位以上。

【殿上人】 テンジャウビト。四位・五位の人、又は六位の藏人の殿上に昇ることをゆるされたもの。くものうへびと。うへびと。雲客。

「殿上」とは、宮中清凉殿の殿上の間の略。

【その事に觸れにし類】 その企にあづかつた人々。

【重く輕く云々】 或は重く、或は輕く處刑せられるやうすは、まことに大變である。

【中院】 チュウヰン。土御門天皇。第八十三代。御諱は爲仁。後鳥羽天皇の皇長子。御母は承明門院源在子。建久

六年十二月御降誕。同九年正月立太子並に受禪、同年三月卽位の大禮を行はせられた。承元四年（一八七〇）十一月御位を順德天皇に讓らせられ、尋いで太上天皇の尊號を受け、御落髮遊ばされた。承久の亂後土佐の國に遷幸、ついで阿波に移御。寛喜三年（一八九一）十月その地に崩御。壽三十七。

【初よりしろしめさぬことなれば】 はじめから御存じないことであるから。

【父の院】 後鳥羽院。

【のどかにて】 心靜かに。安閑として。

【御心もて】 御自身の御心で。自らお望みなされて。

【閏】 ウルフ。太陰曆で、十　箇月の年。

蜻蛉日記卷中に「……といふほどに、うるふさ月にもなりぬ。」

【土佐國】 四國の南半を占める國。修して土州といふ。北東から北西にわたつて、四國山脈が連亙し、阿波・伊豫と界し、東は紀伊水道に、西は豐後水道に臨む。又、南は太平洋に面し、室戸・蹉跎の兩岬が東西から突出して、土佐灣を擁してゐる。高知縣の所管。

【幡多】 ハタ。土佐國幡多郡。同國の西端にある大郡。中世は、土佐の畑と稱し、貴顯の配流せられるところとなつた。

【去年の二月ばかりにや】 コゾのキサラギ。ばかりにや。去年（承久二年）の二月頃であつたらうか。

【若宮いできたまへり】 若宮さまがお生れになつた。

「若宮」、御名は邦仁。後に御卽位あつて、後嵯峨天皇と申し奉る。

後嵯峨天皇は第八十八代。御諱は邦仁。土御門天皇の第二皇子。仁治三年（一九〇二）北條氏の推戴によつて御卽位。時に御年二十三。寛元四年（一九〇六）正月御讓位。御深草・龜山二天皇の御宇、前後三十年間、院中に在つて政を聽かせられた。文永七年（一九三二）崩。壽五十三。

【承明門院】 ショウメイモンヰン。源在子。宮人。法勝寺執行能圓の女。後鳥羽上皇に仕へ、宰相宮と稱した。土御門天皇の御生母。承明門院と稱した。正嘉元年（一九一七）七月薨去。御年八十七。

【御兄人】 オンセウト。御兄上。

「兄人」は「セヒト」のう音便。あに。せ。
枕草子巻一に「まらうどにもあれ、御せうとの君たちにもあれ。」

【通宗の宰相中將】　ミチムネのサイシャウチュウジャウ。
參議中將源通宗。
「宰相」は參議の唐名、參議は古昔太政官中に置かれた官職。大臣及び大中納言と共に宮中の政治に參議したもの。四位の人を以てこれに任じ、公卿の列に加はる。おほまつりごとびと。
「宰相中將」とは、參議にして近衛中將を兼ねる人をいふ。

【娘】　土御門天皇の典侍源通子。（左表參照）

通親―┬通宗―通子―（後嵯峨天皇御生母）
　　└通方
　　└在子（土御門天皇御生母、承明門院）

【通方】　源通親の次子。經宗の弟。累進して大納言に至り、嘉禎三年（一九〇〇）薨。年五十。その歌は新勅撰・續後撰・續古今・續拾遺・新後撰・風雅等の諸集に入つてゐる。

【留め奉りて】　若宮（邦仁親王）を。

【北面】　ホクメン。院の御所を警固する武士。白河上皇の御時始めてこれを置かれた。內裏の瀧口、東宮の帶刀にあたる。
古今著聞集卷五に「御厩の御馬に北面のものを乘せて馳せよ。」

【下﨟】　ゲラフ。身分の卑いものをいふ。「﨟」はもと僧侶が安居の一期をいひ、その修行を重ねることの多少によつて上・中・下﨟の稱あるより、轉じて一般に身分の高下にいふこととなつた。
「安居」（アンゴ）とは、僧侶が陰曆四月十五日より九十日間籠居して業を修すること。但し纖譯名義集には四月十六日よりとある。

【召次】　「召繼」とも書く。院の御所の雜事を務め、時を報じたり、取次をしたりする下官をいふ。
西宮抄に「院中雜事中、御隨身勤レ夜、召繼奏レ夜。」

【あやしき御手輿】　粗末きはまる御手輿。
「手輿」（タゴシ）は、又腰輿ともかく。高さが腰のほどまでの輿。手に下げて舁く。肩輿に比して甚だ卑しい。
和名抄卷十一、車類に「腰輿（太古之）。」

枕草子卷九に「御輿・たごしなどもてかへる。」

【道すがら】　道の程。途中。道中。
宇津保物語、俊蔭に「あはれなることを道すがら心苦しくおもほして。」

【雪かきくらし】　雪が、一寸先も見えぬほど降りしきることをいふ。
「かき」は接頭語。「くらし」は「暗し」の形容詞を動詞に用ひたもの。

【吹雪して】　「吹雪」といふ名詞を動詞としたもの。
「吹雪」（フブキ）とは、風がはげしく雪を吹きまくること。雪が烈しい風に吹かれて亂れ降ること。

【來しかた往く先も見えず】　今までに通過して來た方角も、これから往くべき前途の方角も見えない。

【わりなきこと】　すぢみちのたゝぬこと。ひどいこと。ことは、苦しくて堪へがたいことをいふ。
大和物語卷六に「雨のわりなく侍りつれば、やむまではかくてなむ。」

【うき世にはかゝれとてこそ云々】　「宿世の因緣でかくあらねばならぬやうに生れて來たのであらうに、――自分がかうしてつらい目にあふのは、前世の宿緣であらうに――わが涙はこの道理をわきまへず、むやみに落ちてくるはい。」との御意。誠に恐れ多い御製である。

【せめて近きほどにと云々】　せめて京都にお近い所にお還りあらせられますやうにと關東から奏聞したので、後には阿波の國に御遷幸あらせられた。
この土御門天皇は北條氏討伐の議にあづからせられなかつた。隨つて北條氏もお遷し申さなかつたのを、御自身で土佐の幡多へおこしになつたので、北條氏もお氣の毒におもつて、かやうにお取りはからひ申し上げたのである。

【阿波に遷らせたまひにき】　本書にはこの次に左の一節がある。
さてもこの度世の有樣、げにいとうたて口惜しきわざなり。或は父の王を失ふためしだに一萬八千人まではありけりとこそ佛も說きたまひためれ。まして世くだりて後、唐土にも日の本に

も、國を爭ひて戰をなすこと、數へもつくすべからず。それも皆一ふし二ふしのよせはありけむ。若しは筋異なる大臣、さらでもおほやけともなるべきざみの、少しのたがひめに、世に隔たりて、その恨みの末などより、事起るなりけり。今のやうに、むげの民と爭ひて、君の亡び給へるためし、この國には、いと數多も聞えざめり。されば承平の將門、天慶の純友、康和の義親、いづれも皆猛かりけれど、宣旨には勝たざりき。保元に、崇德殿の世を亂りたまひしだに、故院（御白河）の御位にて、うち勝ち給ひしかば、天照る御神も、御裳濯川の同じ流と申しながら、なほ時の帝を護り給はする事は强きなめりとぞ、ふるき人々も聞えし。又信賴の衞門督、おほけなく二條の院をおびやかし奉りしも、遂に空しき屍をぞ道のほとりに捨てられける。かゝれば、古りにし事を思ふにも、なほ、さりともいかでか、上皇・今上數多おはします王城の、徒に亡ぶるやうやはあらむと、賴しくこそおぼえしに、かくいとあやなきわざの出來ぬるは、この世一つの事にもあらざらめども、迷の愚なる前には、猶いとあやしかし。

【さても本院は】　原文にはこの文字はない。前文を省略したので、便宜上、編者がさし加へたのである。

【六つにて……十三年おはしましき】　原文には「四つにて……十五年おはましき」とあるのを、史實に照らしてかやうに改めたのである。

【土佐院】　土御門上皇。

【佐渡院】　順德上皇。

【天の下は同じことなりしかば】　天下の御政治は皆院（後鳥羽）から出て、御位にあらせられると同じく、大御心のまゝであつたから。

【萬機の政】　バンキのマツリゴト。天下の政治。帝王の御政務。

書經の皐陶謨に「兢々業々、一日二日、萬機無レ曠。」

註に「兢々、戒謹也、業々、危懼也、一日二日、言二其日之至淺一、幾微也。萬機者言二其幾事之至多一。」

朗詠に「我后一日之譯、萬機之餘。」

【百の官を從へたまへりしその程】　多くの役人をおしたがへ遊ばされてゐたその間。

百の官（モ、のツカサ）は、多くの役人。百官。

【吹く風の草木を靡かすよりも云々】　庶民が皆聖德に靡き伏し奉つたことをいふ。

論語に「君子之德風也、小人之德草。草上之風、必偃。」

【遠きをあはれみ近きを撫でたまふ云々】　遠近の民を、すべて惠みあはれませたまふをいふ。

【雨の脚】「雨の絲」などいふと同じで、降る雨をいふ。一說に、雨が盛に降るときは、脚があるやうに見えて降り過ぎるから起つた語だといふ。ともあれ、こゝは、院の御惠の極まりなく多いことをしげく降る雨にたとへたのである。

蘇東坡の詩に「踈々雨脚長。」

長景陽の詩に「雨足灑二四溟一。」

蜻蛉日記に「今日は廿四日、雨のあしいとのどかにて、あはれなり。」

【津の國のこやのひまなき政】　萬機の御政をきこしめすために御寸暇さへもあらせられぬことをいふ。

「津の國のこや云々」は、後拾遺集、戀、和泉式部の歌に「津の國のこやとも人をいふべきに際こそなけれ葦の八重ぶき」とあるを取つたのである。「こや」は地名の「昆陽」（コヤ）に「小屋」と「來よ」との兩つの意をかけたもの。

一首の意は、「人に對して來いといふべきだが、葦の八重葺の小屋の際間がないやうに、人目が繁くて、寸分の際もないので、何とも仕方がない。」

こゝは、それを萬機の御政の際なく御忙しくあらせられることに轉用してあることは、前に述べた通りである。

但し、「津の國のこやの」は「ひまなき」にかゝる序でもある。

なほ、「津の國のこやの」を次の「難波の葦の云々」と相對せしめ、これと緣を持たせた辭樣の技巧にも注意させたいものである。

【難波の葦の云々】　天下がよく治まつて、難波の葦のごとく亂れないやうにと祈らせられた。

前の句「葦の八重葺」に對して、同じ名物の「難波の葦」を取り來つたのである。なほ「難波の葦」は、みだれの序でもある。

つまり、「萬機の政をみそなはすにつけても、天下がよく治まつて、亂れないやうにと祈らせられた。」といふのである。

【藐姑射の山の峯の松も云々】 院の御繁榮を、藐姑射の山の峯の松が愈〻繁茂して、互にその枝をつらね、千代に八千代に榮えゆくことにたとへていふ。

「藐姑射（ハコヤ）の山」は、支那で仙人が住んでゐるといはれる山。やがて仙洞（上皇の御所）ののどかな御住居にたとへていふ。

莊子の逍遙遊に「藐姑射山、有二神人一居焉。肌膚如二氷雪一、綽約若二處子一。」

【霞の洞】 カスミのホラ。仙人の住むところ。轉じて、院の御所、卽ち仙洞御所をいふ。

なほ、本釋義、「水無瀨殿おぼし出づるも云々」の次に挿入した本文參照。

夫木抄卷二十一に「春の色をいくよろづ代かみなせ川かすみのほらの苔のみどりに」

【空ゆく月日の限り知らず云々】 空ゆく月日の限りなきが如くいつ〳〵までも榮えさせたまうて、平和に御生活あそばさるべきであつたのにまあ。

【あり〳〵て】 在り經來て、とゞのつまりに。ありてのはてに。たうとうおしまひに。たうとう。

萬葉集卷十二に「あり〳〵て後もあはむとことのみをかたくいひつゝ逢ふとはなしに」

源氏物語、夕顏の卷に「あり〳〵て、をこがましき名をとるべきなり。」

【よしなきひとふしに】 つまらない、ちよつとした事のために。北條氏御討伐の御事をさして申す。

【花の都】 ハナのミヤコ。都の美稱。又、美しい都の意にも用ひる。

後拾遺集、羇旅に「ふる里の花の都に住みわびて八重たつといふ出雲へぞ行く」

【おのがちり〴〵にさすらへ】 三上皇及び皇子たちが、皆遠國にうつされたまひ、おの〳〵離散し給うたことをいふ。

「さすらふ」は、よるべなくさまよふこと。流浪。流離。漂泊。

源平盛衰記、七、成親卿流罪の條に「知らぬ國、習はぬ旅にさすらへつゝ」

【磯の苫屋】 イソのトマヤ。磯邊にしつらへられた苫屋。

「苫屋」とは、苫（菅や茅などで編み、雨露を防ぐに用ひるもの）で葺いた粗末な小屋をいふ。

夫木抄卷三十五に「大井川きしのとまやの竹柱うかりしふしやかぎりなりけむ」

【軒を並べて】 漁夫などと近く御軒をならべさせられて御住居遊ばされたことをいふ。

【おのづからことふものとては】 たま〳〵おとづれまゐらすものとては。

「おのづから」は、こゝでは、たま〳〵、ふと、などの意。

「ことふ」は、おとづれること。訪問。

後撰集、卷中に「年をへて花のたよりにことゝはばいとゞあだなる名をや立ちなむ」

【浦に釣する海人小舟】 浦に漕ぎ出して、釣糸を垂れて魚を釣つてゐる漁舟。

「海人小舟」（アマヲブネ）は海人の乘る小舟。「蜑小舟」とも書く。

萬葉集卷二十に「白波の　やへをるがうへに　あまをぶね　はらゝに浮きて」

【鹽燒く煙の靡く方をも云々】 海邊で鹽を燒いてゐるその煙が或方向へたなびいて行く、それをわが故郷を指し示す案内かとおぼしめして、物思ひにしづませられ、じつとこれを見つめさせたまひながら日を送らせられるとの意。

「しるべ」は、てびき。案内。こゝは故郷の方をさし示す案内。

「ながめすごさせたまふ」は、じつと見つめて、物おもひに沈ませたまひながら、日を送らせられる。

【御すまひどもは云々】 かゝる遠島の御すみかは、凡そ半年とか一年とかその時を限られてあるだに、定めなき人生の事とて、いつ無常の風にさそはれるかも知れず、その間も無事で居られるやらどうやらと心がかりになつてうしろめたく心細いものであるのに、ましていつを限りといふこともなく、そこで一生を送りたまふべき御樣は、口をしいといふもいひ足らぬほどで、この上もない

殘念な御事である。

「眺めすごさせたまふ」の下に句點をきらず直につゞけて見る說の方が解し易いやうである。

「それまでと」は、或期限を切つて、それまでの間と。

「明日知らぬ世」は、明日はどうなるか分らない無常の人生。定めなき人生。

「うしろめたさ」は、心もとなさの意。氣がかりなことにいふ。

拾遺集、春に「朝まだき起きてぞ見つる梅の花夜の間の月のうしろめたさに」

「まいて」は、まして。況んや。

【何時を果とか】 御遷幸の期限の盡きるときがいつと定まつてゐないことをいふ。

【廻り逢ふ】 別れた人々と。

【雲の波煙の波の幾重とも知らぬ境】 雲煙縹緲として非常に遠く隔つたこの隱岐の島。

【世を盡くし給ふ】 御一生を終らせたまふ。

【くちをしともおろかなり】 口惜しいといつたくらゐでは、なか〳〵もつて言ひ足らない。

【このおはします處】 院の現におはしますこの場所。

【海づらよりは少し引入りて】 海よりは少しひつこんで。

「海づら」は、海面。うみ。

【山陰にかたそへて】 山陰の方にかたよせて。

【大きやかなる巖のそばだてるをたよりにて】 大きな巖の高くそびえ立つてゐるのを頼みとして、それに依りそへて。

「大きやか」は、大きなさまをあらはす語。

枕草子卷十二に「大きやかなるわらはの……。」

【松の柱に葦葺ける廊など云々】 松を柱として、葦を屋根に葺いたほそどのなどのやうすは、たゞほんの形ばかりで、簡略をきはめてゐる。

「けしきばかり」を「怪しい程」の意に見て、なみ〳〵ならず、ひどく、などいふ義に解する人もある。これでも意味は通じる。

「廊」(ラウ)は、古昔の寢殿造で、對屋と寢殿との間などを連絡するために設けた細長い建物。わたどの。ほそどの。わたらう(渡廊)。

「ことそぐ」は、事を省くこと。手數を省くこと。簡略にすること。

源氏物語、夕顏の卷に「かの人の四十九日、……ことそがず……こまかに誦經などせさせ給ふ。」

【柴の庵のたゞしばしと云々】 たゞちよつとの間住ませたまふべきかりそめの御宿と見えた御住居ではあるけれども。

「柴の庵のたゞしばし」は、新古今集、雜、西行の歌に「いづこにも住まれずばたゞ住まであらむ柴のいほりのしばしなる世に」とあるによつた語。

一首の意は、「このはかない人生のことであるから、安樂に住むべきところがなければ、何も强ひて住まうとするには及ばない、住まなくてもよい。」

「柴の庵の」の「柴」は、下なる「しばし」のしばに相應じてゐるのである。

【さるかたになまめかしく云々】 それ相應に、品よく、由緒ありげにお造りあそばされてゐる。

「さるかたに」は、それ相應に。

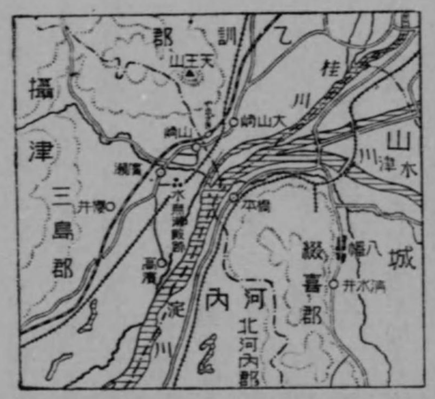
源氏物語、總角の卷に「うちあはぬすみかの樣なれど、さるかたにをかしくしなして。」

「なまめかしく」は、あでやかに、上品に、みやびやかに、優美に。

徒然草に「すべて神の社こそ、捨てがたく、なまめかしきものなれや。」

「故づきて」は、由緒ありげに。子細ありげに。

源氏物語、末摘花の卷に「古代の故づきたる御裝束。」



【水無瀬殿おぼし出づるも云々】 水無瀬に屢〻御幸のあつたことを思ひ出し給ふにつけても、この度の御わびずまひを夢のやうに思召さるゝこと

であらう。

水無瀬殿(ミナセドノ)は、今の大阪府三島郡島本村大字廣瀬に造營せさせられた御鳥羽院の御離宮。

増鏡「おどろの下」の條に、

鳥羽殿・白河殿なども修理せさせ給ひて、常に渡り住まはせ給へど、なほまた水無瀬といふところに、えもいはずおもしろき院づくりして、屢〻通ひおはしましつゝ、春秋の花・紅葉につけても、御心ゆく限り、世をひゞかして、あそびをのみぞしたまふ。所がらも、はる〳〵と川にのぞめる眺望、いとおもしろくなむ。元久の頃、詩に歌を合はせられしにも、とりわきてこそは、

見渡せば山もとかすむ水無瀬川ゆふべは秋となに思ひけむ

かやぶきの廊・渡殿など、はる〳〵と艶にをかしうせさせ給へり。御前の山より瀧おとされたる石のたゝずまひ、苔深きみ山木に枝さしかはしたる庭の小松も、げに〳〵千代をこめたる霞の洞なり。前栽づくろはせ給へる頃、人々數多召して御遊などありける後、定家の中納言、いまだ下臈なりける時に奉られける、

あり經けむもとの千とせに古りもせでわが君ちぎる峯の若松

君が代にせきいるゝ庭をゆく水の岩こす數は千世も見えけり

【はる〳〵と見やらるゝ海の眺望云々】　隱岐の國から海上を眺めやりたまふ御心を白樂天の詩「三五夜中新月色、二千里外故人心。」の意によつて描寫し奉つたのである。

【今さらめきたり】　多くは「この景色について、この詩の風情を思ふも今更のやうに覺える。」といふ意に說くが、それよりも、この一句は敍事の文でなくて、例の老尼が語り去り語り來つて、「二千里の外ものこりなき心地する」といふに至り、ふと氣付いて「いやこれはしたり、かゝる白樂天の句などを事新しげに申すは今更めきたり。」と一語を挿んだものと見、どこまでも老尼の實際に語つた樣に書いたとした方がいゝかも知れぬ。

【潮風のいとこちたく吹來るを聞しめして】　潮風がたいそうひどく吹いてくる音をお聽き遊ばされて。

「潮風」(シホカゼ)は、海上から吹いて來る風。海風。

「こちたく」は、「ことといたく」の約。はなはだしく。ひどく。

枕草子卷九に「例のすびつに火こちたくおこして。」

【われこそは新島守よ云々】　「われこそ新にこの隱岐の島にうつり來て島守となつたものであるぞよ。されば波風よ、心して荒くは吹くなよ。」といふ御心である。誠に恐れ多い御製である。

原本には、この御製の次に、更に左の一首の御製がある

同じ世にまたすみのえの月や見む今日こそ外におきの島守

8　挿圖

後鳥羽天皇御影　藤原信實筆

筆者藤原信實については語釋欄に詳記してある。

鋼代車

「輿車圖考」所載の圖に據つた。說明は語釋欄にある。

一八　月の前

1　解題

歌人西行法師が、曾て鎌倉を過ぎ、途に頼朝に逢つて、その館に連れ行かれ、和歌及び弓箭の事を談じた時の事を小説化したものである。原文は籐簍冊子卷四に收めてある。作者上田秋成は、この文末に

此話服子遷所ノ撰大東世語德行篇出焉。余偶ニ讀レ之思レ之。釋氏捨レ家一身無住。而況是等小物、何有レ所レ用耶。然德行過當耳。由レ是今戯以ニ斯言一演レ之。惟恐損ニ害古人一乎。

と附記してゐる。服子遷は服部南郭のこと、卽ちその撰に成つた大東世語の德行篇を讀んで「月の前」を作つたといふのである。「是等小物」とは、文中にある銀猫のことである。

「籐簍冊子」は、秋成の歌文を類聚したもので、全部六卷に分つ。秋成、居常一箇の籐簍を傍に置き、その綴るところの歌文は皆この中に入れ、人が訪ひ來ると、これに蓋をしたといふ。因つて「つゞらぶみ」の名があるのである。

2　作者

上田秋成　ウヘダアキナリ

初名は東作と言つた。餘齋・休西・鶉廼舍・無腸翁及び剪枝畸人・和譯太郎の號がある。（後の二つの號は專ら戯作に用ひた。）

大阪の人で、攝津の長柄・京都等に移居し、晩年は南禪寺の中に住んで終つた。その居を鶉居と號した。蓋し鶉は常居なしと言ふに因る。南禪寺の居は八疊敷ばかりの小屋で、入口に麻の暖簾を掛け、自筆で鶉居と記した由、田能村竹田の筆記に見えてゐる。文化七年（一四六九）七十八歳で歿した。自製の肖像は、今なほ同寺に在るといふ。彼と親交の最も厚かつたのは小澤蘆庵であつたが、又太田南畝とも知己であつた事は、彼に南畝子の東行を送る歌があり、南畝にも籐簍冊子後序及び長夜室の記があるので知られる。秋成の學系は古學で、大阪城勤番の加藤宇萬伎の門に學んだ。和

上田秋成

歌は萬葉に私淑して時調と異なり、文章も亦卓絶してゐた。父は不詳。母は大阪曾根崎の遊女だと一般に信ぜられ、四歳で孤となり、上田氏に養はれたといふ。彼が自像の筥に書きつけた文には

無レ父、不レ知二其故一。　四歳母亦捨。
有レ倖上田氏所レ養。　六歳養母逝。
性多病時々發二焉癇一。　後母依二慈愛一成長。

とあつて、その生立の悲惨であつたことを知るに足る。かくて三十七歳頃までは遊蕩的の生活を絶たなかつたやうである。その後實生活に趁はれ、醫を學んだ事もあつた。詳しくは、膽大小心錄・癇癖談等に見えてゐる。又、村瀨栲亭が作つた無腸翁の傳がある。小說家としての秋成には諸藝聽耳世間猿・當世妾氣質・雨月物語・春雨物語などがあり、國語學者としての秋成には、呵刈葭・冠辭考續貂・靈語通などがある。

3　編纂の用意

徳川時代の小說家として有名な上田秋成の文を讀ましめて、彼の作風とその國語學者としての造詣を知らしめ、兼ねて鎌倉時代の歌仙と稱せられる西行法師の眞面目を知らしめて、富貴・權勢・物慾に恬澹なる彼の風格を窺はしめたい。

4　要旨

典雅で氣品があり、恭敬でしかも彈力に富んだ文辭の裡に、西行の性格・面目があざやかに描かれてゐる。敍事もいゝが、賴朝との會話が巧である。會話のうちにも殊に西行の詞には胸がすくやうな思がする。その歌道について、古の帝王を例にして進言するところ、弓馬の道について「たゞ一言の忘れがたきは云々」と答へてゐるところが、堂々として痛快を極めてゐる。そこには、どこか利かぬ氣があり、又多少皮肉な處のある人柄も想はれる。しかし、全篇の山は、大將殿から贈られた銀猫を、門前の童に與へて立ち去るところに在ることはいふまでもない。こゝには、その富貴・權勢・物慾を眼中におかない面目が最もよく窺はれる。この一事件——恐らくその時は西行の意に介しなかつたであらうこの一事件が、賴朝の心に如何なる波瀾を起し、その賴朝の心中の波瀾が、また後の西行の心に如何なる波瀾を立たしめたかといふことを考察せしめるのが、本課の主要な一仕事でなければならぬ。尙、秋成の小說家として、はた國語學者

としての位置をも知らしむべきである。

5　概說

第一節（一四〇頁——一四一頁一行）賴朝、鶴が岡參詣の途上、西行を見出でて館に連れ行く。

第二節（一四一頁二行——一四二頁末行）賴朝、西行を一間の簀子に召して、先づ和歌の道を問ふ。

第三節（一四三頁——一四四頁六行）次に、弓馬の道について問ふ。西行は遠慮しつゝも、答へるところは堂々たる意見である。

第四節（一四四頁七行——一四五頁三行）月見の酒宴となる。賴朝は西行の寒さを思ひやり、白銀の猫の形した火取を取らせる。

第五節（一四五頁三行——一四六頁七行）翌くる朝、西行は館を辭するに當つて、その銀猫を童に與へて去る。賴朝、この事を聞いて不快に思ふ。

第六節（一四六頁八行——一四七頁）西行も亦後にその賴朝のことを耳にして嗟歎する。

6　取扱上の注意

◆「解題」及び「主眼」にも一言した通り、この一篇の創作の動機乃至眼目は、かの猫の處置に在るのである。釋氏は家を捨て、一身無住の境涯にある。是等の小物何の用ふる所あらんや……全くさうである。賴朝が氣を惡くしたのも一應は無理はないが、大して憤慨するにも及ばないことである。尙、秋成が「今戲れに斯の言を以て之を演ぶ。惟、恐らくは古人を損害せんことを。」といつてゐる一言がいかにもゆかしい。古人とは勿論西行を指すのである。

◆今左に本課に省略された原文のうち、取扱上參考となるべき部分を錄して見よう。

教科書一四一頁一〇行「東人さへ聞知りたるぞ」の次に

「文字の數だに歌とのみ思ひしも、かう指し向ひては、もののふの負けじ心もあらずなりぬるぞ。八百日ゆく濱の眞砂の中には玉とて拾ひ收めたらんを、語りて聞ゆべく」

と賴朝の言葉が續く、それから、西行は、

いみじく畏まりて、「思ひかけず大木の御蔭に參り侍れば、いともかゞやかしきにぞ、たゞ夢路たどるやうに侍りて、聞え奉る

べきことも侍らず。さとき御まなこに見現はされ侍るこそ、いとも有りがたけれ。（中略）君にもかねて學ばせ給ふとも漏り聞き奉る。天のしたまつりごちたまふ御うつは物の大いなるに、おぼしよらせ給ふには、かけてもおよぶまじきをさへおぼし知り侍る。大空に羽打ちつけて飛ぶたづの聲、霜枯の淺茅がもとの蟲の音、いかで取りなめて聞ゆべき。あなかしこ。」と申す。大將殿打ちゑませ給ひ

とあつて、「弓取りし人の」と本課の文になるのである。

▲一四五頁一〇行、猫を貰つた童については、

童打ち驚き、「これ見給へ、見も知らぬ法師の、見も知らぬ物を賜ひつるは。」とて、青侍に見すれば、目口をはたけ、「かくたぶときはうもつを、誰かは得させん。ぬすみやしつる。」と云ふ。「さらに／＼、道のそらにかゝるものやはあるべき。あなおそろし、殿に奉り給へ。」と云ふ。やがて御館にもて參り、仕ふる君を呼び出で、しか／＼の事となむ申す。

とあつて、「いとあやし……」と續いてゐる。

7 設問

1　賴朝の鶴が岡詣の「よにいかめしく貴き御有樣」は、如何なる修辭によつて表はされてゐるか。

2　この話によつて、西行の風丰は、如何に想像されるか。

3　西行の賴朝に對する言葉について、感じたるところを述べよ。

4　次の辭句の意義を說け。

イ、かしこみたいまつれる人。

ロ、「よにいかめしく」の「よに」。

ハ、月花のなげきの譽は、物の心なき東人さへ聞知りたるぞ。

ニ、あてになよびかにのみ詠みうつすべくするこそこの道のいみじき累なれ。

ホ、君がさとくたけき御心のまゝにうちいで給はむには、今の世の人たれかは立ちあへ奉らむ。

8 釋義

【月の前】八月十五日の事であるからこの題を附した。西行と賴朝との面會に關する物語である。

西行法師は鎌倉時代和歌の名手。俗名佐藤義清。藤原秀鄕九世の孫。父を康淸といふ。母は監物淸經の女。鳥羽天皇の元永元年（一七七八）に生れた。

鳥羽上皇に仕へて北面の士となり、左兵衛尉に任ぜられ

た。弓術をよくし、兵法に通じてゐた。上皇はその才を愛して登庸しようと思召したが、常に厭離の志あり、遂に保延六年（一八二〇）二十三歲で出家し、圓位といひ、大寶房と號し、又西行と稱した。

和歌は天稟で、自然の熱愛家であつた。一个の笠、一條の杖、身を雲水に託し、高野に籠り、吉野に隱れ、熊野に參り、伊勢に詣で、鎌倉に下つて賴朝に見參し、進んで奧州に至り、西は中國より四國に渡り、更に筑紫に遊んだ。その間興至れば和歌を詠じ、常に自然を友

西行道に幕府に逢ふ圖　（篠簱册子刊本）

とした。かくて

「ねがはくは花のもとにて春死なん
　そのきさらぎの望月のころ」

と詠じた通り、素懷を遂げて、建久元年（一八五〇）二月十六日、洛東雙林寺の草庵で入寂した。享年七十三。その家集を山家集といふ。

吾妻鏡文治二年八月の條に「十五日己丑、二品御二參詣鶴岡宮一。而老僧一人徘二徊鳥居邊一。怪レ之以二景季一令レ問二名字一。給之處、佐藤兵衞尉憲淸法師也、今號二西行一云云。仍奉幣以後、心靜遂二謁見一。可レ談二和歌事一之由被二仰遣一。西行令レ申二承之由一。廻二宮寺一。奉二法施一。二品爲レ召二彼人一。早速還御、則招二引營中一。及二御芳談一。此間就二歌道並弓馬事一。條々有下被二尋仰一事上。

西行申云、弓馬事者、在俗之當初、慤雖レ傳二家風一、保延三年八月遁世之時、秀鄕朝臣以來九代嫡家相承兵法燒失。依レ爲二罪業因一、其事曾以不レ殘二留心底一、皆忘却了。」

詠歌者、對二花月一動レ感之折節、僅作二卅一字一許也、全

不レ知二奥旨一。然者彼無レ所レ欲二報申一云々。然而恩問不二等閑一之間、於二弓馬事一者、具以申レ之。卽令下俊頼記申置其詞上給、綵被レ專二終夜一云々。十六日庚寅、午尅、西行上人退出。頻雖二抑留一、敢不レ拘レ之。二品以二銀作猫一被レ宛二贈物一。上人乍レ拜二領之一、於二門外一與二放遊嬰兒一云云。是請二重源上人約諾一、東大寺料爲レ勸二進沙金一、赴二奥州一以二此便路一巡二禮鶴岡一云々。陸奥守秀衡入道者、上人一族也。」

義清は憲清・則清とも書いてある。

【文治それの年】　後鳥羽天皇の文治某年。

實は、文治二年（一八四六）で、源義經が藤原秀衡に投じた年である。

【鎌倉の大將殿】　源頼朝。頼朝は當時正二位右近衛大將であつたから、かやうにいふ。

「頼朝」は鎌倉幕府第一代の將軍。義朝の第三子。平治の亂の時、年十三、父兄に從つて頗る戰功を立てた。軍遂に敗れて平宗清に捕へられたが、清盛の繼母池の禪尼の請によつて、死を免れ、伊豆の蛭ケ島に流された。治承四年（一八四〇）以仁王の令旨を奉じて兵を擧げ、伊豆を略した。やがて石橋山の戰に敗れて安房に逃れたが、再び勢を得て間もなく關東を服し、居を鎌倉に構へた。後、弟範頼・義經を遣はして源義仲を粟津に滅し、尋いで平氏を一ノ谷・屋島に攻め、遂にこれを壇ノ浦に滅した。幾ばくもなく義經と隙を生じた。頼朝はこれを機として諸國に守護・地頭を置き、文治五年（一八五〇）入京して權大納言に任じ、右近衛大將を兼ねたが、間もなくこれを辭して鎌倉に歸り、翌年前右大將家として諸役所を置き、幕府の職制を整へた。同三年征夷大將軍に任ぜられた。正治元年（一八五九）正月薨。年五十三。世に鎌倉殿、又鎌倉右大將といふ。この墓は鎌倉町法華堂址の背後の丘陵にある。

【鶴が岡の宮居】　鶴岡八幡宮。國幣中社。俗に鎌倉八幡といふ。神奈川縣鎌倉郡鎌倉町字雪の下に鎭座。祭神は應神天皇。配祀は仲哀天皇・神功皇后。康平六年（一七二三）源頼義が男山八幡宮を油比（ユヒ）鄕に勸請したのに始まり、頼朝の時に至つて現地に遷座した。源氏の氏神、武家の守護神として尊崇せられ、鎌倉時代はもとより德川時代にも厚く保護を加へられた。今の新殿は德川時代の建築にかゝり、大正十二年關東大震災修理後を加へたものである。その一の鳥居は特別保護建造物として指定されてゐる。

【例の事】　いつものこと。恒例のこと。

【御前おひ御あとべつかうまつれる】　前驅をなすもの及び後方におつきそひ申してゐるものども。

「御前」（ミサキ）は「前」（サキ）の敬語。さきばらひ。前驅。

源氏物語、夕顔の卷に「みさきの松ほのかにて、いと忍びていでたまふ。」

「あとべ」は後方。うしろのかた。しりへ。

【渚に遊ぶ蘆鶴のあゆみして】　渚に遊んでゐる鶴の歩むやうにそろ〳〵とねりあるいて。

「渚」（ナギサ）は海・河などで、水陸のさかひに近いあたり。なみうちぎは。みぎは。

萬葉集卷十五に「玉しける清きなぎさをしほみてばあかずわれゆくかへるさに見む」

「蘆鶴」（アシタヅ）は鶴の一名。蘆の生ずる水邊に多く居るよりいふ。

萬葉集卷六に「ゆの原に鳴く蘆たづはわがごとく妹にこふれや時わかず鳴く」

【つらを亂さずねり出でさせ給へるを】　行列を亂さず、そろそろと歩みいでさせられてゐるのを。

「つら」は、列。行列。

源氏物語、須磨の卷に「常世いでて旅の空なる雁がねもつらに後れぬほどぞなぐさむ」

風雅集卷十八に「後れてもかついつまでも身をぞ思ふつらに別るゝ秋の雁がね」

「ねる」は「遷」の字をあてる。徐かに歩むこと。そろそろあるくこと。

神樂歌に「しろがねのめぬきの太刀をさげはきて奈良の都をねるは誰が子ぞ」

【大路】　オホヂ。幅の廣い路。おほどほり。「小路」（コウヂ）の對。

萬葉集卷十五に「あをによし奈良の大路は行きよけどこの山道はゆきあしかりけり」

【かしこみたいまつれる人】　恐れ入つてゐる人。恐懼してゐる人。

「たいまつる」は、「たてまつる」の音便。

宇津保物語、藤原の君に「このあないをかたらひたいまつらむとて。」

大鏡卷上に「放語したいまつりたるを。」

【お前拂ひしてあなとだにいはせず】 お前拂ひをして、「ああ」といふことばは一つさへも出させず。

「前拂ひ」（サキバラひ）は又「先拂ひ」とも書く。貴人など通行のとき、路の先にある人を追ひ拂ふこと。又、そのもの。さきおひ。さき。みちおさへ。警蹕。

「あな」は、感歎のことば。「あゝ」と同じ意味に用ひられる。

古語拾遺に「阿波禮・阿那（アナ）於茂志呂。」

小町集に「世の中にいづら我が身の有りてなしあはれとやいはむあなうとやいはむ」

【よにいかめしく貴き御有樣なり】 ことの外にいかめしく貴い御樣子である。

「よに」は、世の中にとりわけて。ことの外に。

枕草子卷三に「世にいみじうをかし。」

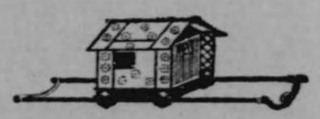
「いかめし」は、威あつておごそかなこと。

宇津保物語、藏開、下に「きんだち、御さうぞくいとめでたくして、おとゞ拜み奉りに參り給へり。いといかめし。」

【かへりまをしして】 八幡宮へお禮まゐりをして。

「かへりまをし」は、(一)かへりごとを申すこと。返辭を奏聞すること。復命。復奏。(二)神佛へのお禮まゐり。報賽。こゝは(二)の意。

宇津保物語、藤原君に「よろづの神たちに返り申しのみてぐら奉らむとて、河原に出で給ひて。」

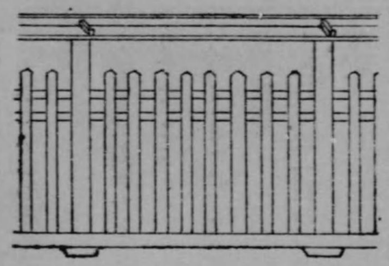


【手輿】 タゴシ。普通の如く肩で舁かずに、手で腰の邊に提げて行く輿。

我が國、古は、輿は至尊の乘御にのみ限られ、その外には只皇后と齋主とが輿に召さるるのみで、天皇と雖も遜位の後は御輿に乘り給ふことはなかつた。

然るに中世以來、上皇は申すに及ばず、公卿以下もまゝ輿に乘ることがあつたが、これは强ち法度を破つたのではなくて、便利上、牛車の車箱の下に轅を添へて作りなし、これを手輿といつたので、まことの輿の如く肩上に舁きあるいたのではない。

武家の世に及び、公家とは反對の制を立て、常は輿を乘用とし、公儀大禮の時のみ車を用ひた。



【御階の忌垣】 ミハシのイガキ。八幡宮の御階段のそばにある忌垣。

「忌垣」は「齋垣」とも書く。神社のめぐりの垣。又、いみがきとも、瑞籠（ミヅガキ）ともいひ、その外構へに設けるのを玉垣といふ。

萬葉集卷十一に「ちはやぶる神のいがきもこえぬべし今はわが名の惜しけくもなし。」

【畏まりをる法師のあなるが】 かしこまつてゐる法師がゐたが。

「畏まる」は、正しく坐すること。危坐すること。

法師（ホフシ）は、佛法に精通して教法の師となるもの。又、僧の通稱。のりのし。ほつし。

宇津保物語、貴宮に「いふばかりなく泣きまどひて、歸りてすなはち法師になりにけり。」

「あなる」は、「あるなる」の略。

【見上げ奉るつらつき】 賴朝を見上げたてまつる西行のかほつき。

「つらつき」は、かほのやうす。かほつき。

源氏物語、若紫の卷に「いと白くあてに痩せたれど、つらつきふくらかに。」

【なほ人ならず思しけむ】 たゞの人でないと思召されたのであらう。

「なほ人」は直人。家柄のひくい人。門地の貴からぬ人。よのつねの人。たゞびと。

源氏物語、帚木の卷に「又なほ人のかむだちめなどま

でのぼりたる、われは顔にて。」

【御輿ぞひの若侍して聞かせ給ふ】 御輿に添うて警備してゐる若侍にいひつけて、その姓名・素性をおたづねになつた。

【ゆくりなきに驚きたるさまして】 突然の御下問に驚いたやうすをして。

「ゆくりなき」は、思ひがけないこと。不意なること。卒爾。突然。

土佐日記に「眺めつゞくる間に、ゆくりなく風吹きて。」

【雲水にありか定めずはべるものにて云々】 行雲流水のやうに、ありかをどこと定めないで、諸方をうろついてゐるものでありまして、名は圓位と申します。

「雲水」は笈を負ひ、師を尋ね、道を問うて行雲流水の如く天下の宗師に遍参し、一定の住居を定めぬ僧をいふ。又、行脚僧とも、雲衲とも、衲子とも稱する。

豐干禪師の偈に「一身如二雲水一悠々任二去來一。」

黄庭堅の詩に「淡如二雲水僧一。」

「ありか」は、在處。所在。

古今集、雜下に「風の上にありか定めぬ塵の身はゆくへも知らずなりぬべらなり」

【穴熊のたけき獲物の類ならで云々】 昔支那の西伯といふ大名が獵をしようとして渭水の北に赴き、はからずも、たけき獲物のかはりに太公望といふ賢人を得て、つれ歸つた前例によつて、この法師をわがやかたへつれてかへらう。

史記の周記に「西伯將レ獵、卜レ之。曰非レ龍、非レ彪、非レ熊、非レ熊、非レ羆、所レ獲霸王之輔。果遇二呂尚於渭水之陽一。」

十八史略に「有二呂尚者一、東海上人。窮困年老、漁釣至レ周。西伯將レ獵、卜レ之。曰、非レ龍、非レ彪、非レ熊、非レ羆、非レ虎、非レ貔、所レ獲霸王之輔。果遇二呂尚於渭水之陽一。與語大悅曰、自二吾先君太公一曰、當下有二聖人一適レ周、周因以興。子眞是邪。吾太公望レ子久矣。故號レ之曰二太公望一。載與俱歸、立爲レ師。謂二之師尚父一。」

【御館】 ミタチ。おんやかた。

「館」とは、貴人の邸宅をいふ。むろづみ。やかた。

土佐日記に「守の館より呼びに文もて來たれば。」

【御裝束】 オンシャウゾク。オンサウゾク。

こゝは御身仕度、御みなり、御いでたち、御服裝、などの意。

【おほとなぶら】 「おほとのあぶら」(大殿油)の略。古、大殿即ち朝廷の正殿に於てともした燈火をいふ。「油」といふ語を燃火の義に換へて用ひたのである。

延喜式に「大嘗會悠紀・主基二國進二大殿油二斗一云々。」

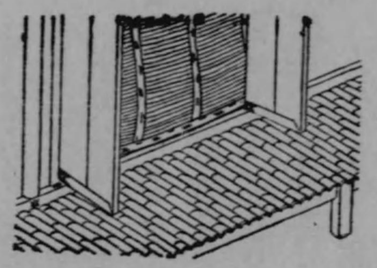
源氏物語、帚木の卷に「おほとなぶら近くて、文どもなど見たまふついで。」

【おまし】 主上の御座す處。こゝに轉じて將軍の居る處、即ち賴朝の座席。

宇津保物語、俊蔭に「寢殿の南のひさしにおましよそはす。」

【簀子】 スノコ。竹の編んだもの。又、床・緣などに作つた簀。又、專ら簀子の緣をいひ、更に板緣をもいふやうになつた。

貞丈雜記に「簀子といふ事古書にあり。座敷の外に細き板を横にならべて打ちたる緣なり。板と板との間のすきまありて、竹簀をあみたる如くなり。」



【見おこせ給ひて】 こなたを御覽なされて。

「見おこす」とは、こなたを見ること。見やること。眺めやること。

源氏物語、若紫の卷に「尻目に見おこせ給へるまみはいと恥づかしげにけだかう。」

【藐姑射の山の御宮仕せし人】 院中に仕へた人。こゝは西行が出家以前に佐藤義清と稱し、鳥羽上皇に仕へて北面の士であつたことをいふ。

「藐姑射の山」はもと仙人の住處。やがて仙洞即ち上皇のおはします所をいふこととなつた。

莊子の逍遙遊に「藐姑射山、有二神人一居焉。肌膚如二氷雪一、綽約若二處士一。」

山海經に「廉山之南三百八十里曰二藐姑射之山一無二草木一多レ氷。」
萬葉集に「こゝろをし無何有の郷におきたらばはこやの山をみまくちかけむ」
拾遺愚草に「よろづ代ときはかきはにたのむかなはこやのやまのきみがみかげを」
增鏡、新島守に「藐姑射の山の峯の松もやう〳〵枝を連ねて、千代に八千代を重ね、霞の洞の御住居、いく春を經ても空ゆく月日のかぎりしらず。」

【世をはかなきものに思ししみて】しみ〴〵とこの世を無常なものと感じて。
「はかなし」とは、長く保たぬこと。たのみにならぬこと。もろいこと。
古今集に「行く水に數かくよりもはかなきは思はぬ人を思ふなりけり」

【身は黑うやつしたれど】佛門に入つて墨染の衣に身をやつしてはゐるけれど。
「やつす」は、俏・寠などの字をあてる。やつれしめること。やつ〳〵しくすること。見すぼらしく樣子をかへること。目だたぬやうに姿をかへること。
源氏物語、玉葛の卷に「いみじく忍びやつしたれど、清げなる男どもなどもあり。」

【月花のなげきの譽は物の心なき東人さへ聞知りたるぞ】そなたが月や花を詠歎して、これを歌によむことがうまいといふ評判は、風流の何たるを心得ぬ東國人さへもよく聞いて知つてゐるぞ。
「なげき」は、長息（ナガイキ）の約。こゝは詠歎の意。
「物の心」は、風流の心。
「東人」（アヅマビト）は東國の人。あづまづ。あづまど。
源氏物語、宿木の卷に「わりごや何やと、こなたにもいれたるを、あづま人どもにも食はせ。」

【弓取りし人のもとの心の猛（タケ）きには云々】以前武士として弓矢を取つていくさにたづさはり、心のたけくつよいものは、そのよむ歌も、とかく率直露骨で、おくゆかしい處がないと聞くが、それはほんたうのことか。
「あからさま」は、にはか、かりそめ、明白などの義であるが、こゝは、あらは・明白卽ち露骨の意に見たい。
謠曲、鵜祭に「これ猶祕する事なれば、あからさまには申し難し。」

【歌は武士（モノ、フ）の云々】和歌は、武士のあら〳〵しい心では到底よむことの出來ないものだと大宮人どもはうはさをしてゐるとか聞いたが、果してさうか。
「沙汰」（サタ）は、世間の評判。うはさ。風聞。
宇治拾遺物語に「何をか取るべきとおの〳〵言ひさだするに、横坐の鬼のいふやう。」

【物とも思はぬを】物の數ともおもはぬけれども。何ともおもはないが。

【みそぢ餘りのまなび】五七五七七の五句、三十一文字の和歌のけいこ。
「みそぢ」は、三十。

【心のおくるゝはいかに】氣おくれのするのは、どういふわけか。心が臆病になるのは、なぜであるか。
「おくる」とは、氣おくれのすること。臆病。卑怯。
源氏冷泉節に「恩愛執着に命を惜しみ、思はぬおくれも取ることあり。」

【弓矢とらして】弓矢を御手にお取りなされて。
【調】シラベ。調子。こゝは和歌の調子。歌調。
【いでや】「いで」を強めていふ感動詞。いやもう。
古今集、俳諧歌に「われをのみ思ふといはばあるべきをいでや心はおほぬさにして」

【益荒雄心】マスラヲゴコロ。ますらをの心のやうな。たけくつよい心。剛勇の心。
「益荒雄」は、たけくつよい男子。「益荒男」とも書き、ますらたけをともいふ。
萬葉集卷一に「ますらをと思へるわれも。」

【あてになよびかにのみ詠みうつすべくすることこそ云々】高尙に優美にばかり、歌をよまうとすることこそ、和歌の道に取つて、たいへんによくないことでございます。
「あて」は、「貴」の字をあてる。たふとく、みやびやかなること。あてやか。上品。高尙。
宇津保物語、國讓、中に「見ればいとあてになまめきたる人の。」